第一章 生活環境の民俗

間

との交流

が行

われ

ていたのである。

# 第一節 開発と土地利用

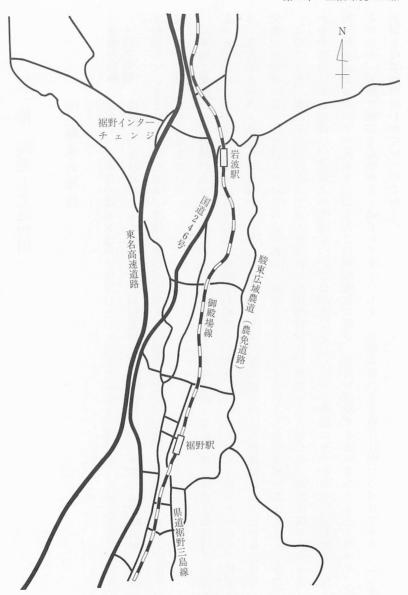
## ○ 地域の環境

が 東西 位置してい と南北の道 の 平下( るという事実である。 最初 前提とし に な 裾 1+ 野 'n 市 ば 0 なら 環境を地形に留意し 市 域 な い の民俗をとらえるに ことは、 裾 野 ながら考えてみよう。 市 0) あ 東 侧 たっ には箱 T は 根 箱 Ш 裾野 根山 が、 しと愛鷹 西 市の民俗と生活を考えるに 側 には愛鷹 Щ から 山岩 15 が、 は 富 北 1: 西 Ш 15 は あ 0 ったって、 富 存 在 士 を Ш

抜きにして語ることはできな

愛鷹山 は、 点から考えたときには、 深良用水が芦 根 は背後に富士山 Ш しと愛鷹 Ш ノ湖から水を引いているということもあり、 は を控えていることもあ 市 人間 域 0 人々 や民俗 にとっ 0 動きを遮断する機能をも果たし て、 り その生活に重要な意味を持 山越えをするなどということは皆 仙石原方面 T 5 0 との交流はなか 1= T か S たが、 のように 無 であ 市 に考えら 域と他 0 2 たようで たわけ れ 地 域との る。 では あ 箱 ない 交流 根 Ш ようだが 15 0 5 ò T 観

か わり でこそ、 市 域 0 を通 については東西に、 ような、 東西 る道 に延び 東西を山 VE つい て見ると、 る道路 岳によっ 世 が多く造られ 間との交流については南北に延ばしていく要因になったことと思われる。 ほとんどの道 てさえぎられた地 てきてい が 南 る 北 理 が、 15 的環境は、 延 市 び、 域 東西 0 道は基本的には 当然のことながら、 「を横 断す る 道が少ないことに気づくであろう。 南 北の 裾 流 野 市 れ 域 で あ 0 広 り が b この道にそっ たとえば を、 山 2 0) 近 裾 7 かる



図表 1-1 裾野市の主要な道路

御

殿

場

裾

野

市

域

0

駅は

裾

野駅と岩

一波駅で

あるが、

ح

n

3

の駅

から

御殿場

線

に乗り、

沼

津

P

御殿場と

の交流

が

成

に

走る御殿場線も

重要

へな存

で

ある。

立

L

7

5

る

大場川があ 島 ほ 自 が 動 市 \$ まで行 車 との交流は、 0 とも を渡 が 島 あ 記線は、 まり 便利 き 0 市 て三島 普 夜のうちにまた歩いて帰って来ることも 街 であるため 地 及 2 仮 L 市 に 0 まで行くことが 裾 な に 野 入 裾野 5 時 り に 代でも、 島 駅 現 線 ほ 前を起点とすると、 が、 在 ぼ できたようで、 で ح 6 は 直 線 の道路 つ とも重要な幹線道路 朝 で三 タの を歩 島 ラ 0 駅前 昔 市 5 ツ 0 て三島まで出 シ 街 若 あ 1 か 地 3 2 時 ま 衆は、 旧二四 たとい で に 続 と言 は 1, 一六号 う。 渋滞 夜 T T 0 てよいだろう。 5 15 る。  $\exists$ 0 \$ へ入り、一方では、 見ら た。 7 裾 ワ 佐野の IJ れ 野 るほ (夜 か ? ら三 П その どで あ 9 たり 島 をし ある。 ために、 平 か 向 たあとで二 らで 松 カン う道 裾 カン \$ 裾 野 3 野 伊 路 市 歩 市 か は 豆 島 域 5 3 島 0 ح 0 T 南 田 人 0 0 女郎 時 々 県 は 間 道

たとえば、

その

\$

0

とも代表的

なものは、

島市

と裾

野市

を結

ぶ県道裾野三

島線と、

現

在

0

玉

道

ĮŪ

六

一号で

道路 3 演習場を使うように 市 に となっ ٤ 几 後に 続 六号は、 現 ている。 T 在 0 る 旧 旧 なお、 特に、 な 几 几 り 六号も、 六号 沼 旧 旧二 に 津 現在 四 匹 な か 一六号 一六号 3 0 戦 0 13 車 は戦前 は \$ ・を通 御 几 0 殿場 で 六号も、 から あ す ため 線 とほ 細 裾 に 1 ぼ平行 土 野 の道として存在し 市 日 域を 米 i 行政協定 てお 南 北 に貫 り に基づく 沼 き てい 津 市 南 たが、 1 は長泉町を P 御 わゆる 殿場市 戦 长後、 行 政道路とし 経 との交流 米軍 て沼 から 津 IH に 市 T H \$ 整 本 備 軍. 北 3 VI は れ 重 御 かゝ 要な わ 殿 3 b

裾 野 市 域を世 間 15 結 W 0 け る媒体として、 道路と同じように南北

0 御 殿場 線に 0 い て、 沼 津や三島 の人々が ヤ 7 セ ン (山 山 線)とい う呼称をも って呼ぶ場合が あることは、 南北

に長

小山町

は

1

ず

れ 3 つく沼津

\$

間

部 や三

に存在すると認識

され

5 側

か らで 0

あろう。

御

殿

から

あ

る。

お

そ

島 理

か 的

3

見

れ

ば、

そ に 示

0

0

裾

野

市

御 味

殿 深

開

放さ

n

た裾

野

市

域

0

地

状況を端的

6

0

とし

て興

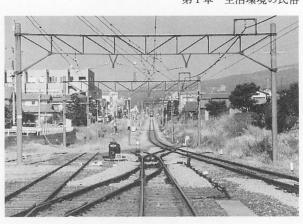


写真 1-1 御殿場線の勾配 (平松)

七

ン

な は

0

で

あ

る。

線

沼

津を起点として考えれ

ば山間

部

向

か T 北 す

2

T る

走

7

い

る

か

3

ヤ

どに、 御 F. 駅 が約 に立ち、 津 殿場線 もちろん、 約三六六ばの高度になっ 市 土 0 大岡 にそっ 地 一四次、 北方を向 0 駅 これ 高 度 が 7 は土 約 南側 岩波駅が約二 から 高 5 て南北 < 地の高低の実際を正確に見たときにも言えることで、 かる ら土 なっ に続 てい 7 長泉町の下土狩駅 地 匹 5 の高低を見てい 八次 る。 る。 く線路を見たとき、 L 御殿場線にそって北 御殿場市に入り富士 12 から 0 くと、 て から 約 踏 四二次 沼津駅 み切 御殿場線 ~ b 商駅 行 などで線路 市 から の線路 け 海 域 スでは まで 抜約 ば行くほ 行 八次 裾 0 囚 野 0

畑だりのけ う。 できる。 天元かりち たとえば、 生町を結 ぶ踏 市 域 2 0 切 X b 女 が が あ よく利用 こるが、 ここから北側を見ると、 す る 踏 3 切 0 0 0 に 裾 急勾配で北側 野駅 0 す ぐ北 が高 側 くなっ 0 裾 野 7 踏 いることを理 2 切 b と呼

配

が、

ほとんどの位置

で北へ

向

け

て上

りに

なっ

ていることに気づくで

あ

3

ば

れ

る平松と茶

解

することが

のような土地の高低による線路 の勾 配 は か つて鉄道事故 の原因 0 0 になっ たこともあ 2 たようであ る。 現 在

\$

が

海

約

四

で

あ

る

0

で

市

域

0

北

西

部

が

2

か

KC

高

地

に位

置

L

7

る

が

ŝ

か

が

わ

れ

る

で

あ

0 抜

ような土

地 ドバル

の高低

は

仮

に裾野駅を起点として、

須山

街道

を御む

宿 5

上がケザ か

田<sup>t</sup>

金沢を経て、

今里、 つろう。

下

和

闽

須山、

な 15 は  $\mathbf{H}$ 信号 覆し多くの なく、 8 か かっ 0 な 3 五 多くの人々によって記憶され 所 た h \$ 3 現 H 在 後 0 か あ の九月 死傷者 1= 0 0 岩 考 原 b えら 波駅 因 か を 3 六 が 出 き H れ あ 0 る 2 すとい ところは か なくなり、 た の裾野 0 , う事 か 信号 \$ 故であ 駅北 L ている事故として、 そ 所 n でし な 0 側の急勾配で起こった大規模な脱線事 た 1 2 が、 た。 カュ めに急勾 \$ 南北 東海道 事 散 0 配 0 一九二三(大正 あとレ 高低差に 0 0 本線 線路を裾野 1 で あ よる急勾 ル が 2 曲 駅 た。 一二)年、 まで突 酡 T 沼 津 が 1 たとい 故 な 方 走 ちょうど関東大震災が け 面 が れ あ り ば ĵ 向 る。 か そ カン 3 う下 当 ح 0 まま裾 時 0 ような b レ 列 御 1 一殿場 ル 野 車 p 大 駅 0 事 刻 あ 0 ブ 車 構 故 VE そ 内 15 1 は 丰 0 月 \$ が な 2 0

気 朝 IH 0 な ポ E 几 た は 六 この 号 ポ L 沿 " 踏 という音が早く ル 1 K 0) 2 霜 家 切 から 々 り 下 á でもそ たり b Ź 、なっ 0 0 音が 急勾 て、 たとい 車 は 酡 は、は、 輪 2 から きりと 昔は す ~ 蒸気機 聞 るため き取 関車 れ にここを通るとき たようで、 の蒸気の 特 音 IC が早くなるところであ 朝 に は 0 御 1 殿場方 2 そう蒸気を強くし 面 0 Ŀ 0 b たとも 0 た。 番 そ j. 列 車 れ でそ 佐 は 野 では 蒸

### 馬 の目

六号 今 P 里 **殿場線** が 約三六〇以、 とえば、 このような南 にそっ た地 市 下 域 和 域 で 北 0 は 0 4 土 が 北 約 西 ラを比べて見たときに、 地 部 几 0 に位置  $\overline{\bigcirc}$ 高 〇次 低 は す 9る今里、 須 裾 野市 Ш が 田た 域 下和われ 向き 0 それ 中 0 付 田だ で 近 は 0 須す で約 顕著 川。 4 で ラ Ŧi. 十里木 五六〇以、 ある。 ٤ 4 ーラと これ など富士、 + 0 ら北 高 单 度の 木 西 が 差とし 約八 愛 部 鷹 0 4 Щ ても ラ 麓 0 0 海 現 で 4 あ 抜 ラ n を見 T 裾 る。 T 旧 みる 几 た

十里 一木まで上 0 てみると明 確 にわ かることで、 今里から十里木までは 貫して上り 坂 であり、 ところどこ ろは かっ な

えまり たとえば市 うことから E \$ 厳 L 域の人々がよく語る急勾配の坂に、 い 坂であるために 坂と呼ばれるように かつて馬が馬力を引いてくると、 なっ 馬の目坂という坂がある。 馬でさえその坂 これは今里と下和田 の勾配に息を切 の間 らし、 の坂であ 目 をむ る 1=

かしこの馬の目 坂 は、 かつては今里より南の地域と、 それ より北西の下和田、 須山、 + ・里木との間 に

断

絶をももたらしていたようであっ

た

馬

0

目

たとい

が 里 級な時代であっ ス 急勾配であるために、 までしか行 \$ 昭 和 裾 0 はじめ頃 駅 かずに、 を起点として戦争中は木炭バ たから、 裾野 それより高 ハイ たとえば今里まで行くというと、 駅に ヤー ハイヤー やバスがこの坂を上りきることができなか 地に位置する下和田や がわずか スになりながらも走っていた。 に二台しか 須山まで行くことはなか たいていは乗り合 ない時代があった。 L ったからであった。 か い 当時 しこの の形をとって乗車していたという。 0 たという。 はハイヤーに乗るということは高 ハイヤー なぜ p バ スは、 ならば、 馬 ず れも今 0 目 坂

逆 下へ転べ」 「転ばば、 平. は北西 野 部 から南 か 3 Ш の地域 間 のように、 部 的特徵 つまり山 嫁に行くことはほとんどなか 南 は [間部から平野部 から北 かつては人の ^ あるいは北西へ行けば行くほど、 流 へ娘が嫁ぐの れをも左右していた。 2 たとい が われ 一般的であったようで、 T 15 たとえば、 る。 高度が か 高くなり山間 つて婚 特別な場合を除いては、 姻関係はほとんどが 部 に入 2 T V < その 北あ 市

たとえば、

上

ケ田

では昔、

2

0

あたりの嫁は、

ほとんどがより山

間部

であると認識されている御殿場方面

か

3

52

から

存

在

L

T

たか

らであると考えられ

る。

よ

のような婚

姻による人の

流

れを見たときに、

土:

地

の高低をとも

ない

つつ南北

に開

放され

た市

域

の空間

が、

全体

٤ 転ばば、 か 1 う。 6 御殿場から来た嫁はよく Ŀ. 一ケ田 下 では、 転 ベ 御殿場よりも上 などとい ってお 、働くとい ケ田 り、 われてきた。 このような人の流れをことわざとして上手く表現したものと言 の方が気候も暖 このように かく仕事も楽なので、 Ш 間部 から平 野部 嫁が 上ケ田へ来たと認識 嫁に来ることを、 Ŀ. 3 T ケ れ ょ 田 T おり、 で だ は

ろう。

た Ш ような話を聞くことができた。 0 また、 b Eリン 0 か 方 野 て市 など 3 嫁 市 は沼津 域 から 域 が行くことは で 0) トや三島、 もも 6 嫁 15 0 来る人 とも あ な 兆 が多 か 南 る 西 部 0 1 たとい 伊 は L カン に位置する須山 並は 豆島 た 0 たとい が など出た j, 田 0 で ても そ は う。 方那 れ では、 深良とか須山とか とも平 でも、 あ 0 る 方 7 伊 野 は 南 0) 農家 豆島 部 0 平 須山 K 位置 野 田 嫁に 部 カン で 3 北 L は から嫁に来る人はなく、 行 は 0) T 須 方 く人 1 Щ どの から嫁が来ることが る 0 がが 伊 A あたり 多 ラ  $\overline{\nabla}$ カン 0 島  $\blacksquare$ 中 つ -で結 た K などでは、 ٤ 嫁に行く 婚す 5 たい あっ ることも 昔 0 T ても、 か 0) V ٤ 婚 は より 5 姻 多 うと、 15 か に深良 北 1 0) て次 御 や須 0 殿 あ

動 韮 て Щ を 町 生 など裾 W 0 で 山 間 5 野以 たことは、 部 か 南 3 の市 南 の平 町 裾 村を含め、 野 野 市 部 だけ 0 では 移 静岡 動として現 なく小 県 東部 山 カン 町 ñ 3 てい や 伊 御 殿場 豆 たことがうか 北部 市 など裾 15 か け T 野 が 0) 以 わ 地 北 れ るで 域 0 市 で、 町 あろう。 北 村 P は Щ 間部、 沼 百 津 時 市 に 南 は平 島 0) ような 野 部 函南町、 ٤ 1 う認 の移

の行先 ヨビャ I E + 0) 1 ( = うな婚姻 バ 1 の行先は、 15 お け る人 南 0 移 か 3 動 北 が 北 と脚 か 3 南 から 向 1 T あ 5 たようであった。 12 0 に対 L て、 そ たとえば、 れ とは逆 に 佐野では若 カン 0 若 衆 衆 0 0) 3

٤

 $\exists$ 

のように語ってくれ

+ 1 0 行先は、 う。 たとえば、 北 側 の御 戦前 四宿や葛山-かずらやま 一九三〇年代から一 方面 一へ向 いて 九四〇年代にか いたようで、 同じ佐 けて若 野 の中 い衆だっ や佐 たある男性は、 野より南へ行くことは そ 0 頃 ほ 0 とん 3 Ľ, E ャ な 1 か

\$ 在 は ではなくなっているが、 のであった。 娘 では の噂 クラブ(倶楽部)と呼ばれる若者宿があっ 話 八〇〇人くらいは入ることができ、 ばかりしていた。 戦後東京オリンピックの頃まであり、 実際 に娘と知 り合 戦前の場合は「愛染かつら」とか た。 2 に 夜になるとこのクラブに若者が集まってきたも なるのは、 観客席は椅子席ではなく、茣蓙が敷かれ 佐野 の二本松にあった演芸館 軍 玉 一の母」 で、 などの映画 この演芸館 0 てい で る ク 形 ラ は 0 ブ

n てそこにてん 演芸館 の演芸館には、 が茣蓙が でに 座 敷 夏になると葛山や御宿など旧富岡村の方からも、 2 カン T れているだけであるのが、 いるために、 移動が自由 若い衆にとって非常に都合が良 で娘たちの集団 0 娘たちが連れ立って見にやって来た。 中 へ動いて行っては声を掛けることが かった。 というのは、 茣蓙 そのとき、 できたか から 敷 か

らであった。

L

7

# か 気が合うと、「ちょっと、 目 け て行っ が向 V 7 たのである。 いたらしく、 主として北 今夜、 比較的容易に話がまとまっ オマッチ、行くからなぁー」などと言っておき、 の方から来ている娘たちに声を掛ける たもの であった。 0 であ るが、 実際 に夜になると、 娘たちも佐野や平松の若 3 E 1 15

来た人々 北 か の方向 ら来た製糸女工との遊びとしても現れ へ向かった若い衆の動きは、 北 てい へ向 12 かっ 佐 T 野 0 には製糸工場として入沢製糸が 3 F. + 1 だけではなく、 より北 あっ 方の甲 た。 州 入沢製糸 山

するという意味

であ

3

h

が

須

Щ

嫁

に来ることになっ

たという。

寄宿舎から門の外へ出て来るところを待ち、 で は É は 北 製糸に糸引きに行くことが一 九三五 なっ 都留郡) 主にこ 0 寄宿 たとい 昭 舎が 0 和 や長野の八ヶ岳のふもとのあたりから、 甲 高 州 0 の郡 い塀に囲まれ 年 内 頃 から に閉 来 般的であった。 鎖 てい され た娘と遊ぼうとする若い衆が たが、 たために、 裾 声を掛けたという。そして、 また、 野市域 若い衆は塀を越えて侵入することができず、 入沢製糸には寄宿舎があっ の農家の娘や若 特に 郡 内からは多くの娘が糸引きに来てい あ 0 たとい い嫁は、 顔なじみになると外で待ち合わせもするよ う。 秋 \$ たため 0 0 とも郡内 稲刈 に b が 甲州 から来 終 娘が買物などの わ 0 0 郡内 た。 た娘 たあと農閑期 佐 は寄 山 野 梨県東部 宿 0 あ 12

た 静 0) 岡 であ 県 中 東部地 域 で は甲 州 から入って来た人々が多く、 甲 州 との国境から少し離れ た裾野市域もその例外では なか

来ては、 糸女工 サ ンという年 「センキリボシとネジクルベェ」などと言っていたものであったという。「ネジクルベェ」というのは、 0 ような出 酡 の女性が記憶され 稼ぎの ほ か に 甲 T 5 州 る。 から 行商 ヤ ツ サン に来る人も は、 七 ン 5 キリボシ (ダイコ た。 たとえば、 須 ン Щ の切り干し)を持ち須山 で は甲 州 から 来 た行 人として やって

IJ 1 頃 ^ 工 相 3 撲 W が 好 から 須 きで強く、 山 中 Ш 湖 15 0 丰 方 = まで フジミイ 3 N とい 相 撲 、う山中 に行ったときに、 シという名前 湖 の方 0 か ら嫁に 7 ワシ ホ IJ を持ち、 来た人が ^ 工 さんが相撲が強 あちこちへ相撲をとり 5 た。 この 丰 V 日 0 で 3 N この の夫は K 歩い 丰 ホ  $\exists$ 3 た人であっ IJ んに惚 ヘエ さんといい、 れ 3 た。 れ ح C 丰 0) 若 ホ =

は

静

岡

県下の他地

域と同

様

の傾

向

から

あ

0

た

0

で

あ

る

るため、 ような言 岡 県 こうした街道を利用して、 5 内 方を聞 では、 このような甲州 くことはできなか から来た人々のことを 甲 2 州 た。 特 L かし、 12 郡 内との交流 駿東郡小 甲 山町 州 が活発であったと考えられる。 べえ か 1 ら篭坂峠を越えると山梨県南都 などと呼ぶことが多い 甲州との交流という意味 が 裾野 留郡 山 市 中 では

## 二土地の環境

盤 が あちらこちらで地表に露出していることである。 これ 俗を見てみよう。 まで、 大きない 市域を歩いてみると誰でもがすぐに気づくのは、 地 域 的 広 が b 0 中 -で裾 野 また土地 市 の生活環境を見てきたの の高低に 落差のある箇所では、 明らか で、 次に裾 に溶岩の 野 固 ゴ 市 まりと考えら 域 ツゴツした溶岩 0 環境 に即 L の岩 て民

てきた。 域 っでは、 特に水の利用は、 このような溶岩のことをダタラと呼んでい ダタラのために大きな苦労を背負いこまされることになっていた。 る。 市域の生活環境は、 このダタラによっ て大きな影響 を受

石

が

露

出

てい

ることも多

い

鷹山 豆 地 南 方まで視野に入れたとき、 か 根方街道沿 市 域 で生活してきた人であ 5 の地域や中 必ずしもどこにでもあるような普遍的 伊 豆の平野部では、こうした溶岩は存在してい れ ば 誰 6 が 気づいてきたこのダタラの な存 在 で 存 は 在 は な な か 10 周 2 辺 た おそらく、 0 静岡 周辺 0 県 地 東 ダタラは 域 部 たとえば あ る 市 域 は 伊

たとえば須山 は 水田 0 ため の用水を持つことができな か 2 たことからも わ かるように、 市域 0 中 ーでも 特に水に不 環境

にと

て

8

0

とも

大きな特徴であると考えてよいだろう。

0 た



K 須 Ш 自

0)

下 は

に

か

が

流

れ T

るに

8

か

か

わ が

らず、

須

山

では

井戸

を掘ることが

できないとい

ŝ

0

Ш 麓 由

で

0

下に八里 な水

一岩とい 生活用·

う巨 5

大な岩

盤

あるためであると認識さ

れ

T

お た。

り

八 0

里

岩

が三島ま

で続 ダ

5

T

5

る

た

ような地中

0

タラ

のことを、

此から

沢 集落 は豊

の水を引き、

水とし それ

てのみ、

水を使用してきたからであっ

をしてきたムラで

あ

0 たが、

は地中

0

ダ

タラの

ために、

ほ

とんどの場所で井戸を掘ることが

できず、

周

井

あ

よう をともない、 b な 間 V あ 0 ま たとい .馬力をあげることもできず、 舗 ダ うことも な状態 た る は タ 装道路ではなくダ V ラ 約二 須 は が 山で わ で かむき 瀬 定刻の始業時 あ あ 里、 れ は り III to T 0 出 たという。 0 0 ダ ま L Ш る。 タラが露出しているところが多く、 -里木 に露出し 底 り に代 約 タラが に十 か 八旗 そしてこのような悪路 、表されるように、 3 須山 露出し T 里木の児童が間 あるとい 歩きでも尻端折りして歩 V る 小学校 0 T \$ わ 5 る悪路 n 通う児童 市 T 域 ダ 5 に合うことは難し の景観として特徴的 タラの で る あ が、 で あ にとっ 0 Ŀ たと ると同 カュ 特に須山 を水 かざるを得 0 T T 通学 時 が う。 は 七十 V 流 K 現 時代 は 長 れ そ 在 距 な T 木 な 0 0) 里 木 5 難 離 た よ

り、 つてここは非常 で ある。 たとえば、 ح のような景観は黄 公文系 に大きなダタラが 0 石 1舟橋 は 瀬 現在 Ш あるだけであ 以 でこそ普 外 0 中 小 通 河 2 たとい Ш 0 橋 K 8 15 う。 見 な 0 3 0 T れ まり、 る光 15 る 景 が 石 で 舟 か あ



写真1 - 3 黄瀬川岩盤の露出 (水窪・

名 舟 う。

の子供は、

ここで水浴びをして遊んだも

のであっ

た。

4

タラの

ため

に、

井戸を掘ることができな

か

2

た

0

形をして

5

たため

にこのような名前

に

な

たと

V

う。

公文 7

を掘 東大震災のような大地 V IJ ない村々井戸の少 15 る ン 大 たとえば、 グ 井戸を掘 が、 b 0 をできるように 地下水を生活用 般的 井戸 御宿では富士 なも を掘ることができない ることが 村 女 0 が 市 で でき なっ 震 あ 水 域 C が 0 0 あ な 山 た。 た近年でこそ、 は非常 ために利用することが 2 か か ても大丈夫であっ 3 2 に多か の岩盤が た ٤ が、 V 2 う認識 地下に通 ダタラを貫い 0 た。 岩 地中 盤 が 従 可 たとい 0 来 12 0 能 に 8 深 7 0 15 市 T な る 井 域 0 ボ 現 関 た T 戸 0

岩盤を貫く井戸を掘

り

それをくみ取って生活用水に使って

在

位では

ボ

1

IJ

ン

グ

0

技術

から

進んだために、

農協

のあるところに

橋

は橋

うより

\$

川に大きく露出

T

5

ただけ

0 あ

石 り

舟橋は、

雨

が降り水量

が増すと不通になってしまっ

たと

の上

を人

々

が

渡 ダ / タラが

たことになる。

そのため

か

T

な

お

石舟橋というのは、

ここのところのダ

タラがか

0

JII

が滝

頭

から道上

に か けて

の落差 0 不

のあ 動 の滝

L

る場合が多い。

たとえば滝頭

は

そのも

っとも

顕著な場所である。

不動

の滝は、

公文名から流

てくる泉

たりす

は れ

ゴ

ツ

ゴ

"

ダタラが地表に露出したり地面のすぐ下がダタラであっ

心でも、

特に滝頭から本茶にかけての地域では、



不動の滝 - 4 (茶畑)

j.

る場所 され で滝を形成 茶で井戸を掘ることを困難にしてい たダタラの T V るの は 7 固まりである。 いる 滝 頭 わけであるが、 では道場山 このようなダタラの広がりは、 0 周 うっそうとした樹木の下 た。 进 に 三 か つて存在していた井戸 カ所あるだけであっ 滝頭 で たと か ら本 記

たとい 持 が たわけではなかっ の水をくみ利用 0 富なざれ ナシ 5 あ 1= 帰 り 富沢 べても、 う。 が同時に使用するようなときには、 たあとは瓶にため使うこともあっ 才 L ン で ナ は 地中 カコ してい その シ た。 - の岩盤 (女衆)が天秤棒に桶 ため このような井戸も たが、 富沢の中 に 0 ために井戸を掘ることはほとんど不可 厳密に言えばまっ 生活用水は主としてム でも、 地 をか シ 下水 七 順番になるようなことも た。 モ 0 をくみ上げてい 5  $\exists$ 共同井戸では、 IJ たく井戸が で水をくみに行き、 (下最寄)では共同 ラの中 存在し を流 , る井 複数 れ る な 能 井戸 家に 用 で あ 0 か で は 才 水 あ

一げる

なく、

地

表

0

用

水

か

ら地

面

にしみ込んだサシミズ(差し水)をくみ上



「救済道路」 った部分。

現 3

在

は

島 地

が芙蓉台

寸

0 2

生

活

用

て使 下

用

地 発 伊

深 L 島

1 年

水

から は 声

あ

る

7 神 13

から 社

わ 0

た。 を

0

地 グ L

水 たとこ

は

図表 1-2 救済道路

T

お

り で 中 達 豆 7 で

豊富

な 市

あること などの

から 地 カン 南 か

わ

か

0

T

き 水とし

T

利

状

0

火

裾 地

野 7

市 水

域 で

で

は、

大きな溶岩

0

b

0

ダ

9

ラ

の部分が、 トメ 層 山砂 に 一噴出 3 な 2 0 掘 T るとこ 1 る場 0 0 所 ほ 火 \$ か Ш あ に 砂 る。 砂 れ 利 き たとえば、 が 0 ような細 出 T くることが 須 Щ か な火 で は 多 山 地 表 噴 か 出 3 物 れ が

を作るときに 経 済 更 IF. 11 0 露 1= 出 8 L 0 T 事 いる火山 業とし て、 砂れ 葛 きを運 山 では一 h で敷い 九三 たとい (昭和 う。 八 年 ح K 0 つくり)に使 救 救済道 済 道 路 路 に が 作 0 15 3 T n は た が 葛 Ш 2 のし 0 下条 救 済 救 昭 道

路 和 状 T

恐

慌

0 火

Ш 0

噴

出

物 \$ 須

は

現

在 そ

0

ような舗装道路に

なる以 畑

前 3 に

は

111

チ で 0

"

クリ

道

わ T

れ 5

る るとこ

2

から

あ から

たと

う。 0 露

るとこ

あ 山

り

よ 3

うなとこ

3 3

は 近

 $\mathbb{H}$ 15

VE

す 3

こと に

から 状

き 層

な

5 あ

0

で木

々

から 0 水

繁 あ は

0

3 そ

多 から

砂 出

利 L

葛

Ш

で

\$

3

同

よ 0

地

表

か

とこ

砂

利 は

が

る。

差

るところ

で

は

れ

地

表

15

ダ

タラとは

異

な

り 段

Ŀ.

か

ら下

へと浸透し

ていくと

3

用 4

1

すぎ

V

C は

あ

0

あ

1=

た

め

に な

水

量

多く

、なく、

結

局

は

用

水

0

水

を

0

た近

で

熊

野

側 2

术

1

IJ

ン

田 3 0

でも

井

は

ま \$

0 0

<

な

たと

2

う。

か

L

技

済道路建設記念碑が建立されてい

舗装道路とは異なり、 また、 たので、 は、 葛 葛 青年がそれを修理していたのである。 Щ Щ では 地 内 で 戦 地 前 当時 表 か 3 に露出 は土の道であったため、 戦 時 中 L 7 12 か 1 る火山 けて、 青年の 砂れきを運び馬力で痛 馬力の車の通るところが徐々に低くなりそこに水がたまりやす 奉仕事業として「早起き会」というもの んだ道路を平らに してい たとい が あっ う。 た。 現 ح 在 루 ような

15

る人も

いるようで

あ

る

噴火とその溶岩流が川の水をせきとめて池を作り杉の大木が水没したために、 ジンダイボリ ダ ギ (神代杉)と呼ばれる杉が搬出されることがあった。 タラのような溶岩が あるところ は固 い 地 表のところであっ 神代杉については、 たが、 神代杉として地中に残ったと考えて 湿 地 帯 では かつて、 地 中 富士 か らジ Щ ダ イ ス

業に近い状態になっている人もいたという。 て通行人をも家に招き、 あ ボ IJ 明 治 (掘り)をするような人々もいたといわれ 集団 大正年間 で掘り出すことが には、 大宴会をしたこともあっ この神代杉を掘り出して売却すると非常に高く売れたために、 あ 0 たとい う。 須 ている。 Щ 0 たという話が語り草になってい ある家では、 たとえば須山では、 神代杉 を掘りあ あるホラ(洞)で神代杉がよく出るところが る。 てたあと家の中 また、 投機的な事業としてジンダイ ジ ン ダ 12 1 7 ボ グ IJ 口 を吊 は り下げ 職

反当たり五、六俵収穫できればよいほどの悪い水田であった。 深良 でも湿 か たとい 地 帯 か わ 3 神代杉 れてい が出 る。 普通 ることが多 の水田 か が 0 た。 反当たり七、 上流 原 では、 このような水田はおおむね赤土で、 八俵収穫できる 黄色い 腐 たような水が 0 に対して、 出 神代杉 る湿 田 ほ が カン か 出 3 神代杉 の場所の土と る 水 田 が は 出 る

え

たとい

ー wit 同じであったが、かたく固まった赤土ではなかった。

n に入るときに足が潜らないようにするために、 須が発 が は て肥料 で 根 \$ Ш にもなっ 東電 K い るイ 0 発電 た。 ノシ またここの湿田 所 シ 0 近辺 P シ には カをここの 湿 田 では、 が 2多く神代杉が出ることがあっ 水 水田 湿 田 ま 田 で であることを利用して箱根 に木の枝を入れてから田植えをしたという。 追 い込んできて中へ入れ、 た。 特に湿い Ш 動 0 動 くことができないように 地 物を捕 がひどいところでは、 獲することも 木の枝は地 あ L 中 湿 0 7 で 田 腐 捕 0 ま 2 b 中

15 深良の南場 0 集落を形成し 洞 が 1 力 堀は では、 ッテ T (埋 1 るムラで 南 か 堀 0 0 て)現在のような小さな洞になったという。 4 あ ラの成立と関連させて神代杉の存在を認識 るが、 あ る人に よれ ば 2 0 洞 は大昔は 2 して 8 のときの山津 0 と大きな洞 1 る人も いる。 波で木々が埋めら であ 南 0 た 堀 は箱 が Ш 根 九 津 山 波 0 そ 山 0) 起 麓 木 こり の洞 が

る。 杉を掘 須 Ш 一と同 り出したという。 じように、 深良でもジン 原木は売却されると、 ダ 1 ボ IJ は投機的な事 加工され下駄や板台などになり、 業であっ たようで、 農閑期 高 価で取 0 冬になると多くの り引きされたとい X わ れ 神代 7

神代杉として出るのだといわれ

てい

湿 田 足に悩まされてきた地域であっ 海 を箱 根山 しと愛鷹 Щ 富 士: Щ た に区 L 切 3 かしこのような地域でも、 れ T 2 る裾 野 市 域 ちは、 全体的 神代杉 には の埋まっ Щ が 5 ていた場 で 畑 作 地 域 所のように が多く、 水不

たとえば葛山 田の仙年寺 0 正 面 0) 水 田 は 現在 では乾田 になっ ているが、 九六〇年代までは腰まで潜 てしまうほ

が

ない

わ

けでは

なかか

写真1-5 鈴原の水田と宅地 (茶畑)

を、

1

現在は鈴 原と V わ n 宅地化 が 進 状 馬 ん 態 \$ でいるところも、 に 牛 \$ な 水 7 田 1 に 入れ た。 そ 以 ることはできず、 前 0 た は 8 家はなく湿 に 水 田 0 中 田 年. 15 0 多 止 中 まり い場所 水 が たた 木 を置 まり で あ き 黒 2 た。 1 そ デ ここで 0) **上**. 泥 に足 は 0

たとも 茶畑

> わ で あ あ

n

T

でも、 2 0) 田 で

た 0

\$ 湿

たという。 その

0

湿

地 田

震

0

ときに

は

水

田

が

揺

れ

た

り

稲

IIX

b

0

あと稲を置 をその上

くことが

できな

か

た。

ために、 ここ

ここの 田 は

水

に入るため

には桑の木を中

に沈

いめて、

足

一に乗せ

なが

ら農

業を

湿 ま を てようやく一 置 で潜 田 き 田 てしまうこともあっ 人によっ 植えをしてい 反に ては つき七 たとい 俵収 デ + 穫 う。 たという。 と呼 できる程 2 ぶ人も 0 止 ح まり 度 で 0 あ 湿 る。 木 2 田 から足を踏み外すと、 たとい では、 7 う。 寧 この に稲 を作 ような 胸

そ す が、 る 0 1 上. と胸 Ŀ. L. ケ で あ 田 を歩き、 ケ 田 で ま で た。 \$ に 潜 は か 耕作をす つては 早乙女ケ池 ここも、 手をつ ハデ る 田 植 か 15 2 + 呼 W \$ えをするときなどは竹を水 1 で 田 ば が 引 7 れ あ -駄を履 2 る 2 張 池 た り上 から 現 5 あ T 在 げてもら り V で た。 は C 0 埋 立め立 足 わ 周 な を 田 井 てら け 踏 0 0 み外し れ 中 水 ば 15 田 n ならな 渡 から T た ハ 1 デ る

ここは 力 口 ウ 1 堰紫 か 3 用 水 を引 V T 5 るが、 湧き水 が 湧 T V るとこ

1

ほ

で

あ

た

とい

う。

しま

一嶋大社

の小浜池に出たという言い伝えがある。

ろも に な り あ り 水が 2 のため たまる 0 に である 1 デ + ٤ 1 5 15 う人 なっ 8 7 5 5 る。 たと考えら な お、 早乙女ケ池 れ ている。 また、 につ いては、 地 下に大きな岩 昔、 ここで田 盤 が 植 あるため えをし に T 5 排 た娘 水 から から 充分

の下に溶岩があるというの

が

般的

のようであ

る。

縄文土器 多くは 溶岩を地中に存在させているといっても、 な 普 通 は表土として黒土が あ り、 市 そ 域では地 0 下 にア 表からすぐに溶岩に カ 7 サと呼 ばれ T 到達し 1 る赤 てい 5 色 る場 0 硬 所 1 土 は から 必 あ り

は、 ころをア たとえば須山 須山と同じように表土は黒土で、 カマ サ とい では、 2 7 表 5 面 る。 は 黒 そしてその下に岩盤 5 土であるがすぐ下には赤土 その下に硬いアカマ が あるとい サが が あるとい わ あ れ り、 T 2 赤土の多くは硬い う。 る。 茶畑 でも、 畑 場所が多いのでそのようなと の多 5 滝 頭 本茶、 中なかまる

から 話 あ 出 \$ たとい ることが 聞 のようなア くことが あ 力 0 できた。 たという。 7 サ に つい サ " また、 マ(サツマイモ)を貯蔵するため て、 葛山 愛鷹山 の田場沢では、 の斜面をカ 縄文土器が 1 コ ン (開墾) に地 面 アカマサ 回を掘り して畑を作るときにも、 り返すと、 0 下 ・の地 層 T 力 から出土することがあるという 7 サ 土器や石器 0 下 か ら縄 文土 が出ることが や石器

### 赤 土

あ

たという話を随所で聞くことができる。

特 に葛山 など愛鷹山 愛鷹山 力 7 サ 0 火 など赤 .麓 東側 山 灰土 土 0 村々では、 であり、 0 存 在 は 主として表土になっ 赤土 裾 野 がサ 市 域 ツマとの関連で語られることが多く、 0 土 壌 に てい お 5 る黒土 てもっ は富士山 とも特徴 「の火山 的 なも ので 灰土であると認 サ ツマ あ ふろう。 の栽培に 葛 識され 山 赤土 では、 一が最 赤 土は

赤土で は 葛 Й 島甘 あっ では、 諸 たので、 赤土の場所はサ とし て出 ここで作ったサツマ 荷され、 ツマ 黒土の場所 の味がよいと考えられ は美味であっ で作られ たとい た サツ ており、 7 わ れ は 澱粉 てい 特にミナミヤ 用 る。 15 その 3 れ ために、 7 T (南山、 15 1= ミナミヤマ 現在 の千福 で作られたサツマ ータウン)が

0 が 1 枯 た。 赤土 れ ح の場 サ な " 0 V マを収 所で ように 時 期 は 0 体穫し L 日 サ T 照 " たあとは秋 5 が 7 強く た。 0 栽培方法は、 なっ た い から てい、 てくるときであるため コ 表土 梅雨前 4 ギを蒔 の下に堆 の五 くの 月 が普通 肥と枯草を敷き肥 の天候 に であっ コ 0 良 ムギの間 5 ときに 料 に挿 にし 収 L 穫 T 日陰を作ることによっ 前 5 0 た。 コ 4 サ ギ " 0 間 7 は に 秋 サ まで ツマ て、 には 0) サ 苗 成長 ツマ を挿 する 0 苗 T

はこ 粘土質 深良 が 0 とき、 葛山 イ のようなことはなか " などでは、 イ の場 のように愛鷹山 苗を土 テ植えにくくなる」などといっている。 所が多いと考えられ 赤土 に植えてもそのあとで土が苗にかぶらずに苗が浮いてしまうことがあった。 一に対 T東麓 2 して異なる認 たためにとまどっ の村々では、 てい る。 識 このような粘土質の土 赤土といえばサツマ から あ た女性も 2 たようである。 深良では北. あっ たという。 0 方の御殿場市域から嫁に来た人が多いが、 ・壌は、 栽培として認識され 深良では硬 現在のような機械植えではなく手植 5 T 力 7 てい サ は 少なく、 たのに対して、 このようなことを、 むしろ同 御殿場 箱根 じ赤 Щ 市 土 田 西 植え でも 麓 泥

0

### $(\Xi)$ 集 落 0) 環

境

裾野 と共 有地や山 市 域 は 日林が続 東 西 [を箱 い てい 根 山 る山 と愛鷹 は Щ 生活の中で区別されて認識され 富士 Ш に 画 3 れ てい るため むに、 てきた。 集落 P 普通市域 田 畑 0 広 では、 が T 平. 5 地 る 平 は

サ 65 地

広

が

T

お

b

サ

"

7

0

産

地

で

あ

2

た

ト (里)、 Щ はヤ 山 )と呼 ば れ サトとヤマという認識に基 づく土地 環境 が 展 開 7 15

水窪 2 たとえば の平 たために、 地 水等 は 黄瀬 水田 では、 脳川を渡り から 多 平 i 地 ために り南一色(長泉町)や富沢 0 畑 を サト サ 1 タは少なか タ (里 畑、 愛鷹 の山に 2 たが、 Ш ヤ に持 ほ 7 1 とんどの家 2 てい タを持っている家が多か る山 0 0 水 畑 田 を 経営 ヤ 7 面 11 タ(山 積 は五 0 た。 畑)と呼 反歩か ヤ 7 び区区 ら六反歩 タは、 別 赤 て

木林が 手) で た麦塚 あ かき集 り では、 麦塚ではこれをサトヤマと呼び利用していた。 めに行 平. 地 2 0 てい ザ יי たため ボ クリン に (雑木林)をサトヤマ 遠く箱根山を登らなくてもよく便利 里 山)と呼 サ トヤマへは、 んでい た。 で あ 堆肥にするため 現在、 2 たと 一菱アル う。 0 落葉を 111 0 あ コ る あ たり ン ザ ライ 15 は

う呼 ジ 呼 茶畑 0 サ び方をし んでいる。 では " 7 東側 は てい 硬 茶畑で が箱 い る。 が 丰 根 は、 IJ たとえば、 Щ ボ であるが、 この茶畑山など箱 シ (芋切り干し)にするにはサト サト 現在でも茶畑は箱 ジ 0 サ " 根 山 7 (サツマイモ)はうまくない の山地をヤマジ 根 山 ジ に二一一名共有とい 0 柔 か (山地)、 V サ ツマ 集落や田 が 0 う共 方が良 ヤ 7 ジ 畑 有 5 0 0 地を持ち、 とい ある平 サ ツマ わ は れ 地をサトジ たりす うまく、 の場所を茶畑 また、 地 ٤ ヤ 山 5

サ 1 0 茶畑 れ る 程 の場合、 度で あるが、 現在では中丸や本茶で宅地化の進展が著しいということもあり、 用 水 0 調 節 が しや す 5 ためで あろう か 畑 心と水田 が 混 在するような形 水田 は主 15

15

特

に

東

小学校

0

北

東

側

から東

側

に

か

け

T

0

ゴ

シ

3

カイド

ウと

5

わ

れ

てい

る場

所

0

水田

は

深良用

水で

によって

して

淹

頭

VI

漑 され 培されていない 7 V る水田 が、 0 様 以前は二毛作の場所で、冬には麦を作 相をよく示している。 また、 ここは 用 っていたという。 水 0 調 節 が しやす ここの土は黒土で、 5 ためであろう。 現在でこそ冬は何 その下は

度

ため

に

名

主

で

あ

た柏木家

0

旧

屋敷

が

本茶の中でもも

とも東側

0 大場川

に

面

L た水

田

0

中

-に位置しているの

で

本茶では、

柏木屋敷に近づくほどに地震の揺れが激しいと認識している人もいるほどである。

サ土 0 5 水 状態を作り水もちをよくするなど、 は そのために水がしみ込みやすく、 もともと畑作 に適していたとも推測され、 工夫が必要であっ 田植えなど水を水田に張っておくときには、 深良用水の通 た。 このように、 水 により 乾田として二毛作が容易で水保ちのよくな 畑 から水田 早めに水を入れ鋤で搔きデ ^ 0) 転換が可 能 に な

で

あるとも考えられ

俵収 乾 力 る 〇月 れかす が、 また、 イ 穫することもできたという。 F ヒラボ ウ の乾 Ŧi. 0 日 シ 水 3 シ 田 0 1 を行うことが可能であった。 浅間神社 た水田 力 0 収 イドウの 穫は、 で、 0 稲刈 普通 祭りの あたりでは冬には麦の栽培をしたために、 りの は一 あとで、 あと稲 反七、八俵くらいであっ ۲ のヒラボシ ここでは、 0 頃には水田 (平干し)が行わ 稲の掛 に水はほとんどない たが、 け干しを行うようになったのは戦後であっ 丁寧に作ればセド 稲刈りが終われ れ てい た。 0 で、 戦 前 ij ば水田 川 は晩稲で (畝取り)といって、 0 た稲をそのまま が多く、 に水を入れ 晚 稲を刈 ないように た。  $\mathbb{H}$ K 反 ゴ 置 る シ 1 0 0 が す T

### トの畑作

また、 考えられ、 東へ行くにつ 地 震 畑 が れ おきたときでも畑 が あるところは水がしみ込みやすく、 免道 て、 1 畑 路を境にして、 の耕地としては、 よりも水 0 田 あるところの方が揺 が 増 お えて 水田 お む のほ いることになる。 ね 西 かに畑 側 に畑 水田 が広 れ が、 が少なく、 のある東の方へ行くほどに水がしみ込みにくくなるとい 東側 が ح っている。 に のような畑と水田 水田が多く分布している。 水田 茶畑の場合、たとえば本茶の のあるところの方が揺 「の分布 は 士: つまり、 一質とも関係し れ が 多いという。 本茶では Ŧ リでは、 T いると 西 その . ئ カコ 3





本茶の畑地と水田 (茶畑) 写真1-6 畑 地

1 柏木屋敷跡と水田(茶畑・堤勝雄氏撮影)

沢

人々

は

愛鷹

東麓

を

北

か 0

6

南

と流

れ

T Щ

5 る

黄

川と愛鷹

山

との

間

に

Ш

肌 瀬

K

沿

2

て細

長く集落を

形

成

し生活を営んできている。

集落

0 様相

K

つい

富 麓

沢 0

で、

次に、

愛鷹山古

東

T

いる茶畑を見てき

た

を例として見てみよう。

富

3 たが 周 进 0 生活環境を見渡 富 沢 の集落

って、

か

そ あ る。 のため このような愛鷹山 もっ に とも低 黄瀬 川 5 位 しと黄 から富沢の集落を遠望したときには、 置 K 瀬 あ JII る 0 間 0 K が 黄 ある富沢 瀬 JII で、 の位置関係 土 地 を削るように流 は、 集落が台地 士: 地 の高低 れ Ŀ T に V の中で見たときに あるかのように見ることができる。 るため に、 河 床は低く岩盤 顕著にうかが が 露 わ 出し れることで そして ている。

富沢

は愛鷹山

『を背後

15 控

え

黄

瀬川

を正

面に見るような場所

に位

置し

T

5 ると言

0 T

よ

5

だろう。

麓の集落 根 れ Щ まで、 西 麓 箱 位

集落 水 が 0 富沢 中 ic は 0 集落 黄 瀬 黄 Ш 瀬 Ŀ JII 流 の穴堰 0 間 0 水 から取水した深良用水が、 田 を灌 漑 L 家 々 の生活 用 黄 水に 瀬 JII とほ \$ なっ ぼ並 てい 行 る L て北 0 で あ から南 る。 ٤ 流 れ 7 5 る。 0

用

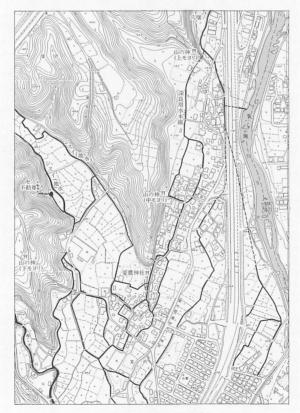
集落とは 高 3 15 は で 長 よる水 が れ 愛 あ 5 鷹 台 る カン る できる。 町 が、 よう 山 が 地 P 田 明 から F. 控 富 3 葛 同 な から 大 15 位 特に、 集落 沢 N えて 畑 か Ш C 受鷹 3 のかみん は 置 15 0 場合、 全体 カコ 異 L 5 0) 深良用 れ な 立. 城出 る構図 愛鷹 てい る景観を見 干 が 地 東 1 条件 日 麓 る IJ Щ 水 麓 C 高 0 が、 と黄 15 は 0 などは、 あ 4 い よる 縁 る 丘 ラが ここに 瀬 愛 0) せ 0) 台 Ŀ 灌 鷹 T かすべ 水 JII 愛 地 5 12 0 Ш 漑 る。 鷹 存 間 が F. は集落を発達させ \$ 東 てこのような立 に 小 在 K なく 麓 深良用 富 集落を形成 カコ L 0) は て 比 沢 3 4 較 0 流 あ V ラ 水を通 場 る 的 で n ること 合で が、 は 出 畑 た小 Ĺ 作 地 T \$ が 大おお L T 5 0) 条件の 5 畑 集落を成 ず 卓 河 わ 1 集落 な Ш n る。 越し P か 桃 1 に る。 \$ もとに置 沿 愛 黄 1= 園で 0 鷹 2 点在す 瀬 南 立 ム 2 ÎH ラで 3 た洞 JII 0 西 定 を せ 洞 側 カン 輪寺 カン ラる家 隔 ある大畑 T 0 KE 3 KE れ 集落 士: てて対 5 洞 0) 村 T 地 小 × た が と水 1 0 0) あ 河 0 で る 高 岸 jij \$ で り 周 は 0) さが に 司 あ 田 井 0 では よ を存 佐 る。 深良 C K は 低 る は 野 ような状況を見 0 なく、 用 在させ V 小 畑 カン き か 水 規 から ら大畑 りと黄 模 15 3 Ch 上力 0 T な 3 3 長なが を見 あるとも お 6 瀬 か り 窪は な 0 JII れ ると で か てとるこ 元を 背 ジ 富 あ 3 長ながくほ 沢 る。 後 阴 ス 段 イ 15 確 0

か あ な る III 境 1+ 1= 方言 河川 売を遮 n 8 世 ば 間 K 断 なら 2 人 0 交流 あ な な意味 X か から を遮 で詳 2 4 を持 12 ラ ので 断 0 L 外 す 2 あ る T 見るように、 る 出 機 2 能 1= る をも から き 富沢 果 K たし は 河 いの場合、 JII 北 T は 側 5 0 13 水 黄 桃 田 背後 園 瀬 0 JII 灌 カン 南 K に 漑 愛 側 橋 0 鷹 to が 0 南 Ш な 8 が、 に か 色 2 長 前 た あ たため 面 る 泉町)をまわ 15 1 水 に は 0 生 流 そ 活 0 用 れ り が 集落を中 水 急 0 そこ ため で 河 心とし カュ 床 に 3 が 世 低 き って見 わ ^ 黄 8 出 T 瀬 n 重 T ば 行 から

### 第1章 生活環境の民俗



写真1-7 富二平橋(富沢・二ツ屋)



図表1-3 富沢の環境

とが 開通 黄 歩で渡ることができたという。 れ 瀬 たや できたの JII や下 K 橋 富沢の 流 から で の地 な 富沢の人々にとって、富沢地内の黄瀬川に橋を持つことが長年の念願であった。 「富」、二ツ屋の「二」、平松の あ くとも、 点をナ 徒歩に カヤカイドウと呼んでい ここには水面 よって対岸の二ツ屋 に出るほどの大きな岩盤が露出していたために、 「平」からとり、「富二平橋」と名付けられている。 たが、 に渡ることができな 黄瀬川 の水量が少ないときには、 1 わ け では なか 0 ここから対岸の二ツ屋 た。 それをつたって渡るこ 富一 その橋が一九九二年 平 しかし富沢 橋 が 架橋さ 徒

業を営 水に 行われてこな な カン 水田のな \$ 0 不自 1= 4 現 由 ラ 在 か するほど水が貴重で、 で 0 は っ て水田を作ってきたが、 あ れ たムラである。 まで見てきたような茶畑や富沢のように、 それ た。 に代わ 5 ず れ 2 \$ て畑 かつては、 か 市 地 つて水 域 市域の中でも北西部 の多くが では格別な霧発生 1 田 - ウモ の開発が奨励されたこともあっ シ バ 口 コシ、 ハ タ(芝畑)に 地 ソバ、 市域 帯で 0 高地にある十里木、 あ のほとんどのムラは、 麦、 なっ る。 桑、 てい 特に 茶などの畑作と山仕事によっ 須 る。 畄 たようだが、 は 須山、 あとで紹 ジ 下和田などは、 スイや深良用 水 介するように、 田 の経営などほとんど 水 て主たる生 水 0 田 生活用 経 漑 営 によ 0)

十里 ± 雑木)による炭焼きや、 地 末は 山 0 高 より 海 もさら 抜 寒さ、 から 高 に高地 それ ことがかえっ 富士 で にともなう夏の霧によって、 富士 山 て有利 愛鷹山に自生していたススダケをとって竹行李を作る山 山麓に位置 な立 地条件となり別荘地としても開発が 生業が山 仕事 に制限され てきたと考えられる。 進んでい 畑 る 0 地 が、 ムラであった。 \$ 少なくなり、 九五〇年代までは 現在 ザ " では、 ボ

### 新田の開発

これ 状況である。これに対して、 まで見てきた集落の環境 市域には、 は おおむ 新田」 ねすでに近 の名称を持つモ 世 0 はじめに ∃ は IJ 成立していたと考えら P ムラが存在してい る。 れ る 4 ラの 田

ても市域では大規模なものは少なく、特に独立したムラとしてではなく、

ムラの中の一部として存在しているも

区 L よく使われている。 0 田 てい から そ を形成してい 多 のために、 などは、 たが、 すでに紹 下 ずれ これ るが、 和 田 ら新 たとえば、 もムラの中 の大胡山、 介したように、 4 田を持 ラや近世 御宿は現在、 ってい 0 今里の今里 の支配単位 つの 茶畑 るムラでは、 モョリとして存続している。 の新田として成立していた平松は、 新 平山、 四の村の 田 御宿の御宿新田、 入からか 内部 ホンムラ(本村)とシンデン の 一 坂上、上谷、新田 組織として、これらの 深良の深良新田、 現在、 近世 御宿新田、 0 Ŧi. (新 七 の半ばに藩制村平松新田 田)という相 新田 3 リが 公文名の稲荷新 は 深良新田、 あるが、 成立してきたの 対的 これ 稲荷は、 な呼 ル.田、 らのうち、 称 麦塚 が で 現在 独立 T した 新

用 4 \$ 水 ラ あとに が 15 のような新 ない は 開 用 ため 発さ 水 から に れたためであろう、 あ 田 一の開 る 生活 0 発は、 で、 用水 2 の利 れ 般的 ぞ 用は れ 必ずしも立地 0 にホンムラから出た人々によって開発されたと認識されてい ホ 家 ン K 4 はそこに ラの 方の用水まで天秤で水をくみに行かなければならず、 条件に恵まれ 力 ワバ タを設け T は 生活用 1 なかったようである。 水 15 利用 てきたが、 たとえば、 るが、 シ ンデ 麦塚 苦労が多か ホ ンム 0 で ラよ は ホ は b

たという。

方が

なさ

てほ

る。

田

0

人

々

は

か

0

几

Ŧ

日

リ全体をホ

ンムラと呼んでいる。

麦塚でも同様

で、

シンデ

ンとホンムラという対称的な呼び

た

Ŧ

IJ 田

あ る。

下

和 0

田

は 3

上文

方於

中条なかじよう

向かい

松葉、

Ш

中

丸

胡 3

Ш

7

\$

新

田

名

な

ホ

ン

4

ラ

3

T

0

t

 $\exists$ 

IJ が で

から

あ

る

から

n K

0

うち

大胡

0

ほ

呼

W Ŧ =

で

お

り

L

カン

\$

大胡

は下

和

田

E Ш

須

Ш 人

0) X

才 は

1

ゴ カン

が 0 杉



実 田 新 ン 田 の は 4 な ラ 水 田 0 をま 七 T 彐 5 n IJ る 3 たく持 0 0 で、 新 今 田 深良用 里 たな 0 うち 新 田 5 新 御 に 水 分 田 0) 宿新 開 カコ \$ れ あ 削 田 る。 T に 深良新 1 よ るが、 たとえば今里 つ て開発されたまさし 田 0) 稲荷、 今 里 は 平 新 松は、 田 石 船 K は 新田 下も い 水 村的 ず 田 が で れ 畑に見い 存 あ も深良用 在 0 たと考 せ 中 ず 畑 村 水 ば えられる 0 入りがた 水を利 か b で なが、 大久保、 あ 用 った。 新 た 田 水 折りても 7 田 呼 度、 を U 持 な な

0 が 3

水

い水

で 殿 最 工 水 水 隧道を通し 九二三(大正 北 場 2 初 1 田 が 市 畑 経営が不可 たまらな 和 0 で ナ 0 VE あ (家名) 人 入 り 0 境 × て水 0 今里 を持つ < 0 T を監視する 墓 能 田を作 な 5 年. る は から に 家 が、 小 な 0 今 か 関東大震災 田 0 わ 北京 ため たとい 称 里 原 3 す たことが 畑是 出 は K 藩 か も今 た人 にここに家 領 あ 0) う。 期 5 0 里 葛 が、 0 が 間 1= あ だけ 前 か Ш 0 葛 3 0 が に 1 た を作 出 沼 Щ 今 水 が、 わ 津藩領 里 れ た人々 ٤ 田 " を作 ツミ か T 2 0 新 震災による水源 たと 境 田 5 によ 出た人々 C に 0 (堤)を作 0 今里 あ は 5 ただけで、 じま つ わ る T れ 0 新 によっ 開 で T 田 b b は、 ĺЦ 発され、 1 を 0 変化 る。 藩 Z そ の水をため、 が 3 1 0) 開 ま 異 IJ 後 1 ٤ よっ なる 発 た は 後 再 0 御 れ 葛 が 3 35 T

七 緒 = になっ IJ を ホ てここ 4 ラ



写真1-9 大胡山の集落 (下和田)

2

のように見ると、

市

0

4

お

V

7

ホ

ン

4 な

ラか

3

出

て新

たに

集

落を

かし、 場市

ここも山

仕事

が中

で水田は

存

在してい

ス

ス

0

開発する場合には、

ニっつ

0 域 心

形

が

あっ ラに

たと考えら

れ

る。

つはまさ

b

あ

げた場合で

もう一つ

は

今里

新

田

や下

田

0

Щ

+

を開発し、

集落を作

ように、

畑

作

あ

る ある。

5

は

Ш

仕

事

0

ためにむしろ山中

E 和

分け

入り、 大胡

山

す

として、

主に深良用水などの用水の整備によって水田

され 藩領 の境 たものとも考えられ に + 車 末 が 験東郡、 る と富士 郝 との 境に位置し

た集落は出

屋

したも

0

か

\$

L

れ

ない

が、 政

今

田

が 15 を

近 作 開 里

世 3 発 木

0 れ

てい 作り小

るの

で から

近世に 発展

お

5

T

なんら

か

0

行

的指

導 里

0 新

\$

とで

開

発

る形で集落を新たに形成してい

った場合である。

このような山

中

シュクと交通 た 市 0) 域 ではなく、 のほとんどは、 そのようなム これ まで農村、 ラの 人々 Ш が買物や農産物の売買のために集まってくるシ 村として存在 してきた。 L か す ~ 7 が 農村、 1 ク Ш (宿 村 T 8 あ

存

発 を開 ン され 4 ラと同 発したとい じように水田 で う言 あると考えられ い伝 は えもあ なく、 るの る。 Щ で、 仕事を主な生業としてきた。 L かし、 ホ ン 大胡 ムラ Щ カン K 3 は 出 須山 た人 や下 × に 炭焼 和 よ 田 き T 0 開 P ホ

ダケを採取することで山を利用した生活を営んできた十里 EIJ 野 0 人 × が ととへ 移り住 み 集落を開 発したとい わ れ ていい 末 \$ る。 御 殿

あり、 どないと言ってよく、 在していた。たとえ、どんなに交通の不便なムラであっても、完全な自給自足のみで生活を営んできたムラはほとん の機能を果たしてきたのが、 交通の要所、 分岐点として、 買物や物産の売買のために、 市域では御宿と佐野、 周辺地域のムラの人々がもっともよく集まる場所であった。 伊豆島 農家の人々が集まる中心的な商業地が必要であっ 田であっ た。 特に、 佐野の中にはシュ クといわれる場所が たのである。

そ

### 第 二節 Щ کے 生 活

### (-)共 有 地 として 0 Ш

意義 を得るために山を利用してきた。 Щ ななも の共有地 0 で あ 市域 0 利用 た。 が箱 ほとんどの という点から考えたときには、 根 Щ 愛鷹山、 そのような意味 ムラがこれらの 富士 Ш に囲まれ Щ から言えば、 に共有地を持ち、 これら広大な面積を持 ていることは、 市域の人々にとって山 農作業の 世 間 に向 つ山岳は市域の人々にとってきわめて有 ために、 けての交流 は生活 あるい 0 の遮断 ため は農閑期 に必 でも あ 要不可欠の存 には現金収入 0 たが、 Щ

備拡張 富士山 にともない、 市域が実質的に富士山 お お のっぱら」と発音される場合がある)であった。 千葉県の習志野の演習場だけでは不充分になった陸軍が新たに演習場としたもので、 を利用しているのは、 その裾野 大野原は、 に広がる大野原(「おおのはら」と発音され 一八九九(明治三二)年、 H 清戦争後 る場合と 九 の軍 四 五.

在であったと言ってよいだろう。

て使用されて 大野原が箱根山や愛鷹山とは決定的に異なったのは、 ぱら草刈り場や開墾した畑としてのみ利用されてきたことであった。 る。 そのために、 大野原のことを市域の人々 ここが多くの は 演習場とか大野原の演習場という場合もあ ムラによって共有地として利用されながらも、

昭和二〇

年

の敗戦まで使用されてきた。

戦後は、

最初アメリカ軍に、

その後は自衛隊によって現在でも演習場とし

V \$

うこともあり、

大野原では、

堆肥を作るための落葉を拾い集めたり炭焼きを行うということもなく、

ザツボク(雑木)がほとんど生えていないと

あるい

は

屋



写真1-10 箱根山と愛鷹山 1 桃園台から見た箱根山 公文名から見た愛鷹山

葺 前 現 箱 は落葉を堆肥にしたり、 \$ 0 ボ Ł 0 在 别 部 き 多 は 1 根 た 0 8 か 雑木やカヤバ(茅場)の場所 丰 で VC 分であり、 Щ 共 はほとんどの場所に杉や ための茅や厩へ入れる茅 が植林されている のうちその 利用 有 (雑木林)のあるところ 地を保有してきた。 そのために、 ここに各 外 茅場では 輪 Ш が、 4 0 焼 ザ ラ 屋 西 以 " が 側

きに使うための茅も大野原には自生してい 戦後市域で栽培が広 が 0 た芝は、 もともとはこの大野原の芝からはじまっ なか 2 た。 L カュ 大野 原 は フジ シバ とい たも わ のであ れる在来品種 り 箱 の芝の自 根 Щ P 生

箱根·

0 わ

人

々

が

大

きく

カン 市

か 域

てきた

0

は

Ш 地

に で

は あ

見られ た。

な

いものであっ

た。

根葺ぶ

てき

を刈 2 7 V た。 サ 1 0 集落 から遠くないところでは、 開 墾に よ 0 て畑 あるひ 3 か れ 干 シ キ(燃し木)なども Щ か 3 拾 われ

た。 々と同 そ のような箱根山 いところ、 れ が、 じようなやり方で共有地を利用してきた。このような中で、 つまりサト 0 地 域で の利用方法は、 般的 から見ればもっとも遠いところに群生している。 15 ハコ 愛鷹山 ネ ダケ(箱根竹)と呼ばれ についても同様のことが てい る竹 いえる。 利用するムラにとって箱根山 の存 市域の人々 在 愛鷹山東麓 である。 は農閑期、 1 の各ムラも、 コ ネ ダケ 一独自 は 主に冬の仕事とし 箱根 箱 0 \$ Щ Ш 0 西 が 中で 麓 あ 0

### 0 現金収 入としていたのである。

てこのハコネダケを採り、

竹を売ったり、

竹製品を作り現金収入の手段としていた。

に対

して、

愛鷹山

の場合

は

1

コ

ネダケとは異

なり、

ス

スダケと呼ば

れ

る竹が自生

L

7

愛鷹 現在ではほとんど枯れてしまっ 15 雨 乞 5 を目的 とした神 が ま たとい つら れ われ ていたことは、 てい るが、 主に須山 箱根山 や富士 や十里木の人々が Щ K は な 5 現象であっ ス スダ ケを採 た。 愛鷹 山 VE

0 かる Щ 対 としてはたとえば茶畑の人々が山 フジ わ あり、 か バ るように、 タ ノカ 須山 ミナリ には浅間神社や御 市 域 サンとタケ の多くの 1 4 師し カミ ラでま の神をまつっているが、これはその祭日が一月一七日と九月一七日であること 0 家 ナリサ つっ \$ あるが、 ている山 ン (嶽の雷さん)という二つの 奥山 0 神 に 雨 の一つと言える。 乞い の神を持 TIS. 0 てい 富士 乞い たのは Щ 0 には周 神 が 愛鷹 あっ 知 のように古くから信仰 た。 0 2 箱根 であっ Ш 信仰

の共有地 数のム 深良、 が、 4 茶畑、 ラとして単独で共有地を持っている。 公文名など箱根 山に共有地を持 このような箱根山 2 T 1 るム ラは、 の例に対して、 モ = IJ が管理 を行 愛鷹山 ってい に おける共 る場合も 有地

名持ちは、

現在ではこの八二名持ちに買い

上

げ

られる形をとり、

八二名持ち

の中に含まれるように

なっ

T

る

0

東 愛 須 するというよりも、 0 保 Ш は単 0 Ш 有のしかたを見ると、 ムラは、 0 シ 独 で財 力 ン 才 産 区 才 丰 二二 複数 一を作 3 ウ ウカイ(大入会)と呼ばれていた愛鷹山森林組合の共有地を連合して利用していたとい ユ 0 2 若干の違いがあることがわかる。 T ウ ムラが連合して共有地を持っている場合が多いように見うけられるからである。 = 15 る ユ ウ が、 カイ 下 和田、 (四ヵ村共有入会)として連合し、 と今里は大野原 それは、 については連合し 愛鷹山 このほか 東麓のムラは箱根山 してお に り これ 金沢、 3 0) 上 4 ケ のように単独 ラを含めて愛鷹 田 御 宿 葛 山

そ が 権 下和 0 あ 利を持 ほ ま 田と今里 か b なか に ちここから屋根替えのための茅を刈ってきていた。 今里と連合 2 たので、 下 T 5 和 た。 田 草刈 は で約二〇町 2 りは 愛鷹 0 丰 大野 Щ 3 歩余 ウ に 原に行 ユ の共 ウ 七〇町 ザ 有地を大野 0 ン T のうち約三〇町 歩から一 1 たという。 八〇町 原 に持 しかし、 大野原 歩も 2 歩ほどが てい ある 下和田 た。 15 は 力 かと思 下 ヤ 和 0 1 田 丰 わ (茅野)と呼ば れ 3 分だけで約二○○町歩 るキ ウ ユ ウザンに 3 ウ れ ユ ウ そこ は馬に食べさせる草 ザ ン は (共有山) 以上も 軒 だけ

名持ちは、 ちといい、 に 今里 皇室 一御料」 六二軒 最初八 で だけ 大野 四 あ 「名持ちからはじまったが、二軒 たところ が 原に下和 権 利 を持 の払 .田と連合で草刈り場を持つと同時に、 0 T い下げを受け、 1 る共有地 で、 が権利をなくしたために現在では八二名持ちになっ 八二名持ちという共 ここが・ 古くか 3 愛鷹山 0 有地 力 t を戦 ノで に共有地を持 あっ 後 カコ 3 た。 持 ح 0 0 ている。 ように 0 ほ かる な に それ 0 T 今 T は六 里. で る。 る。 は 二名持

### ウカイ

愛鷹 現 在 Щ では東急に売却 に約七五町歩 3 にも及ぶ四 れ T しま カ村共有入会を持っていた。 たところが多い 15 うが、 金沢、 これらの 上 4 4 ラの人々は、 田 御 宿 葛 几 Ш カ村 は 共有入会 連 合

٤

あ

行 を利 連合して愛鷹山 0 た 用 り L T + Ŧ シ ッ 0 丰 パ を拾 各所に持っていた。三字共有入会は場所が分散していたが、 タ (焼 って来るようなことも 畑 P 力 1 コ ン 開 墾)を行 あっ た。 ない、 富沢、 馬に食べさせるための草を刈 水窪、 上がき 一狩(長泉町)も、 比較的 サトに近いところにあ り 共有地 雑木: を三字共 林を利 崩 有入会とし きを C 7

が 5 あ ろうう 単 L 0 的 て官有林を払 地 K 域も含めて沼 で共有地を持つことが多いのに対して、 見 4 れ ば ラ連合によって、 3 い下げてもらったところであるといわれており、 の入会を持 几 力 津 村 前 共有 ほ か 入会や三字共有入会よりさらに上 0 入会という名前 ○カ村が持っていた。 ているムラは大入会の権利 愛鷹山東麓のムラは、 の共有地を保有する形式であったように見うけられ ただし、 も持っていた。 の方に 大入会は愛鷹山 愛鷹山森林組合として、 官有地の払い あ 0 たとい 大入会とは、 の中でも遠くの高 う。 下げなどの形式の影 このように、 明治時代に江 愛鷹山 5 ところに 南麓 箱 根 原 Ш 0 \$ 根方街道 西 ある 位 麓 尽 0 力に 0) 4 ラ で 沿

植 用してきたわけ この 林 が ように、 なされるようになってきている。 裾 野 であるが、 市 域 0 4 近年ではその生産と生活に占める重要度が減少し、 ラは箱根 Щ また、 愛鷹山、 売却されるところも増えてきている。 富士山 10 共 有 地 を持ち、 それ Щ を生産 のほ や生 とんどの場所 活 0 ため には に利

E

+

\$ 0 畑 二一一名共有のうち一部分をすでに売却している。 から 広 御宿 が っていたところを東急に売却したものであり、 現在千 0 共有地であっ 福 が Fr. 0 住宅 た。 地 御宿の場合は、 とし て分譲されてきたところは、 共有地を売却した代金の 箱根山のうちもっとも高 御宿 のトョ 9 か 0 つては千福 I 部を使い公民館を建設 場用地や矢崎 い部分がそれで、 の共 有地とし 電 線の 寸 藤田 して 地 開 15 観 光 に売 7 n 茶畑 ると "

ことを意味していた。

L 1 れ では、 が、 現在でもこの有線 また、 カン その代金の一部で二百ボルト農電という電気を引き、 0 ての草刈り場を四七人区と呼ばれる共有地として存続させながらも、 茶畑 のうち市ノ瀬のモョリで独自に持ってい によっ T Ŧ  $\exists$ IJ 内 の連絡を行うようにしている。 た共有地は、 モ ーター また、 ほとんどが藤田観光に売却されている。 による精米所を作り、 富沢では共有 ゴ ル フ場に貸し、 地を売却したわけでは 同時に有線放送も設置 現在では草刈り場 な

## 「 農業生産のための山

ての機能を失っている。

アラクオコシ 多様 主に共有地として存続させてきた山を、 な利用方法があったが、 その中でもっとも重要であっ 裾野市域の人々はどのように利用してきたのであろうか。 たのは、 農業生産のために Щ を利用して

共有地だけを農業生産のために利用してきたのではなく、

私有地となっ

7

1

る

Ш

も同

きたことであ

2

た。

もちろん、

を伐採し搬出したあとに、 に を栽培するものであった。 じように利用してきたが、 雑木林 や茅場などであ このあとで紹介する開墾 特にアラクオコシと呼ばれる山の開発は、 たいていは焼畑を行い、 2 たところを畑 にひらくことを指した。 再び次の植林の苗木を植えるまでの数年間を、 は 戦時 中 から戦後の食糧難の時代に主にサツマを栽培するため これ 山に焼畑をひらいて、 に対してアラクオ コ 陸稲 シ は 畑として使用 杉 あるいは P E 1 牛 ソバ 0 植林 など

松井家、 箱根 Щ 新 0 方 田 0 から 小林家など山林地主の植林地を伐採したあとに、 アラ ク 才  $\exists$ シ 0 実態を見てみると、 たとえば深良では、 そこを深良の人々が借りてアラクオ 共 有 地 0) 雑 木 林を伐採 したあとや、 コシをしていた 町 田 0

たという。

多く、 雑木は冬の方が乾燥して質が良く、 という。 ことに好意的 そのあ 焼畑 伐採したあとは三月までに火を入れ、 だっ を行 とに陸稲を作り、 たという。 S 数年間 また、 では 養蚕が盛 あ るるも しかも小枝はモ 雑木林をアラク h 0 であっ 0 畑に た昭和 その 才 シキとして利用できるので、冬の伐採がもっとも良 なるために土 コ シ のはじめまでは、 あとに作 にするときには、 物の種を蒔くようにしてい 地 が平らに 陸 きれ 稲 たい のあとに桑の木を植 てい冬に伐採を行って 1 になるということで、 た。 最初は大豆や えることが か 地 た。 1= È 多か そ 小 0 豆 で れ から あ

とニンジンや 0 15 茶畑 する場所は、 ほとんどが個人持ちの山 T ラク 畑 サ にすることが " 才 山 マ、 コ 0 中でもサトに近い陽当たりの良いところで、最初は、 冬には麦を栽培することもあっ は 多 杉 やと か 0 0 たとい ノキ アラクオコシであった。 0 植林 う。 そのために、 をしてあった個人持ちの山 たとい また、 二一一名共 わ れ T 焼畑にすることも少なかったという。 5 有の る。 の木を伐採したあとに、 陸稲、 共有地をアラクオ ソバを蒔き、 コ シ 徐々に土が熟れてくる にす 残 2 るとい た木 アラク 0 根 が腐る コ

よ たあと T アラク というわけではなく、 特に肥沃なところは陸稲を多く栽培し、 7希望 愛鷹山 才 二年目にはソバを作っていた。 者 シ が行わ が数名 を利用 で土 れていた。アラクオ したアラクオコシについて見てみると、 必ず傾斜地に対して横になるようにサクを切り、 地 を分けて焼畑 15 コシでアラクにするのは、 そのほ このときに、 するも かに ので T あ T 口 2 ラクは種の蒔き方が決まっていて、どのような方向でも コ た。 須山では、 シ を栽培することもあった。 アラ ク オダイヤ は 戦後まもない頃まで愛鷹山 種を蒔いていた。 できるだけ近くのムラの (財産のある家のこと)が植 普通、 須山では、 最 低 初 0 Щ 0 5 年 地 İ を利用 に陸

雑木 1 0 L のように使っ ようなところ あとには てアラクで作 たとい 再 K び杉の苗を植え植林にしていた。 てい は った作物は、 土が 丰 くとだんだん畑として熟れてくるので、 0 植 流出してしまうことが多く、 林を伐採したあとに焼畑が 何を作っても品質が良かったといわれている。 その理・ 行われ、 それを防ぐために植 由 は 植 そのあとは陸稲とかサツマなども作り、 年目 林 0 ロにソバ Щ でも傾斜 林 を蒔 を早 アラクはたいてい二、三年 き 地 8 の斜 T 二年 い たと 面が急勾配のところも 目に小豆などを作 5 う。 葛 で や が て植林して 愛鷹 いわり、 T た。 Щ そ で

出

荷され

ていたとい

わ

れ

てい

とき 力 に イコン とい " う場合も 7 戦時 0 このような 栽 中 培 ある)し、 から戦後にかけて、 K もっ アラクオ とも適して 主にサツマなどを栽培することも コ シ が、 5 焼畑を行わずに共有地など山 たの 植 林の伐採後 は赤土のところで、 の焼畑をともなう畑地としての あった。 ほとんどは、 の雑木林や茅場などをカ 箱根 山  $\subseteq$ の場合も愛鷹山 島甘藷」 Щ 0 とい 利 イコン 用であっ 3 0 場合 銘 柄 (開墾、 で大阪 たの \$ 開 に対して、 墾 方 丰 面 L 15 た

に開 0 とんどは 高 地 0 たとえば深良では、 集落 墾が V 所 場所まで切りひら や深良財 に近 行わ サツマを栽培したが、 れ いところで 産区 サ ツマが栽培されていた。 0 供 土 か 地 出 あ れてい を が た 開 盛 サツマとコ 墾するとい 0 W に行 た。 に対 そして、 わ L て れ た 開墾は ムギを輪作することもあっ うことが多 開 九四 そのような遠くの場所であっても、 墾 0) アラク 場 〇年代から一 か 所 オコ は 2 たという。 集落 シとは明ら 九五〇 か 3 た。 開墾するところは雑木林や茅場のところ 時 か 昭 茶畑でも、 間 に異なり、 和三〇 ほ ども 年 馬に肥料をつけて運んだも か 代に けて登り アラク 深良と同じように箱 か けて、 3 才 なけ コ シ 箱根 れ 0 場 ば な 所 Ш 根 が 0) 比 山 中 な で盛 0 較 0) であ 的 個 ほ ほ 人

ある

そ 土ので

ために、

愛鷹山

0

赤土を利用

したサツマ

の栽培が

が盛

h

であ

0

たの

である。

また開墾とサツマ

0

関連では、

サ

トと

Ш

の土

壌について次のようにもいわれてい

る。

ったといわれている。

### 赤土とサツフ

が 山 の中 ツマの栽培に適していたのである。 このような開墾は愛鷹山東麓の村々でも非常に盛んで、 でも、 才十 (沖)の方へ行けば行くほどに表面 たとえば、 富沢では普通サトの土壌は黒土で愛鷹山 の黒土が少なくなり、 Щ の土が赤土であるために、 赤土が 表土へ出てくるという。 開 の土 墾に

黒土のところ に サ たサツマは柔らかく、 このような赤マサのところで作っ " 7 は デ の方が良い (泥)によって味が ものができるとい あまり品質が良いものではないという。 違 S た 特に山 サ う。 ツマはうまくて硬 0 土が 赤 7 サで 1 6 黒土は 0 が しかし陸稲について言えば、 できる。 ウワッカ これに対して、 タ(上っ方)に少しあるだけであるため サ これとは逆にサトの トの黒土のところで

そ れ が 裏作として行われ れ ぐことができたからであるという。 成長しているのでその ることになるが、 がまたサツマの堆肥になることになった。 た 開墾 によるサ ることもあったが、 " のような栽培のしかたをすると、 間 7 にサ の栽培は、 クを切って肥料を入れ、 愛鷹山 そして、 開墾した山の畑にも栽培されたのである。 でも そのあとでコムギを刈ることになったが、 コ ムギの栽培と交互 挿 そこにサツマを挿していた。 したば か りの に行われることも多か サ ツマ から 特に麦を収穫する六月頃は、 コ 4 ギ このあとでコ 0 このときには殻を残すので、 日 陰 0 に た。 な ムギ り コ 4 枯 0 ギ 収 は ることを 穫 コ 水 行わ 4 田 ギ 0

の雑木林から集めてくるムラであった。

供 出 カイコン 0 ためも あっ 葛山 に なってい 一でも、 て開墾によるサ たとも 愛鷹山を開墾し赤土のところでサツマの栽培を行ってきたが、 5 'n わ れてい 7 の栽培 る。 が 盛 葛山でも、 h で あ 0 戦時中 た。 関 東地 の増産を奨められたときと戦後 方 か ら闇 で買 1 出 ここでは、 L に来る人も の農 開墾が災害 地 1 改革の た 0 で、 0 その 原 には、 天

ような人々には、

供出以外にサツマを売却するということもあっ

た。

浸水までをも起こすような家も出てきてしまったという。 K 8 山 に のような水害は少なくなっ ところが、 山 0 保水力が に木 が 葛山 少 なくなり、 なくなり、 の中でも田場沢では、 Щ 田 たとい 場沢 から土砂が流れ落ちて河床が上がった。 の川 われ に大水 てい 関東大震災のあと家を作るために が出 る て水害を起こすようなこともあっ 現在では、 河川 そのために、 Щ 、改修もすすみ植林も行われているために、 の木 を切 Ш たとい の水量 り う。 さらに開 が 増 そ 加したときに、 れ 墾 は で 濫伐し 濫 伐をしたた たため 床上

た 水門 デサク 水窪 か 3 は愛鷹 用 愛鷹 水 てて愛鷹山まで距離があるようなところでも、 を引き、 Ш Щ に で開墾を行ってい 独自 多くの耕 の共有地 地 を持 が 水田 たムラでも、 っておらず、 として利用され 富沢や葛山 草刈 りは水田 てきたために、 愛鷹山 は山山 の土手から刈っ で開墾を行うようなことがあった。 に近いムラであったが、 サ トに は たり、 ほとんど畑を持 堆肥にするため 水窪のように、 0 T 5 水窪は、 の落葉は な 黄瀬川を隔 か 三き た。 個 人 ま 0

を作 1 15 は かる てい 水田をひらき、 し多くの た。 家 0 は ように水窪 デサクで畑作を行う形式であった。 南 色(長泉町) では、 愛鷹山 地 籍 の愛鷹 に開墾し 0 ていたことをデサク(出作)というような言い方をしており、 大入会のところに開墾をし て畑をひ らき、 サ " 7 لح ギ

など

サ





写真 1-11 大野原 湖尻峠からの眺望 (深良) 茅が茂る大野原 (須山)

は

一に須山

0

人

T

5

1 畑 b る 共 15 ここに畑をひらい

限 0

3

れ 主

T

1= よう

で 女

た。

大野原へ草刈

れば不可能であっ ると近くのムラでなけ たよ

として利用するとな

15

来たムラは多い

が

大野原の畑

山とは

異

なり、

大野

原

場合は多くの

ラ が

有

地

で

は

あ

た 4 2

箱根 愛鷹 Ш

に陸軍が演習を行っているときには、 大野原で畑を耕作できたのは陸軍 畑を作ることができなくなっ 立入禁止になるので耕作は不可能であった。 たという。 の演習場であった戦前までで、 \$ 2 とも、 戦 前 に 畑で作物 戦後、 ア 0 こういう場合は立ち入りの 栽培ができたとは メリカ軍に接収され 1 たあとは ても、 規 実 則 立

際

入禁止になり、

うで、

とも近

い須 Щ

が畑をひ

ららき利

崩 L

T

5 た ので

ある。

て

た

た草

0

堆肥とし

ての利用

については、

ムラによっての大きな違

いはあまり見られないが、

1

<

、つか

の例

することになっていた。 が あ り 演習がはじまる一時間前に花火が鳴り、 つまり、 その規則を守っていれば、 三〇分前にも再び花火が鳴ったので、 耕作も許可されていたのである。 それを合図に大野原から退出

たとえば、 カコ 演習中に大野 須山 か 3 御 原 殿 の中 為方面 0 須山 の学校 と御殿場を結 通 つ てい ぶ道路 る生 徒 が 通行 は 演習中 止めになる は 通 行ができず困るようなことも 0) は 実際の生活にとっては不 あ 便 であ

う。

る。 なっ ょ で あ ては農作業に支障をきたすものであった。 る。 後 たことと山 大野原 n は の雑木林を利用することができたために、 から あ アメリ ま り農 カ軍 地 を持 ・に接収され 0 T 5 な たことは、 い人々が そのために、 ここに 大野原に畑を持 戦後、 畑を持 須山では大野原が接収されたあと、 従来にも増して炭焼きが つ人々にとっ 0 てい た からで、 てもっ ア とも不都合なことで X 盛 IJ んに カ軍 炭焼きが なっ による接収 たという人も あ よい収入に たよう

川 に役立 草刈 馬 のり場 に てることも多 踏ませ、 利用しているものであっ これまで見てきたようなアラクオコシやカ さら か 0 には厩から出し堆肥として利用することが た。 市 域 では、 た。 多くの これ 4 に対して、 ラが 共 有 イコンや大野原 Щ 地 の中 K ある草木を利 ・に草刈 般的 であっ の畑などは、 り場を持 用して堆 たのである。 っているの 肥などを作 山そのものを農業生産の 草刈 で、 り場 人々がそこから草を 9 農業生 0 利 用方法と刈 産 0 ために た 8

深良では、 すでに記したようにモ 彐 IJ ごとに共有地 の管理と利用を行っていたので、 たとえば上原 0 七 彐 IJ では草

T

は

自

に

川

ってよか

0

たのでは

なく、

屋根替え用の茅場の茅を刈ることは

できな

か

2

たとい

川

りは上

原

0

共

ことに 0 終 な わり頃 るの で、 まで刈っていたという。 、有地に行くことになっていた。 草刈 りをしながら馬に草を食べさせてもいた。しかし上原の 刈った草は馬の小荷駄にして、 草刈 りに行くのは、 Ħ. 持って帰ってくるために、 月 0 節 句 共有地 が 終 わ の草といっても、 T カン ら刈 必ず馬 りはじめ、 を連 特に茅に およそ八 れ

0 か 休 け 草刈 か を刈り、 .息をとったあと、再び午後二時すぎから山へ出かけて行くことになっていた。 て戻ってきていた。 2 T りに行くのは、 ても、 午前 これ ○時頃には帰ってくるようにしていたという。 はやが 暑い 六把で一駄という計算 日中は避け朝と夕方の二回のことが多く、 てなくなるのであまり心配は であった。 帰ってくると、 い 3 なか 雨のときには草刈りに行くことは 2 たとい 朝は、 馬を川 う。 日 の出 川 連れて行き水をか 2 頃 た草は、 には朝飯を食べ、 馬 0 小 けて 荷 な 駄 5 アサ にし P が り 朝 て六 お 霞 朝 把

C あった。 H 真夏に から かりで草刈りに行き、 なると、 この土 甪 天気の良いときを利用して数回 干し の草は納屋へ積み上げ、 刈った草は刈ったままで置き干しにし、 冬の期間の馬の飼料としていた。 は 土用干しに出 かけることになった。 それから夕方にまとめて持 土 一用干しとは、 って帰ってくること T

丹な を使うことは などの 深良では 3 モ 3 箱根 箱 1) できなか 根 0 人々にとっては、 Щ Ш には茅が多か 0 ったが、 ほ か に 大野 大野原の場合は馬力を使うことができ、 原 ったが、 大野原に行く方が便利なこともあ に約二〇町 大野原 歩 には茅はなくウザラモ ほ どの草刈 り場を持っていたので、 2 深良の中でも大野原に近 グとか芝が多 大野 か 2 原 た。 に草刈 L 5 かっ 新 りに \$ 田 とか 箱 行く人 Ш は馬 力

のように して草刈り場から採ってきた草は、 馬に踏ませて馬 の糞尿をしみ込ませることによって腐 らせ、 既

2

2

ホシクサ

0 たとい

j. 行

田 0

[植えの時期

が 15

六月から遅い年

では七月まで

か

0

たの

で、 0

田 は

植

え

0

あとに、

まず 普

永

ンクサと

草

/iJ

り

に

<

は

期

間

が

特

決

8

3

n

てい

る

わ

1+

では

な

か

0 たが、 か

夏

間

Ш

0

草

lix

り

が

通

で

あ

草 厩肥 作 所 2 た状態 -を馬 でタメ てい を使うので 15 (溜 踏 たという。 の糞尿を草に ませるの (め)になっ はなく、 最初、 では ていたので、 か け な て堆肥にしていたのである。 < 度 馬に踏ませたあとは堆肥小屋 堆肥小屋に積 間 そこに残飯とか生ごみまでも捨てるようになっており、 0 糞尿 によ h 2 で肥を休 て草を腐らせ堆肥 また、 上に出 ませ T Ĺ 小学校の便所のく お 積ん 1 を作 たも でいった。 る人も 0 を使う 5 普通 のが み取りを行 た。 は、 般 n 的 直 は そのような生ごみ 接 5 で 以 あ に それ 厩 前 0 から た。 は を利 ほ 出 ٤ ح 用して W 0 L ど たままの ほ が が カン に る 便

家

6

あ

2

た

j.

0 若 よく遠望できるところで か を な 持 で 赤くなるの け 若 荷駄 い衆 るようなことも多かったという。 衆はこ あ 5 帰 たと の る 淹 0 0 茶畑 が見える。 クラブ 頭 が は、 3 普 0 通 たい でも、 モ 日 で 寝泊りをしてい ていの家 IJ あ ある。 このような光景を見ると、 0 深良と同じようにモ 0 若 た。 2 冬の 衆は、 たとえば、 で若い衆と決ま 開墾 箱 た。 日に のときにここから沼 根 その 滝 Щ 刈る草の量 頭 ョリごとの共有地 0 中 ために、 0 0 でも モ ており、 若い衆は 日 シ IJ シ は 朝になると、 で は 若 口 小 ٤ 若 津 V 0 荷 衆が馬を連れ、 ぼちぼち帰らないと暗くなる」と言って家 1 V から草を刈ってきていたが、 大瀬 駄 衆 う陽当 で馬 0 若い 崎 クラ たり の背に 0 方を見ると、 衆が仲間と連れ立 ブ 0 (俱楽部 左右三 馬 良いところ の小荷駄を利用し 一把ずつ合計六把で、 が ちょうど午後三時 現 在 行っ その際 ってそのまま草 0 不 た。 動 堂 な に草刈 で が あ 5 に戻 頃 は りに行くの 駿 れ 心 刈 た 15 河湾 海 が b 0 に たも た草 で 0 色 駄 出 から

7 草取 に、 るようにして、 りをやり、 八月一日盆であるためにこの日だけは草刈りを休むことになっており、 土手の草刈 盆の前 後から山 りもした。 へ草刈りに行くことになったとい そして、 茶畑 は 八 月 日 盆である 0 で、 この その前日の七月三一日 盆前 までに 田 畑 0 草刈 は ボ b を終え ンクサ

(盆草)といって、 馬 に草を与えなけ 必ず山へ草刈りに行くことになっていた。 れば ならない ので、 草を刈 ってお か なけ しかし奉公人の場合には、 れば休みをとることもできなか たとえ盆 0 たという。 一の八月 そして、 日であ 7

ばならないほどであっ < 山 は 月二日は再び草刈 なってくると、 で乾かし、 山 が T で草を刈っ 盆 を過ぎると、 翌日に持って帰ってくる方法であった。 茅は たあとそのまま束ねてその日 りに出 ススキ るの ホシクサ(干し草)といって、 が普通で、 う。 (穂) が 出てきて草が徐々に強くなり、 アサクサを刈りに行っていた。 のうちに持 この 草刈り ホ 2 シ て帰るのではなく、 の方法もかわるようになったとい クサ は、 このような草は切ったうえで馬の飼 納屋に積み冬の飼料になっ 川 0 たその 日 は刈 う。 た。 ホ b 0 シ 300 料 ば サと なし にしなけ VE 秋 うの が れ 近 T

山 へ戻る堆肥 をとげ、 山 IIX 1 に戻されるとみなしてよいだろう。 られた草は馬に踏ませ、 0 畑 や開 整され た山 のサ やが ツマ 0 て堆肥小屋に出され 畑 5 に入れ わば Ш られることが多い の草は、 て堆肥として使われることになるが、 サ 1 で加工 ので、 一され 山 Щ で刈られた草は に戻され る循 環 再 0 35 堆肥 流 堆 肥 n とし は 0 中 サ

たとい

積 茶畑 み上 げ 0 た状態になると、 滝 頭を例としてその過程を見てみると、 丰 " 力 I シ(切り返し)をして細かくし良い堆肥にするという。 刈ってきた草は、 馬に踏ませやが て堆肥 小屋 そのときに、 上に出 「すが、 家 堆 によっ 肥 小 ては 屋 K

に存在してい

たのである。

川 堆肥が早く腐るようにということで、 ギとサツマを交互に栽培していたので、 か 0) そこに堆肥と家によっては魚粕を入れ、 け られた草 ようにできあ るのではなく、 は 厩と堆 が つ た堆 F. 肥小屋を経 ブといって肥溜 肥 は Щ て再 で開墾され 人間 び土 めからさらに糞尿を移して入れておくところがあり、 伸 その上に土をかけサツマを挿していたのである。 にかえることに びたコムギの の糞尿をかけることもあったという。 た畑 のサツマ 日陰になるようにサツマを挿していた。 なっ に入れられることが多く、 ていたと言えよう。 糞尿は、 堆肥の入れ方は、 便所や肥溜 ここか ちょうど六月頃 このように、 らか 8 か 鍬4 け でサ らそ T で、 Ш クを切 のまま コ カン 3 4

## イと大野原

根

Ш

に

お

けるそれ

と根

本的

な違

2 が

あ

るわ

けでは

な

いが、

葛山

とい

· )

つの

ムラでも、

七

3

IJ

K

よ

2

T

利

用

す

る共

有

愛鷹山のニュ ゥ 山 2 の入会からの草刈りの例として葛山 れ まで紹介してきた深良と茶畑の草刈りは、 の例を見てみたい。 箱根山 の共有地を利用したも もっ とも、 愛鷹 に のであるので、 お け る草刈

坳 0 場所 が 違 7 5 るので、 その具体的内容を紹介しておきたい。

沢 20 であるために、 13 という五つ すでに紹介したように、 H 場沢 \$ 0 モ 大野原へ行く人も多かった。 とも = IJ んに分か 多 か 葛山 2 たと れ ているために、 は愛鷹山 い う。 L の四カ村 かし 愛鷹山 そして、 ほ 共有入会を利用していたが、 か 0 の入会を利用して草を刈 T 実際に草刈 日 IJ 0 人々は、 りに出 入会へ行くよりもむしろ大野原 かけて行くのは若い衆で、 葛山 りに行 は上城、 くのは、 下条、 入会 中 二上 村 朝出て刈ってく る道 へ行く方が便 中なかざと 田 場 T

る 0 が 普 通 で あっ たとい

野 な (焼き)が お 葛 かあり、 Ш KE お そのうえで、 け る入会か 3 七月 の草刈 H b に 0 つい ク サ T 力 は IJ 1 ジ 明 治三〇年代生まれ メ(草刈り始め)から八月終わりまでが草刈 の人 0 記憶では、 春 15 は草 b の期間として決 [IX

ヤ

でも多くの

4

ラの人々によって利用されてきていた。

めら れ つまり一 てい たという。 駄つけて帰ってくるのが普通で、 特 に クサ カ IJ ハジ メは、 若 その日 V 衆がまだ夜が明 は草刈りだけでそのほか け ない うちに出 の若 5 か 衆の仕事 けて草を刈 は免除 り 馬 され 0 小荷 てい たと で六

草刈り そして実際 で 般的 市 には、 域 であった。 の人々 八月一三日 にとっ 特に大野原の場合、 て、 0 箱根: 盆 が 山 はじまる前までには、 や愛鷹 急傾斜 Щ の共有 0 Щ 地 道を上るわけ だけではなく、 草刈りを終えているのが普通であっ では 大野原を利用して草刈りを行うこと な 5 0 で馬 力も利用 でき、 たとい 裾野 市 域 から 0

草刈 地 てい を持っていても大野原を利用し たとえば、 りをするという形になっ たものの、 葛山 それを一度下和田に売却してしまったために、 0 中 でも中 T 里 V 0 た てい モ = たという。 IJ で は、 愛鷹山 ただしその利用 0 共 有 地 須山 方法 0 道 は から共有地 が 不 中 -便であ 单 では の利用 0 大野原 たところ の権 VE 利 共 は を数軒が 有 地 たとえ愛鷹 とし 共同 ての で買 Ш 利を持 15 共有

ちに た。 ることもあっ 一ケ田 起きて草を刈 るい でも愛鷹山よりも大野原を利用する場合が多く、 たという。 度に多くの草を持って帰りたいようなときには、 りに行っていたという。 そして、 午前中だけではなく昼飯を食べ休息をとっ そのときには一人であるので、 若 い衆など男の人が、 夫婦連 六把ずつ刈って馬の小荷駄にし れで女衆も同 たあとに、 早朝 から、 再 行し、 び出 早いときでは 馬 か 力に け て行くことも 積 んで帰 て帰 まだ暗 てく てき あ う

が 須山 般的で、 L に大野 かも小荷駄よりも馬力を利 原 に近 5 下和 田 でも、 大野 用しながらであっ 原 草刈りに行くことが多かったという。 たという。 ここでも、 午前中のうち 下和田 に刈って帰 でも若 衆 が

現

在

0

栽

培

を見てみると、

たとえば葛山

では、

労働

力

0

面

か

3

V

0

て

兼

業農家

には芝が便利だということで

芝の

栽培を行う家が多いとい

われている。

多くはかつてサツマとコ

が 通 であったが、 冬に馬に食べさせる乾燥させた草を作るときには、 家族中で何日間か出かけて刈っていたとい

う。

止

0)

薬になるとい

わ

れ

T

ることが多く、 大野原の芝 原 の芝に は これ シド 大野 たが、 が 原 x 芝が多く生えていたことであった。 やがて現在にいたるまでの裾野市域における芝の栽培に成長していく基礎になっている。 の場合、 バ ラと いう植 箱根 物 山 や愛鷹山 が 混 ざってい しとは異 て、 なり、 この そして、 シド 草の植生に メバ 芝は高さが低いので、 ラ 0 違 シド 5 が見られた。 メ(実)を採り焼酎漬 草刈りをしたあとに芝が それ は 茅などの草も けにすると、

お に 2 ほ る芝の栽培がはじまったと お か 具 最初は 芝が む 0 ね 15 わ と同 搬出されるように いば芝の 0) やはり大野原の芝を刈り出荷していたという。 頃 大野原の芝が現在のように ために、 じように までに刈り尽くしてしまうような状況になり、 栽培 この 堆 は 肥 共有 なっ 5 頃 にっち わ から養蚕 地 れ たのが最初であったようである。 れ 0 るだけで ている。 独特の のための桑畑など畑を転換するような形で、 畑でも栽培され成長して行く過程を見てみると、 現在 利 あ 用 0 では、 方法 たようだが、 の中 須山、 から生まれ しかし、大野原の芝を利用できたのは一九五〇年代までで、 下和田 戦争中に飛行機の基地 業者の需要をまかなうことができなくなっ そして、 た のみならず今里、 種の在 戦後はゴルフ場などの芝の需要がある 来産業であると言 須山 などに芝を使うということで、 葛山などにも芝の畑 や下 もともとは、 和田 を中 ってもよいだろう。 心 に 大野原の芝は は広 てし 畑 が ま 15 お 1+

ムギの畑であったところが、一九六○(昭和三五



写真 1-12 ザツボクリン (下和田)

跡 る

継

ぎに

はちょうどよいという。

しかし、

年配

の人の中には、

芝を出荷

考えられ

てお T

り、

兼業農家でも日曜日を利用して除草剤

(農薬)を散布

す

などし

5

れ

ば

年

間

で出荷できるので、

特に、

近年では若

い農家の

荷 を 年

するように

なっ

てい

る。

植えつけたあとの芝の管理は比較的簡単だと

頃

畑に転

換してい

ったとい 0)

う。

芝の

は

た

5

1

年 頃

期 か

にして ら芝の

お

り

植えつ

け

る

が

三月

か

3

梅

雨時 栽培

で

翌年

· の 三 T

月

出

雑木林と堆肥

るときには土もついていくので、それを嫌がる人もいるようである。 共有地 から草を刈 り、 馬に踏ませ て堆 肥 にしてい たほ

林として 自 り 月 然 か のままで あ ら三月頃まで落葉を拾い集め、 る 5 V たもの は あ 馬 0 15 が多か 踏 た か に のではなく、 ませて堆肥とすることもあっ 2 Щ たという。 0 共有地や私有 クヌギなどの落葉樹 それをサツマグラ また、 地 枯葉を利用 0 雑木林を利用して、 た。 を計 雑木林はまっ (薩摩鞍)に入れた した堆 画 的 肥 に が 植 たく サ "

たとえば深良では、 とも 適し ていると考えている人もあり、 箱根山 の中でもトオ ヤ 7 (遠山)の 夏場の草刈りに対して、 才 丰 (沖)の方が雑木林になっていて、 冬の枯葉搔きは堆肥を作るため 一二月頃 から冬 0 必 の間、 須 0 作

業であっ

に

\$ 0

そこのクヌギ林

へクヌギの枯葉を搔きに行っていたという。

これも草刈りと同じように、

馬の小荷駄で行くの

が

普通

とい 0 で、 0 1 時 発芽させた芽を開墾し た。 期にも重 コ サ ツマ ン ザライ(熊手)で枯葉をかき集め、 なっ グラへ入れる場合には、 ており、 た畑やサ サツマを挿したあとのサ トの 集めてきた枯葉をサツマグラに敷き、 畑 に挿し 集めた枯葉は六把で一駄ということで、 たのである。 ツマグラの枯葉は、 ちょうど、 水田に入れ堆肥として利用する場合もあ サ ツマを挿 サツマを置き、 げすの 小荷駄にして持って帰 が六月頃 発芽させた。 気になる。 0 ってきて 田植 0 13 え

肥を作 ばくか 場合は馬の糞尿で湿らせたあと堆肥小屋へ出し、それを何度もキ 葛 山 0 でも、 T お 金を払 たとい 冬になると入会や私有地 って借り受け、 落葉を搔くということもあっ の雑木林 から落葉を集め てい た。 " た。 カエシをして、 小荷駄で持って帰ってきた枯葉は、 家によっ ては、 家によっては、 他 心家の私 有地 人糞なども入れ 0 馬に 雑 木 踏 林 ませる 堆

木はここから採取されたのであり、 な お Ш 雑木林はこのようなサツマグラや堆肥としてのみ重要であっ 燃料になるモシキ(燃し木)についても雑木林から拾われてくることが多か たのではなく、 あとで記すように炭焼

# 三 現金収入のための山

Ш に近 賃仕事 5 う空間を見たときに、 須 の Ш などでは 農閑期 Ш 仕 事 ス の山 をする人々 スダケを山 は 利 山は仕事をすればするだけ稼ぐことのできる空間であった。 は 用 から採取 さほど多くは 0 L かたによっては副業ともいえる賃仕事の場所であっ i それ なかか を加工 2 たようだが、 して売却 箱根· i 現 Щ 金収 に近近 入を得てきて 5 4 ラの 人々 た。 は 5 市域 た。 ハ コ その ネ の場合、 ダケを、 ような意味 愛鷹 わゆる

結び、

馬で運ぶ方法である。

#### 山仕事

13 仕 事 茶畑では、 から見てみると、 農閑期の冬に製材屋 山で雑木や植林してある杉、 に頼まれ てサキヤマをする人もいたという。 Ł ノキなどを伐る仕事をサキヤマ サ 丰 ヤマで木挽きを (先山)とい

ところまで出 する人と伐った材木を山から搬出する人は違い、 山の高いところまで馬力が行くことはできないので、 途中 から馬力を使っていた。 ズリ 馬に荷車をつけて引く馬力を使い、 カンというのは、 ズリカン 材木に缶を釘で打ちつけ、 (摺り缶)という方法で馬力が行くことのできる 材木を山から出したという。 その 缶 か 3 鎖 を馬 1= に

2 ところが、 2 を得る人も 0 土 域では、 う。 地 0 関東地 他地域から流入してきた専門の炭焼き業者のために、 いたようで ほとんどの人々にとって、 須山や十里木を除いて、炭焼きを専門的な職業とし、 方や富士郡 あ た などから炭焼きの専門の業者が入ってきて、 炭焼きは現金収入のためというよりも自家用をまかなうため 炭の搬出など運送に携わり、 売るための炭を作っている家はほとんどなか 山の中で仕事をすることは いくばくか 0 あ \$ たようだが 0 の現金収入 であった。 った

5 か う。 た炭 3 たとえば、 Щ のサト 行くときには食料や荷物を運び、 愛鷹 の搬出や彼らのために物資を運ぶことが必要であった。 Щ 0 山 中 には炭焼きの人々が入っていたが、 帰りには炭を「裾野」(裾野駅周辺)まで運ぶ賃仕事をしてい このような人々は山 富沢には、 このような炭焼きの の中に住み込んでい る人が ために、 るために、 たと サ 焼 1

### ハコネダケ

なっているが、 山 では、 もっとも高 戦後まもない頃まで、 い部分が ハコ 箱根山西麓の公文名、 ネダケの群落になっている。 茶畑などのムラでは、 現在 では利用され 農閑期、 ることは少なく 冬の賃仕

必 単 位

で計算され

た竹が、

多い日

には

日

円二〇銭にもなっ

たために、

特に比較的零細な小作の人などに

は

現

金

から

また戦後まもない頃でも、

〇貫目

要な正月前

にはちょうどよく、

コネダケで収入を得、

正月の準備をしたり暮れ

の帳

面の返済に充てることが

でき

たという。

に、事

そのようなことを「精根

かぎり稼げた」とまで述べる人もいるほどである。

に

コネダケの採取が盛んであった。

往時は、

ハコネダケを採れば採るほどに現金収入を増やすことができたため



写真 1-13 ハコネダケ 1・2 ともに深良・湖尻峠

たが、 ようで、 とき使われる籠として使われ さによっても用 普通であった。 駄にして持って帰ってくる ない竹は、 こともあった。 中 スケ(ピァースケ)に 竹伐りには、 に塗り込められることも 主にパ リ竹にされ 家を作るときに土壁 また六尺に足り ハコネダケは 馬を引き、 イ 途 プ が たり養玉 違 0) ラオ 加工され T 小 蚕 や V 0) 荷 0

たという。

パ

イ

ス

ケにされ

古

5

竹は

ラ

才

P

ステ

ッ

丰

にするの

に

よ

い

٤

5

わ

れ

T

2

た

竹に 卸 0 中 2 人が には イス ては、 多く、 アメ ケヤ 茶畑 IJ は現金で買取をしてくれたので、 長さや太さが一 力 0 「天理 の輸出 教 用 0 のステッキになったものもあり、 定の竹を伐っていたとい 周 井 VE 18 イスケヤと呼ばれ 竹伐りをする人にとって都合が良 う。 る仲 なお、 これは佐野や伊 買 V が 般的 多 か にはパ 2 た 豆 0 イスケにする竹は 島 か でここ 田 0 15 た 加 とい に 卸 I. 一場が す人 わ n あ T が 新竹がよく、 たためにそ L コ か \$

的 たという人もい サ なも " コ 0 ネダケはこのような現金収入の手段 野菜などの であっ たとい 畑 に入れ う人もいるが、 た人が多か 伐った竹を積み上げ 2 たようだが、 でもあったが、 特に、 肥料として使われることもあった。 て燃やし、 1 7 1 灰を冷やして肥料にしたもの にはこの ハコネダケの肥 料が 戦後まも \$ であっ とも な 時

と女衆の分業体制によって、 農閑期を利 ススダケ 愛鷹 箱根 用しての竹伐りであったが、 K 西 生 麓 えて 0 人々 竹伐り 2 13 が ス ハコネダケを採取 から加工、 スダケと呼ばれる竹 ススダケの場合はほとんどコリとして加工し、 出荷までを行っている人々もいたという。 してい の採取 たのに対して、 でを行 1 副 愛鷹山東 収入とすることが 麓 0 ムラ、 L 多か 荷先は御殿場で、 か 特に十 \$ 2 家によっては た 里木と須 季節 的 Щ 15 は では、

が 咲き実 を採ってきて粉にして団子を作り食料としたようなこともあったという。 が なってからで、 0 ススダケは六〇年 ちょうど戦時中 15 回枯れるとい の食料事情 われ、 0 悪 実際 いときでもあっ に戦 時中に たために、 度枯れ しか L てしまっ このとき、 ス ス ダケが枯 たとい 十里 う。 木 たあとは自生 枯 n Щ る では は 花

市

域

に入っ

てい

る板妻などでも、

ス

ス

ダ

ケの採取

は盛

んで

あ

たとい

う。

出

が

真

鍮

でできていたために、

2

0

真鍮もよい値段で売れたという。

ح

のような廃弾や真鍮を買うの

は

ボ

ッ

コ

t

うな形 L たも にした家も のを使 つって あっ 0 コ リの生産ができなくなっ たと いわ れ ている。 てしまっ たために、 長野や富山 から竹を買 5 製品として出荷

大野原の 4 大野 原 は 草刈 b 場や芝の 原 産 地 で あ 2 た が、 それ と同 時 に す で K 記 したような戦 前 は 陸 軍

学校は る。 らした草刈 0 存在 マ ヒロイ そのように見 防音 は 設備 り場や芝の原産地としての原型に加えて、 H 頃 か 0) 後 つい たとき、 3 は 聞 7 くことのできる射撃音ととも た校舎に X IJ 演習場は生活の中に溶 カ軍、 たなっ そして自衛隊の演習場としても使用され T 5 る なが、 これ け込んできた存在であっ E は演習場が 演習場という要素が 特 に須山 ある や下 が ゆ 和 え 田 加わっ てい たと言っ K 0 そ 人 人々に 0 る。 ように ている。 とっ ても その ては よ な ために、 現在では、 5 0 カン 日常的 T \$ 1 大野 L る な存 れ 0) 原 な で たとえば 在 は あ 自 ic なっ 然 須 00 0 T 戦 小 1=

た時 人 か 々 収入を得てい 3 代 見 に が E たときに 9 演習場は マ は 鑑 Ł 口 札 た は現金収入をも 1 から をし あり、 須山 のである。 や下 T それ 5 和 たようで、 6 を保有してい 田 っとも、 たらす場所 の人々にとっ それ タ であっ は る人だけ マ Ł て、 戦 口 イはまっ 後 た。 あ が正式 た T X タ か ij \$ 7 には たく自由であっ Ш 力 K 軍 口 仕事や竹伐りと同 許 が 1 可され 演習場を利用 (弾丸拾 てい い)を行 たのではなく、 たことになる。 じように、 するように V それを売却することによって現 なっ 戦 副 L 前 業的 T か 陸軍 から L な賃 現 仕 の演習場であ \$ 実に 事 様 は V で あ 多く 観点 2 た

火薬を抜 たあとに 八体的 土 に 一を掘 は 演習が 人 り、 によ 廃 2 弾を拾 あると、 ては 猟銃 5 弾丸が 集めるの 0 火薬 地 に で 面 あっ 使 に落ちて土の中 2 7 た。 1 不 る人も 発弾 もあ に埋 5 た。 エまっ り 廃 弾 不 T は鉄 発弾については火薬を抜 いる状態になっている。 くずとしてだけで は なく、 そこで、 くのが上 雷 手な人も 先 が 0 信管 わ T

後

0

頃

ば演習

が盛

h

で、

のような薬莢拾

い

が頻繁に行わ

れ

てい

た

0

で

あっ

た

回収業者)で、こうした金属類を集めていた。

後は、 るとき 後 に 廃弾掘 T そばに袋を持ち待っていて薬莢をも X IJ b 力軍 よりもむしろ薬莢拾いが盛んにな が演習場を使うようになると、 3 2 2 機関銃 たとい て帰るというようなこともあ う。 の訓 極端な場合には、 練で薬莢を大量 に放置してい 0 7 た。 X IJ 特 力軍 に から くように 朝 機関銃 鮮 戦 な 争 0 訓 が た はじまる前 練をして 0) 戦

場 軍 5 に常 0 たとい か 爆 か 弾 拾 L に 危 が う。 戦 険 演習場 てきた細 あ 前 が る つきまとっ 0 の外へ V タ 長 は 7 V E 落ちて爆発するとか、 形 口 T てい X 1 0 IJ 爆弾をバ 10 カ軍 た。 しろ戦後の薬莢拾 不 が 誤 -発弾 " 1 0 たの が 0 処理 わりにして草野球をし 軍 か、 事基 を誤り死 1 須山 にしろ、 地 K の集落 んだ人、 つきも 演習場への立ち入りであり、 0 方 0 機関 0 ていたところ、 1 機関銃を射ってきて火事が ・ラブ 銃 に射ちぬ ル は あ その爆弾 0 か たようであ れ てしま 爆発物を取り扱ってい から 爆発 1 おきたり、 怪我をした人、 L て死 んだ子供 T X 演習 るた IJ カ

# 四 日常生活のための山

ごくまれに 生 て 産 力 力 一や現金収入のためだけでは t t た バ L 4 ラによっては、 か見ることはできなくなっているが、 現 ような多様 在 で は な利 箱 根 たとえば水窪のように茅場を持たないために、 崩 Ш なく、 方法はほとん \$ 愛 應 日常生活のために Щ \$ ど影をひそめてしまっ ほ とんどの場 以前 は も必要不可欠の存在 所 Ш が杉 0 共有 P 地 た K の茅場 1 丰 L の植 か 屋根葺 上であっ から茅を刈 林 裾野 で埋 きの茅は た。 市 め尽くされ、 特に現 り 域 0 茅屋 人々 ほ 在 か では、 0 根を葺くため K とっ 4 ラ n 茅屋 か て まで見 ら買 根 Ш い入れ 15 0 は てきた 利用 家 農業

なく、

力

ヤ

ムジン

をして屋根替えをしていたという。

また、

茅を刈ったあとは、

共有地の権利を持ってい

る家

カン

な

け

れ

ば

なら

な

か

麦塚も、

箱根山

の共有地の中に、

茅場を持っていたが、

深良と同じように、

誰

でもが自由に使えるというわけでは

不足する部分は コムギ 。 の 4 ギ カラで補っていたところもあるが、 たいていのムラは箱根山や愛鷹山 にムラの茅場を持

7

たので

お そ 利用するために、 茅を刈り集 1 に茅場などの ∃ れぞれ 3 人ずつ出 IJ でその年に茅場の茅を使い屋根替えを行う家を決めてい 屋 では茅場の 根 根替えは、 Ŧ Щ 七 ウソウダケは屋根 0 なけ 3 深良財 ヤマヤキ(山焼)をするので、この山焼の前までに刈っておかなければならなかっ リごとに行われていて、 運 れ 屋 茅を準備するだけではできず、 屋根を葺 闸 ばならず、 産 Ŧ は = X. 決めら IJ の中 の中での寄り合いによって利用する家が決められていた。 き替えていた。 の骨組に使い、 ic れて 出ることのできない家は、 モ = おり、 リごとに共 上原では二月に行 毎 もっとも、 年一 竹を結ぶため 有地 月 一 一 このほ を管理 茅場は誰でもが自由に利用できたのではなく、 日 その してい 0 か K われることが多か 細 に ハツ た。 15 日 た深良 Ŧ 力 ジ ひごも必要で、 0) ヤ 3 ウソウダケ(孟宗竹)やハコネダケも必要であっ 日当を出さなけれ ムジ ウ の場合、 カイ ンを行う家になると、 0 (初常会) たとい これらは自分の家だけで独 力 ヤ たとえば、 う。 が ばならないことになっ ムジン あるので、 山 焼 (茅無尽) K 深良の中 は たとい 南 堀 そのときに によって茅場 限られた量 モ ではたい う。 3 でも IJ 7 この 自 0 「に用 南 家 T 力 た。 Щ 々 ヤ 堀 0 たと 意 焼 茅 0 か 4 な 3 月 ジ Ŧ

が出て、山焼をしていたという。

愛鷹山 東麓 の下和 田や今里では、 茅場ではなく、 力 ヤノ(茅野)という言い方をしているが、 ここでもカヤ 4 ジ

ンに

は若干 よって、 茅をカ なっていたようなので、 ヤ ノか ら刈 り集め、 それぞれのカヤムジン 屋根替えに利 用し てい の方法を見てみよう。 10 下和 田 と今里という隣合わ せ 0 ムラでも、 その p

T て、 チ たとい が ニョウ ほ ウバ ぼ 七二軒の家か う。 終 田 では、 (帳場) わ (束ねた状態)に積み、 下和 りに 田 な 大野原の共有地にカヤノを持っていた。 ほどに分け、 の共 ら人が出て、 てきたので、 有地は、 七、八軒ずつ一チョウバを利用できるようにした。そして、 さらにチョウバごとにくじを引いて細かく分け、 急傾斜のところではネセ 七二軒が権利を持っていたので、 そのあとに、 まず山 のミチックリをして、 ニョウにして乾燥させたという。 カヤノの利用方法は、 カヤノを利用する前に、 カヤノの 毎年一一月になると、 茅を刈った。 利用 一二月に入ると、 くじを引き、 を決めるという順 刈った茅は、 その年 力 + 小 H 序で 0 ノを一〇 を決 束 農作業

茅を利 利を持つすべての家 K が ほ ヤ 実費で買う形をとることもあったという。 見た深良や麦塚 行 かる ネブシンをやる家がやらない家から茅を借 のどの家 かし、必ずしも茅の欲しい家ばかりではないため、 わ 用する権利を持ったこととは明らか T たの からも祝儀として茅を一駄ずつ出すことになっており、 で が あっ が持 新年の常会で茅場の茅を刈る権利をある特定の家に決 た。このようなカヤムジンによるヤネブシン ったが、 その現物を融通し合うというやり方であっ に異なっており、 そして、 り 力 ヤ 下和田では屋根替えのことをヤネブシン(屋根普請)とい ムジンを行ってい 屋根替えをするために茅の必要な家は、 下和 田 の場合には、 このような茅を集めて、 は、 た。 同じようにカヤムジンと呼んでいても、 め たのであ このほ その年 力 ヤ か は に、 ノの茅を刈 決めら + ネブシンをやる家に 下和田 る権利 茅の必要のな れた家 ではヤネブシン だけ は 共有地 ったが、 0 権 先

れに対して、

愛鷹山に八二軒の家が権利を持つ共有地の中

にカ

ヤノを持っていた今里では、

力

ヤ

4

ジ

ンに

よっ

T

り方

る。

り れ 労働力を互いに提供する方法であったと言える。 の常会でヤネブシンをする家を一軒か二軒くらい決め、 う言葉に示されているように、 るものであっ ネブシンをしていたものの、 その から 日 ンイイ の夕食までイイガエ たとい ガ 工 シ 結 い返し)に出ることになってい 下和田のように茅を融通し合うというよりも、 下和田よりも深良や麦塚と同じようなカヤノの利用方法をしていた。 シ の家で食べることになっていたので、 なお、 カヤムジンのイイガエシなどは、 た。 実際のカヤノでの茅刈りとヤネブシンには、 したがって今里のカヤムジンは、 「オマン 茅を刈ったりヤネブシンを手伝ったり マ、 アリ ガタヤ」 労働力を提供することによ まさに などといって喜ば 今里では、 イイガエ 可 じクミ 毎年 ・ウチ

束が が、 それを屋 実際に、 このほかに竹や芝なども必要で、 一把になる)ずつにまとめて、 敷 カヤノへ出かけ茅を刈るのは冬の一二月から二月頃で、 の近くに下ろし、 ヤネブシンの準備が整うことになった。 稲藁と同じような積み方でカヤノでニョウに積んでいた。 竹は山から、 芝は大野原から刈ってきていた。 刈ると小束にして乾かし、 ヤネブシンでもっとも重要なものは茅であ そして、 さらにそれを三束(三

### 屋根と火事

きた茅の利用であった。 なムラではムギ このように、 しかし、 市域のたいてい 茅屋根には欠点もあった。 カラが混ざることもあったが、 のムラでかつてもっとも多かったのは茅屋根 それは火事が起こりやすく、 中 心になっ たのは共有地 しかも類焼しやすいという の茅場やカヤ ノから T

であ

り、

茅

から

不足しが

5

炭焼きの火がもとであったが、 とえば、 下 和 田 では現在 でも、 突風が激しかったということもあり、 一八九二(明治) 五 年 应 月 九 日 に起こっ 着の身着のままで焼けだされるほど早 たという大火がいまだに語 りつ が てい

か

たためであるとい

わ

れ

7

2

る。

のまわりで多くの家が類焼したという。下和 四)年に一二軒もの家が焼けるという火事があっ この大火のあと、 毎年四月九日が火防 田 の神である秋葉山の祭日になった。 では、 たが、これも、 この大火のためにその後、 茅屋根であるがために多くの家が類焼を逃れ得な 貧しい家が増えたという人も 深良の切久保でも、 一九三九 るほ

# 杉皮の利用

市域では茅屋根が一般的であったが、しかし茅屋根ばかりであったのではなく、 以前 は山 12 生えてい

で葺 く家を建築でき、 T れ いる。 セ るように 堀では、 いた家を建てることがよくあったという。 そこで、 (継ぎ)ではなく分家として出るためにとりあえず家が必要で、 なっ ができるら」などと言われて、杉皮で屋根を葺いた家を作ったという。 杉皮の屋根をした家は、古くからの家とか財産家には少なかったようで、 た る杉の皮を利用した屋根も見ることができた。ごく普通の家の屋根に現在のようなかわら 茅屋根の家を作ることができるだろうという計算であった。 茅屋根のほか 0 しは、 昭 和 0 に、 は じめ頃 Щ の杉を利用した杉皮の屋 からのようで、一九五〇年代半ばまではあまり普及してい というのは、 杉皮の屋根は七年くらいしか保たないと考えられており、 根について、 そのようなときに、 深良の南堀を例としな つまり、 分家を出すときなどに、 七年くらいも働 「七年くら なか がら見てみた 0 す たと れ けば新し が見ら わ れ セ

1

は ことはなく、 イイ(結い) それでは杉皮はどのようにして入手されたのかというと、 その皮を二尺×一尺にそろえて一八枚を一把とし、 が行われ、 たいていは製材所から買っていたという。 労働力を融通し合っていた。 このような杉皮の屋根は傾斜がゆるや 製材所が売ったのである。 この杉皮は、 杉皮そのものを手に入れ 植林された杉が伐採されたあと皮は ただし、 るため かで軽 杉皮の屋根を葺 15 は 力 ヤ 4 ジ 0 る

いために、

Щ

や愛鷹山

から集めてくることが多か

た

特に地震には強いといわれ、 のような杉皮の屋 根 の上に 茅屋根が傾斜が急で重かったのとは対照的であった。 トタン をかい ぶせる家もあっ たという。 そして、 大正の終わり頃 からは、

人々 L 会が多く、 〇年代を境にしていたようで、 なくなるので、 か 0 わら屋根 住 宅が 深良の原 できるように 現 力 最初は、 在 ヤ 0) ノの利用がなくなっていく過程でもあった。 モ 般的 3 なっ IJ 屋根替えをやる家にカヤムジンの代わりのお金を包むようなこともあったという。 では、 にな ちょうど企業誘致で、 た頃からであっ 0 か T 5 わら屋根にかわることによりカヤムジ る か わら屋根 たとい う。 トヨ 0 利 また、 タ、 用 は 関東自動車、 茅屋根 深良などでは、 見方をか から えれば、 矢崎電線などが工場を造り、そこで か ン から抜けることになると茅場を必要と わら屋根 か それ わら屋根が増えてきたのは に転 によっ 換したのは T 山 0 共 家の新 有 地 の茅場や 昭 和三 <

現在 0 房 Ŧ のため モシキ シ モシキは、 丰 0 15 茅場 ら集めてきたモ 取に あ ごくまれに風呂を沸かすのに利用されたり、 る 0 つい 利 5 は 用 風呂 ても、 が、 シキ(燃し木)も、 のために、 か 山 わら屋根の普及とともに消滅 に囲まれた市域 燃料とし プ T の場合山 口 パ 0 モ ンガスや電気の普及によってほとんど使用されなくなってい シ 丰 に大きく依拠しており、 0) L 行事の際に炊事で利用されるくらいであるが、 利 T 用 5 は 0 日常生活にとって必要不 たように、 か 主 0 て、 に農閑期 家々 0 可 の大切な燃料とし 仕事とし 欠の 8 0 で T モ あ シ 炊事や暖 て山 か

ならばたとえ私有 を採 実態を箱根 りに行くのは、 地 山に依拠していたムラから見てみると、 0 Щ 家の中でも年寄りとか女衆とか子供の仕事で、 で あ 2 ても採ってきてよいことに 深良では、 なってい て、 雑木林 それ 男衆が行くことは少なか をモ や植 シ 林してあるところは、 キとして利用 った。 してい 特に子供によ たとい 枯 n 枝 であ 七 る

行

われ

7

子供にとって特別な仕 っては、 もっ 小学校から帰宅するとトオヤマの方へ行 子供 が 事であったわけではなく、 田 .畑の仕事を手伝うのもあたりまえのように考えられてい 兄弟の多い家では年長の子供が弟や妹の子守をすることも当然のよ って枯れ枝を集めてくるの が 日 課 たので、 K なっ ているような者 Ŧ シ キを採りに行くことが \$ たとい

め 馬 るときに、 する人が減っていったのは、 人 0 の小荷駄にして持って帰って来ることもあった。 取り分)であるということで、 供 六把は小荷駄にして帰ってくるが、二把は自分で背負って持ち帰り、 が成長して若 プロ パ ン ガ い衆になると、 スや電気 昭和三〇年代から昭和四〇年頃のことであったという人が多く、 の利 売却して小遣いにしている人もいたという。 馬を使うことができるようになるので、 用できるモシキの不用な家に住むようになったためであったという。 若い衆が小荷駄でモシキを集めるとき、 この二把の分についてはワタクシ モ シキ採りも、 深良では、 このようなモシ 若い衆によっては八把集 山で集めたモシキを六把 ちょうど家を建 て替え りを 個

も小荷駄ではなく、 に売却し副業の現金収入のために、 め たモ 公文名でも、 シ + 主 イダシ に冬に箱 馬力を利用する場合が多かったという。たいてい、 (背負い出し)して、 根 山 K T モシキを集めている人も多かったという。 シキを採りに行 馬力に乗せてまとめて持 っていたが、 自家用 って帰 馬力が通ることのできるところまで行き、 分の 七 シ てきてい そのために、 キを採るだけではなく、 モシキ採りと搬出 島 0 方法 業者

冬から春にかけて山に入り、 て副収入にするようなことは少なく、 これ まで見てきたような箱根山に対して、 枯れ枝を自由に集めてきたという。 もっぱら自家用の燃料として使用していたようであった。 次に愛鷹山を利用したモシキ採りを見てみると、 しかし、 まったく自由であったわけではなく、 こちらの方では たとえば下和田では、 木に

W

出

してい

たとい

乾燥

させながら徐々に使用して行くのが普通であった。

それ きをやる人などは、 を使っ ているままの枯 ものをモヤといって区別する人も 7 キより細くて鉈で切ることのできるようなものをバ たとい う。 モ れ枝については蛇で刈り払ってもよか シ な なお、 キ集めに手間が モ シ 丰 に も太さ V か る。 からないよう雑木林の中 に よっ て種類 類が ったが、 イゾ(ビャァーゾー)、 あ り 鋸をひ 鋸 で炭焼きで使えないような細 でひかなけ いて枝を集めることは禁止で n 拾ってきた枯れ枝のようなもっ ば切れ ないような太 1 枝を集め あっ \$ É た。 0) 炭焼 て

細

あ 頃 シ 御 ることができな 宿 行くには 0 か 丰 葛 た。 3 を採りに行くのは、 の上湯山、 で で も、 馬 普通 力を使うときには、 寒いときに枯 愛鷹山 中湯山、 馬のコニダにしたが、 か 0 たが、 の植 下湯山 時期的 れ 林や入会などか 枯れたモシ 1= モ 馬力が には、 シ 0 キを拾 私有地 太いも 行くことの キについては私有地 サツマを収穫し麦蒔きも終 であっ らモ 1 に行 のが シ 丰 たために、 2 を採 てい できる道に馬力を置 7 キでこれ 130 2 てきていた。 その山 その際 のもの は四把が 心わり、 であっても採ってきてよかっ に不文律 からモシ 植林 き、 駄になり、 ひととおり が キを採ってくることが多か の場合は、 把くら あ り 細 木 いず 畑仕事が終わって冬にさし 葛山 5 々 う出 に Ŧ つい ヤについては六把 0 近辺 しては馬力でまとめ たという。 T V 0) る枝に 山 2 は多くの たとい モ 0 が シ 部 丰 T は採 て運 駄 採 分 で る モ から

尽 < のように、 れ T が競争になるようなことも 5 るような状態 モ シキは燃料として市域の人々にとって重要なものであっ 15 なっ 7 V あ ることも り 秋 0) あっ 畑 仕 たとい 事 が 終 う。 わ 2 そして、 てすぐにモ 集めたモ たが、 シキ 採 そうであるがゆえに山 シ b に 丰 は家々で軒下などに積み上げ、 か か 3 ない 近 に入っ Щ 7 は 拾 0 モ

ムラの場合は、

ほとんどが自家用

の炭を作るだけであっ

たという。

L

かし愛鷹山

を利用するム

ラでは、

自家

角

0

炭焼き

は

Щ 0

木林の雑木を利用して炭焼きを行い、

自家用の炭を作っ

てい

た。

箱根山

を利 裾

用 市

七

キと同

じように、 雑

カュ

つて燃料とし

て、

また暖房

0

ため に利

用されてい

た炭

たっつ 特に、

V

T

\$

野

域

II

か る

副業的な職業として炭焼きを行

2

T

いる家も多く、

特に十里木や須山では、

炭焼きで現金収入を得ている家

多か

たとい

う。

ただし、

市





写真 1-14 (葛山) 七 丰

8

に利用していた。

時期

的

15

でも落葉樹 深良では、 様相を見てみると、 炭焼きはあまり発達し 用 h 域の場合炭焼きの たようであ どが す 根 るた カシ Щ ほ この地域 0 か 8 雑木 などを炭焼 0 方からその具 0 K ク 地 流 ヌギ 林 域 では から 0 業者はほ を 雑 たとえば T な ĺЦ き は 木 き 0 体 か 門 を 0 た 8 中 的 0 た 利

滝 茶頭 畑

でも、

箱根

Ш

に炭焼きの業者が入ってきており、

戦後の炭の価格が

高

かった頃まではい

たという。

その

石を積み、

その上

に土

は まくできるも 0 T 農閑期が多く、 15 た 0 では のでは なく、 秋の終 な 何軒 15 0 わり頃から春までの間であった。 で か が うま 共 同で窯を持ち共同で炭を焼い い人で、 しかも比較的 仕事 しかし、 てい が暇な年 たという。 自家用 配 であるので家ごとにそれぞれが炭焼窯を持 の隠居しているような人に依頼することが ただし、 炭焼きそのも 0 は 誰 でも

かったとい

ように サ か くことが 1 ら炭焼きが流入し、 でも炭焼きその か 共同 モ でも、 3 できたといわれている。また、  $\exists$ は IJ 遠 で炭焼きを行うのではなく、 で一つの共同 Ŧ 1 1 深良と同じように共同で炭焼窯を持ち、 ョリごとに管理している共有地 才 8 t 0) 共有地 7 は に夫婦や家族で住 年配の人に依頼していたようで、それでも一 の炭焼窯を持ち、 の雑木林の伐採の権利を得て炭焼きをしている業者もいたという。 雑木の伐採から炭焼きまで作業自体は家ごとに行う場合が多 公文名はモョリごとに箱根山の共有地を管理していたが、 み 家々が順番でこれを利用していたという。 の雑木林を利用して炭焼きを行っていたが、 サトにほとんど下りることもなく炭を焼いていたとい 雑木を切って入れ、 度焼くと、 炭焼きを行うことが多か 五、六年は炭がもつくら そのために、 たとえば滝 そのような炭焼きは そこに か 深良や公文名の 2 たと 頭 ほ 0 か 0) 量 0 を焼 IJ 地

土 をたた 5 た本 格 的 なもの で、 П に三〇俵 もの炭を焼 くことができるほどであっ たと 5 わ れ T

の炭焼窯も伊豆から来て箱根山に入り炭焼きを行っている業者から教えられたもので、

を利 次 闬 に して、 愛鷹山 昭和四〇年代までは炭焼きが行われていたとい を利 用して 2 たムラの方を見てみると、 葛山では、 う。 \$ 0 几 とも葛山では、 カ村共有入会や愛鷹山 箱根山を利用 森林 組 して 合 0 組 いた村 合 地 々と違 0)



写真 1-15 炭焼窯 (須山)

のように、 たのである。

葛山の場合農閑期の副業とし

ての炭焼きであり、

T

5

たあとで、

それぞ

れ

の家で自家用分を差し引いた炭を売却

共同で炭を焼き、

焼窯を一つ持っていたので、

0

雑木を利用して炭焼きを行うわけであるが、

1

単

に自家用の炭を得るためだけに炭焼きをしていたのではなく、

0 副

T

の側面

も持っ

T

V

た。

クヌギ、

ナラ、

力

シ、

栗、

ケヤ

な

たいてい三、 できあがっ

几

共同 丰

た炭を分配 軒で

副収入とし

自家用 有地 副業とし な 須山では、 須山 り を戦 での炭焼きのやり方はどのようなもの 生活 から発展した程度の 後 ての段階を超え、 戦後の方が炭焼きが活発であっ 0 アメリ ために炭焼きをするように カ軍が接収したことにより、 共 か 同 なり のも 専業に近 0 で なっ あ たという人もおり、 1 2 であっ たとい 形 たが、 大野原 の炭焼きが + たかというと、 0 里 木や 畑 行 が使用できなく わ 須 大野原 れ Щ T の場合は 須山 の共

所を決 という。 一一三戸共有の共有地を持 いめた。 そして、 共同ではなく家ごとに持っ か できあがった炭は、 L 炭焼きをしない家も 0 てい るので、 てい 馬力で搬出したものであったという。 たので、 あるので、 雑木林を割り地 それぞれ そのような家 の形式で一一三等分し、 ヤ 7 の中に小屋を作り、 は炭焼きをする家 くじを引き家ごとに 泊り込んでは炭焼きをしていた に割り地 0 権利 を 利 売 用できる場 T

冬季

般的であり、

友野与右衛門など

るようになっ

た町

人請負新

0

つとしてとらえられ

る

0 田 が

七

世紀半ばから盛んに開削され

てよいだろう。

深良用水は、

有名な農業用

水の

つと言 全国的

しているほどなので、

等学校の日本史教科書にも登場

之丞などによる開発事業とし 箱根山に一二八〇以余りに及ぶ

江戸町人と深良村名主大庭源

#### 第三節 水 کے 生 活

### 農業生産のため 0

深良用水 根用 裾野 市 水 域の 0 名 前 水 で高 12 つい T の民俗を語るとき、 水 誰 8 から

思い 浮 カン べ るも

のに深良用水がある。

深良用水は、

箱





写真 1-16 新 川

- 須釜付近 (深良)
- 黄瀬川との合流地点 (深良・堤勝雄氏撮影)



文六)年七月末から八月はじめに着工し、 隧道を掘り抜くことにより、寛文年間に作られている。 き続き芦ノ湖の水を黄瀬川に流し込むため の新川普請が行われ、 六七○(寛文一○)年竣工した。 隧道は、 뀦 六六六(寬 六七 引

こで自然河川としての黄瀬川の水を増やし、 流路を見てみると一 つの特徴があることに気がつく。 やがて下流の水田を灌漑することになっているが、 このような深良用 水

(寛文一一)年から利用され現在に至っている。

黄瀬川に落とされた用水は、

2

人工河川として用水路を開削し、

それのみを利用して水稲耕作を行っているのではなく、

隧道や新川のような人工河

つまり、

ノ湖の水だけを利用した完全に人工的な用水ではないということである。

それは、

深良用水というのは、

芦

佐野堰と大堰 写真 1-17 中郷を灌漑する佐野堰 (石脇) 1 下郷を灌漑する大堰(水窪)

2

引

5

てい

る。

大場

III

か

3

0

取

水

は

麦塚

の近辺

で

萩

壱丁田

(以上三島市) などでも行

わ

れ

てお

り

あ

域で

は

深良用

水と対照させ

てジ

スイ

地

水

ある

い

はジミズと呼ぶことも

ある。

F.

自

る

111 ともとあ た黄 瀬 など 0 自然河 川 0 双方を連 動 歌させ、 水 を増 量することにより、 水田耕作を行うように して

1

る

0

から

深

良用

水

で

あ

0

た。

中 と表現されることが多い。 田 JII を灌 で は な 芦 新 お \$ ノ湖 漑し 中なか III 現 に と下郷は 0) 在 T 対 水 する古 裾 隧 野市 るよう 道 などと言 0 黄瀬 およ III 水 に で が 35 JII あ 地 芦湖 また、 芦 わ り 表 に大きく頼 れ K 湖 もともと 水 出 利組 芦 近世文書や近代文書では て新川 0 ノ湖 水を隧道と新 0 合では、 から T あ に 強 お つ ょ く意識 た自 り、 0 用 て 黄瀬川 佐 然河川を用 水 III され 野 0) 15 堰 ょ IE. T 式名称として深良用 0 が 12 て黄 中 「芦 落とされるまで る 郷 水として利用していると推定され 瀬 1 0) 湖水」、 III 村 0 々 水 0 水 一芦 15 を見てみても、 加 田 湖 え を、 水を採用 水 深 大場はませき と記さ 良 は黄 用 L T 水 これ、 古るかわり は 瀬 5 る 利 JII 現在 東岸 る。 が、 用 堰サ 3 か また、 の下 0 n 3 取 日 般 T 常 水 鄉 15 1 深良用 0 は る 0 L 呼 T 村 箱 0 U 根 々 2 で 方 る古 用 あ 水 0 で 水 る 水 0

をまっ な水 用 深良用水を利 しない 田 たく は Ш 水田 利 か 3 用 流 L T 前 2 れ 出 5 に 0) る中 す ように、 な でに自 5 小 水 河 田 深良用 |然河川 JII は 0 水を利 特に箱 を利 水 が人工 用 用 根 した水 L Ш 河 T 西 作 jή 麓 と自 3 P 田 愛鷹 が開 れ 然 T 発 Ш 河 5 され 東 JII る \$ 麓 0 0 0) T 連 が ホ 1 動 多 ラ たことを推測させる。 による水 1 洞 ح に 利 な 0 ような水 2 で あっ たところに見ら たことは、 田 を 現在でも、 灌 漑 深良用 れ L T る 深良用 が る水を、 水 ح 0 0) 水 開 よう 削以 0 市 水

L た 良用 あ ٤ 水以 0 用 水 外 \$ 0 I 然河 部 分流 III れ を 利 込 用 W で T 1 る 5 が 水 ほ 田 2 0 例 は伊豆佐野、 h E を見てみると、 の 水 田 は 麦 塚 たとえば麦塚 で 才 才 力 ワ (大川) 0 水 田 と呼 は ば れ 流 T 0 茶 1 畑 る 大場 0) 水 ЛĬ 田 T 水 利

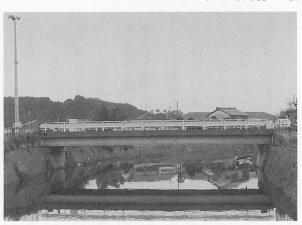


写真 1-18 大場川からの取水 (麦塚・長戸呂橋)

入れるようなこともあっ

たという。

不足するときには、

力 Щ た

ケバ

ン

(掛け番)

で時

間と順番を決

めて水を水

田 水 置

T 0 VE \$

5

る L

水

田

は

愛鷹

か

3

流 わ

れ

てくる自然河

jή で

を利 \$

用

T

る

が、

が L

激

8

あ

0 0

とい

れ

てい

る。

葛山

仙

年

寺

0

前に位

2 あ

れ

3

0 \$

4 0

ラと

水げ

'n

かが多く、

戦前

に 田

は巡

查

が

出

動してくる

ほ

水 の水 を 利 用 L てい ることに な る。

など

0

4

ラに

水

田

を所有している人もあり、

そのような人の場合は深良

くる自然河

jij 水

0

水を利用 ておらず、

してい

る。

ただし、

大畑 であ

では近隣

0

+

福

や石脇 流 田

瀬 L 号

III か

か

3

取

L

深良用水とは無縁

り

愛鷹

か 0 2

3 水

れ は

7 黄 から

通っ

てい 大畑

る

が、

ح 在

れ

3

道路が

通

る前

はここは水田

で 路

あ

たとい

j,

大畑は黄瀬川

西岸

0 0

高

いところにあるために、

こと

ま

た

では現

集落と愛鷹

山

0

間

K

東名高

速

道

と国

道

四

六

用

ツミ ほとんどであっ てい 深良用 る 4 水 たが、 ラも 以 外 あ 0 約五 水源と言えば、 た。 町 一歩ほどはツツミの水を利 たとえば金沢 わ ず いでは、 か で あ F. る ケ が 用 自 田 して水田 然 15 あ に る新 湧 き出 堀 を灌漑していた。 る水 か 3 取水した深良用水の水 をため ツツミ 現在では、 (堤 K L 休耕 を利 て、 用 そ 田 P れ L を利 畑 T 1 る水 崩 0 転

田

が

ツ

で見るような深良用水

の村

々で行

わ

れ

てい

たも

のと同 ぐ下

じような

水

たという。

麦塚の場合は、

萩や壱丁

から

す

流

に位

置

す

る げ

1= h



写真 1-19 ツツミ (金沢)

ていたとい えたために灌漑面積は減っているということであるが、 な の金沢のツツミは、 り う。 水 L 田 カュ 0 L 取 干 水を順番にしたようなことも ば 0 の ためにツツミの水量が減ることもあり、 あ たとい ツツミの湧き水をため、 わ n T 1 そのようなときには耕 る。 数軒の家 が水田 作 面 . の 積 ため 0 多 12 利用

換が

L

世話人に

な お、

金沢の人々にとって農業用水としてのみ利用され 供 子供にとって水泳の場でも いの水泳、 や雨乞 V につい てはあとで詳しく記す あり、 雨乞いの場でもあっ ていたのではなく、 が、 金沢 た。 0 川を利 以前 " 'n 3 は 崩 0 場 した子 金沢の

たといえる。 か 0 4 ラ が黄 瀬 川 や大場川 で行っていたような習慣 が、 " 'n 3 15

ほ

5

瀬 子 か 4 W 0 そのために、 穂 供 \$ 現在、 15 ギ ど毎年のように行われ 投 カラを持ってツツミの土手に集まり、 が が上手に泳ぐことができたという。 水量が豊富だっ 出 げ なく 入 金沢ではツツミで泳ぐ子供 れ 金沢 なるようになると、 て、 は市域 7 たことも 1 X ていた時 の中でも山 フ 1 あり、 ラセ 期も X 子供 タ 長 がちの土地であるもの は 1 あ から 5 7 雨乞い フレ な 2 から 泳ぐに 1 蛇体を作り、 たというが、 5 ナ が、 触 1 は、 れして は絶好 以 雨 夏に干ばつに 前 降ら は 雨乞いをした。 それをツツミの 区長がフレると、 の場 水 せ の、 \$ 給 所で き ほとんどの れ な なり で、 ほ 浅

歌

T

5

たという。

ح

のように金沢の

ツツミは、

単に用水としてだけでは

取

り除

いたという。

道

を引い

なくム 河 jij ラ 0 0 人々 掃 除 全体 が 行 われ に利 るが、 用 3 n そ るも のときに 0 で あ " 2 ツミ たが ため 0 掃 除 に、 も分担し そ 0 管 て行ってお 理 \$ 区 で行 り てきて 水 草 が 5 生えすぎたときなども る。 毎 年. 凣 月 F. 旬 に X. 金 沢 0

第1章 れ 0 たという。 " 金沢 יי 0 は ほ 関 か そして、 東大震災の に 公文名 水 あと水 でも 田 0 ため 湧き水 から の用 枯 れ によるツツミ 水としてツツミの水を利用しなくなったあと、 るように な 0 0 たた 水 が 8 利 に 用 水 され、 が 不足 水 L 田 が 作 水 田 3 れ から てい ほ ٤ この んど作ら たところ " ツミを が れ な あ 水源 0 な にし 畑 L T か 簡 転

水

合流 右 3 から ら農業用水として取水されている。 側 流 この大場川 0 良 自然河川 角水 深良用 で再 の今堰を持 して、 野 たとか、 0 U 市 連動 下郷 しそれ 水 0 と大場川 の上土 が 島 つ水路 本 利用 合流 市 この 0 との境に は 流 3 か し ように、 狩(長泉町)方面 れてい よりも早 あとから作られ 3 れ に 本 の水を合流 0 なる県道 0 たが、 いては、 河 市 5 域 JII 時 では、 そしてこの堰 に させ、 に流 なる 裾 微妙に交差、 た流 上. 野三 にすでに作られていたとも 流 れ が、 深良用 れ 水 水 0 島線の富士見 で 方から見て向 量 田 そ は、 水が あるとい を を 0 増 灌 際 混合している。 漉し に 通水され やすことにより下郷 一方では黄瀬川の大堰とその下流の三俣堰で分水され てい 分 橋 わ れ か カン 0 T 0 る Ŧi. ている一方で、 れ て左側 いない のである。 た川 5 る。 たとえば、 ほど下 0 また、 の水路 流 の村 ている。 れ したがって、この用 が 流 伊豆島 この 一々を潤 合 で流 自然河 がもともとの自然河 流 人工河川 する少し上 れ してい が二本に 田 Ш を流れ P ツツツ ると考 は 流 分 てい 3 淡路 水 の場所 0 か JII えてよい 0 れ る大場川 水 水系は、 島 0 が 本流 か に 七〇〇以 水 3 あ H た用 る今 来た人々 であり 0 大堰か 灌 水と 堰 ほ 5 漑 か に

深

良用

水

期

いわ

れ

仮

に、

2

0

伝

承

が

歴

史的

事実であ



方法がとられていたという。

このような自然河川と深良用水の関係は、

黄瀬川から取水して、

富沢や南一

色(長泉町)の水田を灌漑している穴堰

ウラブセ(甲羅伏)が作られており、そたものであったと考えてよいだろう。

そこで水をせきとめることによって人工河川

の方へ水を流し、本流の自然河川の

今堰から取水する

るとすると、深良用水はすでに存在していた自然河川を利用する小規模な用水を組み込む形で、

なお、

現在では痕跡をとどめてい

ないが、

0)

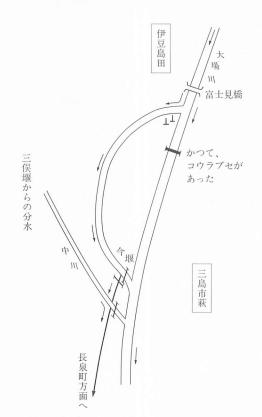
方には、

以前は

コ

用水体系を再編成し

写真1-20 大場川の合流地点 (伊豆島田)



図表1-4 今堰とコウラブセ



写真 1-21 穴 堰 (桃園)

ゼナザワ

大畑

富沢・

穴堰

千福

黄

瀬

111

竜の滝

佐野

法をとっていたという。 以前 は 現在、 カミ である。 0) 屋敷 穴堰が富沢に入るときには、 の前に設けられたノボ 取水する堰で、 在 さらに富沢だけではなく南一 15 つい セギ(上り堰)でツツミに水を入れ、 では地表に出るとそのまま富沢地 ても同じようなことが リセギで水をせきとめ、 用水は桃園地内をおお カミというエ 色の いえる。 1 水田をも灌漑し ナ(家名)を持つ渡辺家 内 穴堰 ツツミから下流の水田 に入っ むね地下水路で通過して富沢に至り、 用水路より高 は てい 黄瀬川 る T が 1 西岸 い位置 る。 の屋 以前 この用 0 を灌 大畑 VE 敷 は あ 0 るツ 中 まず 水は、 漑する方 0 を 南 ツミ 通 ノボ か 現 3

野川は自然河川であり、

須山から下和田、

今里、

葛山、

千福を通って、

千福と大畑のほぼ境のところで黄瀬川

のような穴堰は、

富沢

の人々にとって、

セ

ナザワ

(瀬名沢)とも 御宿、

1

われ

てい

る佐野川と大きくか

かわ

7

5

る。

佐

過ぎて行くが、

15 度、

用水を上

げ てい

た

0

図表 1-5 瀬名沢と穴堰

利 水 量 5 は を から うことで、 沢 佐 流 推 Ŧī. の人々に 川 竜 量 て と五. 0 る る。 滝 I 穴堰 よっ 安と より下 竜 ح 0 K 淹 0 て水利 な 黄 流地 石 b 0 を 関 瀬 積 権 点 Ŧ. 連 JII み黄 で黄 では合流地点の一○○がほど上流部分に五竜 竜 0 0 主 中で考えられてきた。 0 瀬 瀬 淹 張とな JII JII 0 に 水 カン 合流 3 が り 流 取 してい 水 n Ŧi. 落ち L 竜 T 0 る佐 5 淹 T たと 1 つまり 0 野川 な 水 5 5 から とき 富沢 j, 流 0 水 れ であ の人 に な は V 深良用 々に ると判断され 渴 水期 ٤ の滝があるため 水 0 に 0 て は 水 てきた。 Ŧi. が 瀬名沢 黄 竜 瀬 0 に JII 淹 ۲ 0 12 0 特に、 水 のような認識 き 流 7 は n おら 才 具 穴堰 ラ 合 (俺) ず から 黄 0 取 黄 瀬 水 水 瀬 現実 だし III 0 0 水 権 0

を確 水よりも は 0 で 保 あると 深良用 のように富 する 沢で 前 ため 水が は 2 に 開 なしてよ 削 穴堰 沢 自然河川で 3 0 れ は 独 X たも 深良 自 々 だろ は 0 のである 用 用 ある佐野 深 水 水 認 良用 0 開 識 なら 川 が 削 水 形 との よりも 0 ば 成 渇 3 連 水 富 動 期 れ 前 沢 たも にす 15 に佐 0 お 人々 のとも考 で 1 野 15 て機能して III 作ら 0 0 主 水 えら 張 れ 利 権 するように、 T を主 れ V V たと る。 るがゆえに 張 し取 な 1 う人も お 佐 水してい 起こっ 野 仮 に言 JII あ に対する水 り た用 たのであり、 5 伝 渴 え 水期 水をめぐる認 0) 利 2 15 権 お お 明 0 り 4+ 3 る穴 主 識 カン 堰 は 堰 で K 妥当 から あ 0) 深 水 良用 利 権

水 3 で 取 げ C P は 水 7 3 きて、 重 れ 要な堰や 7 5 L 富 る か 下 沢 が、 甪 郷 0 穴堰 水の 人々 0 現 実的 人々によっ 分岐点などでは、 3 C 水 取 15 水さ げ は 黄 h n ても主 瀬 か れ JII に ば なること 0 張され 大 渇 堰 頻繁に起こっ 水 カン 期 3 たことがらであっ が 15 多 0) お 取 け カン 水 3 ていたことが 取 量 to ٤ 水 が 3 減少してしまう 0 権 j. た。 利 水 0 下郷 主 3 げ で 張 W の村 あ カン は ため VI 穴堰 々 た は K 1 な T 穴堰 利 下 は 郷 崩 あ t とで再び記 0) L り下流 てい 人々 から る富沢だけ 穴 0 す 堰 水 が、 窪 0 深良用 堰 は 主 か な

が

巡視することも

あっ

たとい

われ

てい

る。

集し、 わ \$ れて よ 特 か 15 おり、 男衆は穴堰 この穴堰 その 穴堰をめぐって石を投げ合うほどのもので、 の場合、 のところへ、 ために、 下郷 穴堰に の人々にとって、 女衆は炊き出 おける富沢の人々と下郷の人々との間の水げんかは非常 しに集まっ 渇 水期 にここで取 たという。 もっとも激しくなると、 水され また、 てしまうことは、 このような激しい水げんか 富沢では半鐘をたたい 死活問 に激しい .題 \$ で あ を避けるために 0 で て村人を召 あ たと言 7

に より さら 用 T 相対 水を自分の水 いたとい 的 水げんかはこのようなムラとムラとの対抗だけではなく、 に水が豊富になり、以前のような水げんかが起こるということはほとんどなくなったとい う。 また、 田 に引くような人もいたといわ 夜になると水を盗むこともよくあり、 れ ている。 ただし現在 夜中に水 穴堰から取水したあと、 では、 田 0 クロ 宅 地化 (隅) や畦も 0 進 展 などに横 富沢の に よる水 に ムラの なっ 田 0 减 7 中 ーでも 起

どは、 た。 カン 引 3 郷 上 郷 それが、 水 の隧道 ・下郷 早くも一六八八(貞享五)年には引き揚げ、 が 行 わ 0 上から 開通 れるようになったものであった。 自 (組合長は裾野市長)によって管理、 然河川と人工河川を巧みに利用して作られているこのような深良用水は、 が一六七○(寛文一○)年であり、 中 郷 下郷と呼 ば れ る用水組 しかし、 織 その 運営されている。 新川 であった。 あとに、 用 の完成がその翌年で、 水の 開 深良用水を管理、 削を行っ すでに記したように、 た元締と呼ばれる江戸商人友野与右 それによっ 運営するため て通水 深良用 現 の組 在 では、 水の開 から 可 織 から 能となり 芦 成立し 削 湖 水 てい 水田 芦 利 組 ノ湖 0

〇年代 から 上郷 用 中郷、 水組合」(または 下郷という枠組みは井組三郷と呼ばれ、 「組合」という名称で呼ばれるようになり、 その後、 近世を通して一貫して連続してい 一九〇七(明治四〇)年の水利組合法に基 たが、 明治二

原 荷 沢 で深良用水に関係していないムラは、 途中で脱退したムラに本宿 水利組合として用水権を保障され الخ (長泉町)・ 茶畑 葛 0 隧道 Ш 4 九一五(大正四)年に法的基盤を獲得し、 ラ 深良水門 平松、 御 が 伏見 宿 0) (清水町) 下郷は伊 千福 用 水組織 桃園 立豆島田 新信 のどの位置 (長泉町、 间 旧 定輪寺)・富沢・ てい (清水町)である。 水窪・納米里(長泉町)・上土狩(長泉町)・中土狩(長泉町)・下土狩(長泉町)・竹 十里木・須山 に属し るので 七〇七年脱退)と麦塚(一八七〇年脱退)がある。 T あるが、 1 るの 現在に至っている。 南 このほ ・下和田・今里・大畑だけであり、 一色(長泉町)、 上郷、 かを見ると、 下郷 か 中郷、 に みると、 n も愛鷹山東麓 ところで、このような上 用水開削の当 上郷は神山 下郷という組織は、 中郷は石脇・佐野・二ツ屋・久根・公文名 この三つ しかし、 0) 深良用水全体としては、 の組 水 初 (御殿場市)・岩波 は用 田 織 が 13 0 水 和組織 分 郷 慣例的には存続して これらは大畑を除け したが とんどない か 中 れ に参加 方に って、 鄉 深良 特徴 下郷 して Ш 裾 が 野市 現在では芦湖 5 V から 0 たも Ŀ. あ ムラを見て 0 一ケ田 ば 域 ることが 地 域 る。 0) であ 4 ず ラ 稲 金

大堰 大堰 下郷

図表 1-6 上郷・中郷・下郷

1+ を わ K 除けば 郷 見 3 カン た穴堰 る。 に属していることになる。 れ た堰 V ずれも 郷は、 か か ら取 3 取 水ルして 黄瀬 新川 水 L JII に沿 T V いることである。 西 ,る黄 岸 2 た黄 のムラであり、 これに対して、 瀬川 瀬川 西岸の富沢 東岸 たとえば 0 黄 神 中郷 瀬川 は 山 は 15 先 設

て、

絶対:

的

な権限を持

0

T

た

ずれ 8 黄 す 3 瀬 JII ラで 東 岸 あ 0 り 4 ラ 黄瀬川 で あ り の大堰から取水した水に、 黄 瀬 JII 0 佐. 野 堰 カン 3 取 水した水を分水し さらに、 先に見たような大場川 て利 用 L T 5 る。 0 下郷 今堰から取 は \$ 水した水を加 とも下流 分

は 郷、 用 用 水 中 組 ている。 鄉 織 0 管理、 下郷 したが のそれ 運営 って、 ぞれから二名ずつ合計六名が水配人として選出され、 0 2 深良用水の組織は、 ならず、 特に、 この地域 利用する堰によって三つに分かれ の人々にとって死活問題 管理、 であ ていると言える。 0 た渇水期 運営が行 K わ お れ 1+ てきた。 る 堰 0 利 水

用配

とをせきとめ、 0 堰のことで、 口 調 0 ウラブセ 深良とコ 節 コ ウラブ をしてい 先に見た伊豆島 七 T 深良用 深良水門から落とす水を確保するの (甲羅 5 るため る。 水 伏 に 深良水門 の開削 の管理も深良に任されてい コ ウラブセ 田 に際しては名主 や湖尻 の大場川のコウラブセと は存在 水門を調節 の大庭源之丞が L T 1 する水番も深良 で、 た。 な 2 コ 同 コウラブセというの が じ形状 ウラブセ かかか コ ウ ラブ 0 0 わっていた深良は、 は \$ 人が か セ のである。 担 によ つては深良用 当することが多く、 は、 2 て 芦 現在では、 逆 ノ湖 水にとって非常に大切 III 深良用水 から芦 の湖尻水門に設 すべて水門 ノ湖 L KE か 重 0 \$ 要な役割を 水 によっ けら 芦 から ノ湖 流 な堰 れ て水量 果たし するこ T いた 逆かさがわ

あ をせきとめ 具 的 か K たも 2 もこの 0 0 コ で、 コウラブセ ウラブ 石を敷き詰めた形 セ とは は どのようなも 土俵を積んであるために、 状 が 亀 のである の甲 羅を伏せ か とい その上を人や馬が通行することができたという。 うと、 たようであっ 逆川 П たため K 石 を敷き詰 に、 コ ウラ め そ ブ 七 0 F. に土 わ 俵 そして、 W で水

2

0

コ

ウ

ラ

ブ

セ

の改修は深良によって行われることになっていたために、

深良では、

「逆川の土

俵伏せ」といって、

6

ò 堀

は

郷

0

間

でも

行

わ

れ

ていると言

0

間

0)

水 0 改修 に出 かけたものであっ たという。

### 堰と堰普 請

深 わ 良用 れ T 5 水 る。 0 取 す 水 は でに記したような、 新 JII や黄瀬川 に設けられ 上. 郷 の穴堰、 た堰 中 現 郷 在では、 0 佐野 堰 機械 下 化され 郷 0 大堰はそ た水門 になっ 0 代表的 てい な る \$ 0 か ら行 で あ

る が、 堰の利 崩 のしかたについて、 大堰を例としながら紹介しておきたい。

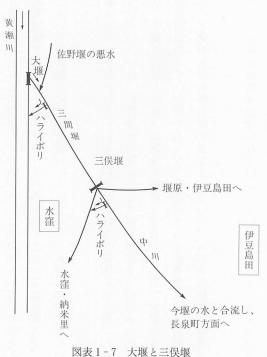
あ カコ る黄瀬 大堰 つ つてはコンクリー た。 は れ は 0 水窪で取水し下郷全体を灌漑してい 河 言うまでもなく、 床を見ると、 1 ではなく蛇籠であったという。 ちょうど大堰 大堰 の水量を確保するために堰 0 取 水口 る堰であるが、 0 黄瀬川に蛇籠を積むことによって、 ところ に 非常 細 へ向 長 に理 <  $\exists$ か 解し ン 0 ての水を流すため ク IJ やす 1 1 1 形状を持 0 壁 が 大堰へ水を入れてい 作 3 の装置であるが、 2 T れ 5 T る。 1 ることに 現 在 た ح 気 大堰 れ 0 から は 0 0

俣堰 \$ 利用 あ る。 そして、 の間 3 れ、 度水 佐 の言え 野 大堰 田 下 堰 で利 間が 郷 は 中 堀り か 0 水田 用した水を再び用水に戻し、 郷 に二つの水路が設けられ ら取水すると、 0 を 堰 灌漑するように水路 で ある 0 直線 てよいだろう。 で の水路となって下郷の村々への灌漑経路を分ける三俣堰に至るが、 い わ ば ている。 が 下流 開 中 削さ 郷 一つは、 で利用 の水田 れ T が再 1 したあとの悪水 佐. たのであ 利用することが多い 野堰から取水し 2 た。 P 利 深良用水の 用 た水の一 せず余 が、 それ 部分を三 水路を見ると、 0 た水 が佐野堰 が 間 大堰 堀 の中 入 末端 0 大堰 郷と大堰 水 れる水 0 部分で から三 て再

量が多すぎたときに、 間 堀 VE 1 ラ 1 ボ 調節するために、 払 い堀 E 5 わ 超過量を再び黄瀬川に戻すための水路である。 れ る水 路 が 設 け B れ T ることである。 ライ ハ ボ ライ IJ IJ うのは は



黄瀬川底コンクリート (水窪・大堰水門)



0 なくてはならない 名のとおりここで三本の水路に分かれ、 間 堀だけに設 この ライ 8 けら ので ボ れ あっ IJ T で 5 調節され る たと考えられる。 のでは た なく、 あと 下郷の村々に利用されることになっている。 0 ほ 水 か がそのすぐ下流の三俣堰に至ることになるが、 の堰にも設けら れ ていることが多い が、 水量の調節の 三俣堰 ため は、 E まさに れ 2 は

その際に、

現在では開閉

K

便



が 伊 3 利

豆. れ

島 T 田 15

٤ 堰度はほ

0) 水

灌 流 な

漑 カン 2

T

1 る。

F. 流

かる

ら見たときに

ちばん右 そして、

側

ま 0 水門 b

西

側 から 水

0

路

\$

水

設置され、

れは水窪と納米里の水田

を灌 ま た 漑

する用水になっている。

中

央の水路

は

通 水

称

中 15 れ

Jij

わ 0 水 15

2

る

が、

ここに

は三 とい

つ

0 れ

水 T な機械

化され

12

T

いる

0

で、

見してすぐわかることであるが、

三本の水路

0

量

0

配

分は

明

確

8

一俣堰 た水門

を上 田 を

ら見たときに、

5

ちば

ん左側、

まり東側 1

0 水路

は二つ

設置

3

0

流 決

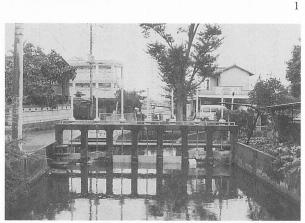


写真 1-23 水路と水門 三間堀(水窪・伊豆島田境) 1 三俣堰 (水窪・伊豆島田境)

ある。 原 狩 下 う割合になっている 水 す が 流 伏見 のような水路 0 るようになっ 中 0 比 土 1 率が この三本の水 狩 郷 新 0 宿 村 対三 0) T 士: 水 0 れ 分水 一対二と 狩 15 田 は 0 路 上. る。 を ょ は で は 灌 竹 土: b

堰 125 本

用

水

0

管轄

0

L

た

\$

現れている。

特

K

請

0

ときにはそ

れぞれ

0

利用し

ている水路

の掃

除

や改修を行

0

ており、

現在、

大堰土地

改良区を

組

織

してい

る下郷

米里、 行 度 に 0 ても紹介しておこう。 T H われるので、 日取りを決め といって三日 利 5 ちろん、 そして、 は穴堰、 黄瀬川 用 郷 る。 して だ け な 堰普請 実際 お 0 0 日 2 河 用 る水路とその T 間 は富沢 のようにい 区 の作 床 水 3 用 の管 長 0 " は大堰だけでは 水 主に、 コン 業 0 力 フレ の掃除と改修を行うことになってい 七 0 0 理 ため とし 水 ギ クリー われ に出 穴堰からの用 周 路 触 に 囲 て れ)によって実施している。 1 [をムラごとに点検してい ること ているのであろうが、 各家 日 なくほ 毎 のところは下土狩というように、 はジ 年、 のできない家は、 現 ス 田 か 水を利用している上郷の富沢では、 在では非農家が増加したので、 の堰 植 イの用水と分け、 えの前 においても に すべての家が三日 ナ るのである。 デブソク 工 る。 富沢 行われ 七 分担を決めて一 ギ 日 0 (苗堰) ミッ 取りは決まっているわけでは (出不足)を出さなけれ ているので、 大堰の重要な部分についても担当は決 を行 その際に、 力 間 七 農家の ギ の全日程 2 日だけどこ てい は 毎年四月になると、 大堰 み)から男衆 る。 2 大堰から三俣堰まで を出 0 0 名 ナエ そして、 かの なけ ばならな のとおり三 七 堰普請 れ ギ が 以外 ح な ば 一人ずつ なら 0 111 ことに が、 の堰普 に 日 ナ ない 。 三 エ 出ることに 間 カセギ 出 毎: に セ 年 ま のでなく、 わ 間 ギ T そ 12 K 堀 0 7 る 7 は納 日 1 T

(人工)に 堰 ま た 0 つい 佐野 請 を 行 堰 ては佐野の大区 カン らの T 5 る。 水を利用してい 2 長 0 佐 が調節し 野 堰 る中 の普 T 鄉 5 請 の村 るという。 0 き 々でも、 15 は、 佐 毎 年、 野 が中心になることに 苗代に 種子を蒔 き田 なっ 植 ているようで、 え 0 は じまるま 普請 で 0) 間 0 = に ン

佐

ク

る。

末端 と悪水 ヒソンバ 0 水 田 深良用 深良用 で は 水 水 水 が不足しがちの水田 によるすべ 0 利用は、 裾野. ての水 市域から長泉町、 田 もあっ に過不足なく用 た。 そのような水田 清水町までをも含む広い面積の水田 水が 行き渡 0 0 T ことを、 V たわ ح けでは 0) 地 なく、 域では水 を灌漑してきた。 特 に中 田 15 水が不足して干 郷 や下郷 L 0 かし、 用

たとえば、 てしまうという意味で、 茶畑 は中 -郷に属し てい ヒソンバ るが、 (日損場)といってい 中 郷 の末端 に位置してい るために Ł ソ ンバ に なることの 多 5 水 田 が あ 0

る。

上

が

通

0

地

域

0

水

田

は

反七

俵

から八俵

くら

V

0

収

穫

から

あ

2

た

が、

Ł

ソ

ン

バ

に

な

0

てしまうと収

穫

から

極

端

減

た

滝頭 のあたりでは、 ひどい場合には三反で三俵しか収穫できないような水田 \$ あ 0 たとい わ れ れてい

とも 末端 余 使 用 で悪 あっ 水 た、 た水は大堰 したあと悪水 田 そっちの(そちらの)川へ落とすな、 水 たという。 Ł 0 ソンバ 利 水 を用 の三 用をすることは頻繁であっ とし に 一間堀へ なら 水に落とそうとすると、 7 水田 ない 落とされ再利用されているが、 の外 までも、 へ出した水を、 深良用水の た。 こっち(こちらの)川 そのような悪水でさえももめごとの原因 そのために、 下 水田は水が不足しがちな場所が多かっ 流 0 水 これほど大規模なものではなくとも、 田 中 が再利用することも 郷 へ落とせ」 の茶畑 などでは用水の末端 などと言 あ 0 とな 15 た。 なが たために、 5 す 3 に位置するため でに見たよう お 争 特に渇 ま 1 度水 に 5 なるようなこ 水期 田を灌 水 に 1 用 中 が おお 貴 郷 水 漑 ま 重 0 0

### 水げんか

Ł

7

ン

バ

が

できるような渇

水期

のときに

は、

水を求

いめて争

5

が

起

こり、

激

L

2

け

W

かる

に

まで発

す

っるこ

対

的 に弱 ま 0 ていることもあり、 2 が あ た 現 在では、 激しい水げん 宅 地 化 0 かが行わ 進 展 による れることはほとんどなくなってい 水 田 0 减 少、 休耕 田 0 增 加 などにより、 るようであるが、 水 田 0) 全体的に 依 存 から 相

る。

水が一 ぼ決 富 沢と下 不足し いまっ た 5 郷 T が T ちの の村々のように上郷と下郷の村々 5 たとい 深 中 心的 良用 う。 な堰 水の場合、 もっとも、 や下郷 水げ の三俣堰 激しい水げんかをくりかえしていたのは、 h か は のような主要な分水箇所で行 が対立する関係であったようで、 つきも ので あった。 L か L われ 水 げ ることが多く、 さまざまな逸話が すでに見たように穴堰 h か はどこでも行 対立する人間 語 わ れ り伝えられ をめぐる上 T た 0 てい では ラ

発展、 は 明 水 家 足した年 げ 治 たとえば、 に上 水 W して金沢 一〇年代の話として発砲事件にまでなった水 げ か が で h がり込む あ か あ 上郷 るの で鎌 0 5 人 激し が下郷 で切 最 の上ケ田 初 いけ 殴 3 下流 b れ の人に鉄砲で撃たれてしまったことが h は、 合 る人 の下郷 5 か が 上 K が起こり、 出 ケ田 な 0 るほどのこともあっ の人々と上ケ田 1= の人々が b ĴΪ 女性や子供が土蔵に隠れるような騒ぎになったという。 へ突き落とし スイモ げん 「や金沢 かが ンバ たと あっ たりするようなことは の人々とが (水門場)と呼んでい 5 わ あった。 たという。 れ てい 石の投げ合いをする水 る。 ح その頃、 のときには、 激しくなるとこのような状態 るカ ゴ ジ D 田植えをしたも ウト堰から水を引 3 ウ 御宿でも下郷 朩 ウ げ h (御定法) か また、 0 が の人々 の水 起 であっ が非 K ほ り、 T まで が土 か たとい 0 そ 常 る なる 年. 足 n に に で

0 KC 水 流 順 を盗 の久 番をまわ られ 中 根などと対立することが -郷でも上郷 していたという。 ないように公文名からも水 の村 々と水 8 げん 0 多 とも、 か 2 か 0 たと 15 番を出 水 なることも の番 V う。 に出ても、 重 水の監 一要な堰 あっ たようで、 常時見張りをしていなければならない 督をする では水配 中 0 人が監 が普通 鄉 の公文名では、 督 して で、 = 5 たが、 日 K F. 渇 郷 П くら 水 0 深 期 わ 良 5 に けでは は の割合 同 じ中 ほ ないので、 か 鄉 0 でも 4 ラ 督

う人もいるほどである。

その三尺分だけ取水してよいことになっ

てい

た。

ところが、

Ш

岸

から六尺までのところに石を置き、

そ

れ

で水を

そのために、

夜、

不眠不休で水の番

堰いだり、

あるい

は下流

へ流したり、

調節することができるようになっていた。

いたという。 ような水げ わ れ てい そのようなときには、 h る。 か は たとえば、 ムラとムラとの対立関係であったが、 公文名では関東大震災のあと、 不公平な分水を避けるためにカケバン 用 用 水の末端 水 小の水量 の、 が減少し、 同じムラの中での水げ (掛け番)を実行し、 全体的な水不足が五、 軒 W か 軒 \$ が 六年 順 番に で 蕳

縄をなうなど手仕事をしながらであった。

かる 水を引くようにしていたが、 なければ のようなときに、 可 中 ばならないときに、 郷 の茶畑 でも、 互. V の葛藤が高まってけんかになり、 4 ラの 別の家の人が夜間に堰を操作して水をまわさなくしてしまうようなことも けんかも多く、 中 で 水げ h 取っ組み合い かが起こることが 水路に突き落としたり、 のけんかになるようなこともあったとい であっ た。 たとえば、 激しいものになることもあっ 田 植 え 0 前 に水 われ 田 KC あっ 水を張 T たという。 T

5

わ

れ

7

う独特の慣例 て対立するようなこともあったとい ところもあった。 しようとして水げ まで見た水げんかは、 ちょうどほぼ同 があり、 たとえば、 対立を緩和するようなしくみもないわけではなかった。 h かが じ位置 多か 麦塚と伊豆佐野(三島市)は大場川を挟んだ対岸のムラであるが、 深良用水の灌漑地域におけるものであるが、 に伊豆 2 う。 たという。 しか 佐 野 L 0 また、 堰 があ 麦塚と伊豆佐野 大場川下流 る。 伊豆佐昭 野の 0 の徳倉 取水につい 取水 \$ ジ の権 上. スイの場所でも水げんかが 利は、 麦塚が取水するのは大場川の大堰 ては、 流 の麦塚や伊豆佐 JII セ 岸 1 から三尺のところに杭 コ ン それぞ カギ 野 IJ 0 堰 れ (精根限り)とい 行われ が のところ 大場川 てい へ来 を打 カン か 3 た

7

5

たとい

わ

れ

T

15

る。

をした伊 ∀. 野 0 は 七 1 コ ン 力 ギ ij 頑張 たということで、 この 石の分だけ伊豆佐野 へ水を流してもよいことに

### 日常生 活のため のの水

オオカワ 人間 の生活 にとって、 水が なくては ならない 6 ので あることは言うまでもないことである。 言 方を換

ることもあるが、 で 生 あろうが農村であろうが、 活 か 用できる状態になっ の主 社会資本として水の利用 一要な一 えれ 部分を構成していた。 災害時 ば 人間 てい を除けば、 の生活は、 水の利用 る。 そのために、 危機的 が整備され 常に水に囲まれ は 裾野市域では、 ダムなどを利用した水道によるものが一般的 な水不足に至るまでになることはほとんどないと言っ 年によっては、 ていない時代には、 てい 現在でこそ市の水道 なければ存続 夏の渇 生活 水期 のための水の確保は死活問 できない。 に、 心が完備し 降 雨量 現在 L にな の不足によって水不足 水不足が起こることはほとん の日本社会では、 5 蛇口をひ てよ 題でもあ ね そ れ b が ばすぐ水 れ が 人間 ば 都

規模は小さいもの 川 が 貴重で 野川 ような状態 あり、 などの自然河 か 0 0 中 中 水 で、 小 jij 0 河川であるがゆえに、 は 確保にさまざまな工夫を凝らしてきたの なんとい 静 岡 県内 0 てももっ を流れる狩野川、 とも利用し かえって生活のためには身近で利用 やす 富士川、 か 0 が、 安倍川、 た 0 裾野 は 大井川、 中 市 域 小 の自然河 の人々であったと言ってよいだろう。 天竜川 しやすか などの大河 で あっ ったのではないだろう た 大場川 III に比べれ 黄瀬

できた場所は限られており、

戦後、

市の水道が整備されるまでは、

生活

0 が

ための用水は常に不足しがちであった。

水

てよい

が、

ダタラと呼ばれ

る溶岩にさえぎられ各所に岩盤

横たわ

2

T

いるために、

井戸

を掘ることの

か。

域 5 ば ば は 0 自 人々 中 れ 日本では、 河 玉 は の長江 JII は 安倍川 東京の隅 は 般 をオ 5 的 0 に呼 田川 才 Ш 力 ば 0) ワと は下流 れ 全体を長江と呼 てい 呼 る正 域の人々によってオオカワ(大川)と呼ばれており、 れ んでいる人もいる。 式名 h 称 で 0) ほ 0 1 るが、 か に また、 によっ 下 流 -流域 れ てい 安倍川の支流、 0 る場 部 0 所ごとの呼 人々 が 丸子川 は この川を揚子江と呼 び名 して は、 静岡県内 が異なることが 下 る 流の人々によっ で では、 あ んで 安倍川 あ る。 1 T ヤ Ŀ. ガ あ 流 る

佐 呼 ホ 野川をゼ ン えられ れ ガ は ワラとい T 裾 ナザワ 野市域の人々にとっても同様で、 た ò ح 呼び方は、 のように、 (瀬名沢)と呼んでいた。 JII 今里の場合、 は流 T 5 L る周囲 ちょうど集落の真ん中を流れ かし、 すでに見たように、 上流の今里では佐野川のことをホンガワ 人々 て独特の呼 富沢など佐 T 称 5 野川 るのでこのような呼び方が 存 在 が 黄瀬川 V に合流するあ ラ(本河原)と呼んでいる。 0 め た り なされ T る

と考

沢でも、 とも大きな川 (瀬川 泳ぎに行こう」といえば、 黄 については、 JII は が 黄瀬 才 オカ 川 たとえば、 ワと呼ばれ で あるの 上ケ田 で、 それは黄瀬川へ行くことを意味してい てい 黄 瀬 では る。 JII したが が 才 才 オカワと呼ばれている。 才 2 カワと認識 て、 この され あたりで、「オ てい 上ヶ田 る 0 で 才 田では、 あろうが、 力 ワ 集落のすぐ近くを流 魚をとりに行こう」とか、 ح 0 ほ か 15 近 隣 0) れ T 御 宿 V るも や金 才

根 ことである。 では た 口 じ市 まさに、 集落 域 の中 の中 それ で、 -を泉 ぞれ 同じように JII 0 から 4 流 ラでもっとも身近で大きな川 れ 才 T 5 才 る カワと が、 そ 呼 れ W でい を 才 なが 才 力 ファと 3 が 呼 それ 才 才 W 力 が で 黄 ワ お 瀬川 で り あ 0 ま で た は た麦塚 ので な 1 ある。 では、 ムラも 才 あ る。 才 力 ワ たとえば、 は大場川の 久



(水窪・長泉町南一色境) 愛鷹橋

写真 1-24

たとえば、

水窪

では、

黄 2

に

か

か

る愛鷹橋

0

少し上

12

12

チと呼

ば

n

淵

あ

V

う。 れが

は

河川

改

修

に 0

T b

在

6 タ JII

0 雨 0

中 乞

は

岩

石

などの

位

置

に

よ

0

て深

15

淵

が形

成

3

れ U

ているところ

が

あ

る

が、

そ に 5

のような場所は子

供 瀬

たち

0

水遊び

の場所とし

て最

適

であ

れ

4

ラ

0 0 湯所

子供

たちにとっ

T

は水遊び

の場所

で T III

あり、

大人たちにとっ

水遊び

から

H

立

ち、 ح

利

用 才

3 才

れ 力

ることも

減

る

が、

か で

0

T そ

は JII

そ

れ

そして、

0

ワ

のような

河 2

は 5

現

在

ح

0

汚

は

で

あ

0

たりと、

日

常生活と密接に結

0

5

T

た。

特

窪

子

供 力

たちはここで泳い

で 0

遊

6

0)

で

0

また、 同

> 黄 で、 現

は

跡 ブ

形を残し

T

5 る

な

5 から

が、

水 た

流

止

まる広

心場所

であ

0 よ あ

たの

水

15

5 0

る

=

P

魚をとっ

たも

で は 0 2

あ

2 h

た で

٤

15 た

う。

J.

ケ あ

田

でも た。

様

で

才 瀬

日 小 才

学校高学年になると、 力 ŋ と呼 ば れ T 1 る黄 瀬 子供たちは夏の間 JII 子供 たちは泳ぎに行 毎 H 0 よう 0 7 に泳ぎに行く 5 たが、 特 0 が

野 に 市の場合は、 な か ると川 幅 のような水遊 \$ 狭 ほとんどのム < なり泳ぐことも U は ラで川 黄 瀬 での できな JII Ŀ. 流 水遊びを経験して V 0 御 0 殿場 で、 子 市 供 域 が 0 5 人 III たのである。 で泳ぐということはほと × カン ら見ると異なる習慣に思 裾野市域ではもっとも高地 んど な わ か れ T たと たようで、 に位置 1 う。 して L かる 流

課

で

あ

たと

5

30

と考えられる

が、

水を利用した雨乞いも伝承されてい

る須 公山でも、 たという。 集落の中を流れている佐野川に大淵と呼ばれる淵があり、 また、 須山の中でも田向の子供たちは、 同じ佐野川のヘイソウブチと呼ばれる淵に泳 馬場の子供たちはここへ泳ぎに行ったもので ぎに行 って た

とい

. う。

ただし、 もだんだん高学年になってくると、 れ な てい 9 御 ケンバ(二間場)というところで泳いだもので 宿でも、 る。 ホンムラの子供たちは、 御宿 ここは 才 の中でも新田 オカワと呼ばれる黄瀬川で子供たちが水遊びをしていたが、 魚も多くいるところで、 はホンムラから少し離れているので、 古堰(本堰)の近くのダシノハナ(出しの鼻)というところで泳いだものであっ その少し下流のトョ 魚とりをしながら子供が水遊びをするのが常であっ あ ったという。 ノダイ(豊の台)というところで泳いだものであっ ホンムラの子供たちと場所が異なっていたようで、 モョリによって子供たちの泳ぐ場所が異 た。 ところ たと 小 学校 いわ

子供 のときには、 雨乞い このように、 いたちも黄瀬川に泳ぎに来て、 III JII 御宿 を利用することがあった。 を利用 御宿では子供たちが黄瀬川で泳ぐことが普通であっ と深良の子供たちが、 L て子供たちが水遊びをしている一方で、 水遊び場を相互に譲り合うということもあったという。 すでに記したように、 黄瀬川を挟んで石を投げ合いけんかをするようなこともあ 大人たちも娯楽的要素を含んだ雨乞 市域の雨乞いは愛鷹山 たが、 黄瀬川 の対岸が深良であるために、 ..など山岳信仰とも関連している しかし、 IE. 1 0 たようで 0 月のド 行 事 ンド 0 ために 深良 あ る。 丰 0

たことがあっ たとえば、 水窪 たという。 一では戦 水窪では、 前 0 頃のことで 黄瀬川の川岸にある山 あるとい わ れ T い の神のところに、 る が、 ひどい水不足 以前は黄瀬川に枝葉がせり出しているよ の年 に黄 瀬川 0 川岸 で雨 乞 が 行

わ n

L

ていると、

夕方頃には

暗

雲が

広が

b

雨

が

降

2 たも

のであっ

たという。

うな松

から

あ

り

4

ギ

カラを材料にして作

った大蛇をこれ

に吊るして、

雨乞

5

が

行わ

れ

てい

たとい

わ

れ

てい

る。

麦塚

ころは、 大場川 で P サ あ そのために、 1 2 前までは 三尺ほどもあるかと思われ 0 1 JII Ŧ 岸 雨 0 オオオ にあっ 乞いをやることが決まると、 葉が変化するような状態になったときに、 子供たちは、 カワと呼ばれ た大きなヒ 雨 ノキに吊るし、 ている大場川で雨乞いが行われていたという。 乞い るほどの 0 あとで、 コイもい 水窪と同じように、 大蛇 淵 た淵で、ここは子供たちの水遊びの場所であったところでも に落とされた大蛇 0 口を川 区長がフレ 0 水面に落としてい 4 ギ カラを持ち寄って見目神社で大蛇を作 (触れ)を出して日時を決め、 0 頭 に乗って遊んだものであり、 雨乞いをやるの た。 この大蛇を大場川に落とすと は夏 雨乞いをして の渇水期 そのように で、 ح あ れ た 陸

から そのために、 地下に岩盤 凝 とカワバタ 井戸の不足 いらされ 水 から 生活用 広 0 確 が 自 これ 1然河川 保 0 T から 水の不足を補うために、 まで見たように、 行 5 われ が生活 るところが多い てきたのであった。 に身近であっ 深良用 ため 用水に設けられたカワバ に井戸を掘ることが たことは確実であ 水による農業生 産 0 0 できず、 た。 ための水の利用や、 タ(川端)を利用するなどして、 L かし、 生活用 裾 水 野市域の場合、 に不足しが 黄瀬川、 佐野川、 5 すでに記したように、 0 4 さまざまな工 ラ が 大場川 多 などの た 夫

富岡 に できず、 利 用 水道を作る前 0 していた。 実 井戸 を持 0 5 水をくむのは、 は っている家は三 て 平 集落の中を通る深良用 地 0 4 ラ 朝早くか夜遅い時間で、 軒 カン しか 3 ムラごとに見てみると、 なか 水の ったと記憶されている。 力 口 ウト 米をといで炊事のしたくをすることから洗濯まで、 堰から取水した用水に、 たとえば、 そのため <u>F</u>. ケ田 に では岩盤 力 戦 ワバ 後の一 タを設けて生活 0 ため 九 五〇 に 井 昭 戸 を掘 五. 用 水 ること 年 0 ため 頃 0 用 から

事

風 2

呂 T

水

\$

毎: の仕

日

か

え 15

る

0 2

で

は

なく、 る家も

何 あ

日

間 た

カン

連

続

T 0

使

れ

は

家によ

は

7.

供

事

な

T

5

が

労

分

か

か

る

仕

力

0

あ

る な

V 0

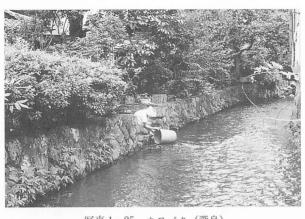
は で

半分くら

いずつか

えるなどして利用し

ていたという。



ある 0 た 水道が整備 8 に 井戸を自 され - 25 バタ たことや、 由に掘ることができず、 水をく 茶畑 水をく 般 水 3 井 ワ るために、 的 少なさ 0 から 声 な利 タを使っ 流 たまっ 0 のうち 利 みに来る家もあっ むには便利なところに れ 下水道の不整備 用より 甪 は がよく道 淹 7 方法 力 力 てい 頭 ワ ワ も る バ バ で 0 た。 路 が、 あ 七 タ 9 朝早 に = 0 主な生活用 風呂の水も 面 以前は非 た。 IJ 利 0 によっ たとい 用 依存度は減少し したようなところ で く炊事に使うための また、 を重 は あ 井戸 常 て 要なものとし り う。 現在 に水 力 水は、 力 クワバ フワバ 洗濯 が数えることができるほどし 力 がき では、 ワ バ タ 用 から、 7 タからくんでくるのが普 に作 タは、 れ 0 水に設けたカ 水を T る 水 1 滝 野菜や食器を洗うことも る で 頭 5 が、 に汚水が あっ た どの家でも、 カ 0 0 茶畑 が 不 ワ 0 普 is たために、 動 で ワバ 通 流 タ あ 0 0 場合で 滝 か で れ込むことも タを利 らく あ た。 淹 家 0 通 0 ここまで かなく、 た 0 で 前 ぼ 0 用 井戸 ははご が 面

水

0 力

ワバ

用

L

ていたものだったという。

L

か

L

水の

水は、

N

が

降

たときなどは水が濁

てしまうの

出るところ タを利

き

れ

いな水を求めて水をく

、みに行

0

T 用

5

たとい

茶畑

0

盤

が

現在でこそ、

市

使

用

され

なくなっ

T

る。

るととも

K

8 L 戸 茶畑 て、 れ か 2 は T た 使用 が、 のうち、 まだ戦 この井戸 0 井 するとい 本茶の家 本茶 前 0 イド は釣瓶 に、 3 々 0 水槽 では、 面 Ŧ ガ 工 倒 でくみ上げる方式であったので、 = タン なものであっ IJ 并 炊事 でも 戸 クを作 替え)を行 角 非戸を の水は金毘羅神 り簡易水道にされ た。 掘 S ることが また、 本茶の人 共同: 社 ほとんどできな のところ 井戸 使用されるようになっ 々 ここへ女衆が来て釣瓶でくみ上げては、 が で 出 の共同 あるため T 井 戸 かる 0 井 2 中 に 言 た ため まで水をくみ 0 掃 たが、 除 年 に に をして 力 市 П ワ には六 0 V にきて使用 バ 水 たとい タを 月 道 が か 利 整備 七月 う。 用 家 L す され 頃 てい 3 な 帰 お に 0 たと 日 9 から 水 取 0 b から を 共 8 同 決

た は か \$ を利用 茶畑 8 菜や農具を洗 あ 0 深良用 4 り ラ することが から 富 15 各家とも 水の 沢 お で 1+ Ш 水を利 は る 15 たりするなど、 普通 この 力 近 力 ワ い バ ワ 用しているために、 用 で 4 あ バ タ 水 ラ った。 であ 9 0 に 0 利 面して家屋敷 水 用 るとすると、 さまざまな水仕 富沢では、 から と同じように、 利 闸 できな 渇水期に から 穴堰 愛鷹山 配置され、 いときに 事 夜や朝早くに水をくみ、 か にカ に近い は水量が ら取水した用 ワバ そ は 富沢 0 減り、 タを利 「不動さんの水」と呼ばれ 前 面 でも岩盤 15 水がちょうど集落 L 用してい 力 かも ワバ 0 雨 水 ため タ 天の際 たの が が 設け 8 12 であっ 井 15 3 入 戸 には水が の中をまっ を掘 れ n る不 てい た。 T お ることが 動 濁 るのであ ところ 1 尊 りがちであ た すぐに通 のところ り が、 できず、 る。 あ る 力 の湧 そし てい 1 0 ワ た バ は カ き水 9 昼 ること ワ 2 0) バ を 0 水 は ほ 4

利

用

T

たとい

さら

<

か

0

4

ラ

0

例

を見てみると、

水窪

現在記憶され

てい

る範囲

では、

個人の

家

で井

戸

を持

0

は二

軒

くら

V 0

しか

なく、

ほとんどの家が炊事

用

の水 では、

\$

用

水の

力

ワ

バ

タを利用していたという。

そのために、

太平 てい

般 的 で 136

洋戦 0 に n 用 てい 水 争 道を使 意をしたり、 地 中 にさしか で横穴を掘 その 用しているためにこ 際 かる頃、 炊事用の水くみをしたが、 に 下 たようなこともあっ 水窪の中の上村と下村 村 は比較的容易に掘ることが 0 共同 井戸 、は利用していないとい たとい くんだ水は担い が、 う。 それぞれ別 ح できたが、 0 共 で家まで持 同 0) 々 う。 井 上村の場合には に使うことができるように共同井戸を掘 戸 が ち帰 できたあとは、 る 0 が 5 常であ くら 掘り 井 0 芦 進ん た。 のところまで行 なお、 でも水 現在では、 脈 15 0 たとい たら 炊事 市 ず わ

在 を が 9 上. 普通 麦塚 沸 0 げた水を三島 でこそ、 伊 水を かすと隣近  $\overline{\Omega}$ 島 利 田 子 厚い岩盤を貫 用 で 供 \$ 3 所 が、 の水道水として利用しているほどになっているが、 からも入りに来て、 地 0 まだ暗 下に岩 が 般的 いて井戸を掘り、 盤 いうちから起きてくむことも多く、 で が あ あ いるため 0 たとい しかも、 15 岩盤 j. 井戸を掘 三日くらいは同じ水を使うことも多かったとい 炊事や飲 の下の水脈に達することが ること み水 が に利用 できな 風呂の水も、 以前 する水 5 とい はほとんど井戸を掘ることができず、 可 は わ Ш 能になり、 れ 朝 0 T 水をくんできてい 0 5 うち る。 E 伊 ボ 力 豆 1 IJ ワ 島 . う。 バ 田 ン では、 グ技 タ たが、 か 3 術 3 0 発達 h でお 度 力 した現 < ワ バ 0 V

が 4 す 小 ラであ 学校 茶畑 ぎたときも苦労が多く、 う。 る 0 か 本茶 3 力 盤 ワ で 帰 バ Ŧ 0 T 麦塚に タ  $\exists$ た くると、 IJ ^ 8 は、 の使 に は ま 伊 2 てい 婿 ぬるくするために、 豆 力 たく井戸 島 ワ にも嫁にも、 バ た古井戸をもらい受け、 田 タと風呂場を何 と同じように、 が なく、 来たが 生活用 また、 度か 朝早くから水をくみに行 る人が 水 往 なはすべ 力 復 少 ワ そこからパイプを通して各家に通水するようなことも バ L な て水を入れ T タと風呂場を往復し か 0 力 たとい ワ バ タ T う人も 0 水 5 0 たも た を利用 V なけれ ので、 風呂を沸 るほどである。 L て ばならな 風呂の水 1 た。 か た 水 カン そ に不 につい 0 0 たとい ため 自 ては、 由 う。 子 あ 供 ま る 後

L

T

1

る

0

から

通

C

あ

た

バ れ タを持 落とすために身体を揺すっ 一つずつ家 麦塚でも、 2 T 5 るも 0 度風 前 面 0 0 や近くに 呂を沸 新 田 カン 持って すと何 7 で から出 は 用 いるも 日 なけ 水 か が は な れ 可 0 じ風 5 で ば ため あるが、 ならなか 呂 に入 に 用 麦塚の場合、 2 T 水 たという人も のあるところ 5 る 0 で、 ホン 汚 5 に何軒 ムラで る。 れ が ح たまり、 は のような か たい が 共 風 同 T い 力 呂 で ワ が 力 か ワ バ バ 軒 タ 出 タを持 ると に一つず \$ きに 普 通 5 は 力 利 汚 用 ワ

2

< L L T 力 T 2 か 力 ワ 深良用 れ バ ワ \$ げ \$ タを まで見てきたように、 バ タの 家 そのために、 かの中 水 ワバ 水を 用 0 -の水が \$ できるムラであっ 利用 タで水くみをするの 流 とも上 K めに入れ使用するの あることも していたが、 水不足 流 市域では井戸を掘ることができないために、 に位置 のときや あ た 用 2 L 、雨が降 が普 水の たとえば、 て、 ている深良 通で であるが、 水 水門は常 は 9 あっ 濁 常 須釜 K の場合、 9 水 き に開 その水くみは、 れ 0 のときには、 モ 2 か な状態 れたままで 3 ほ リでは、 か 0 C 4 あ ラとは異 力 普通 あっ 炊事 ワバ 2 たとい は若 主にカワバ たので、 から洗濯、 タ 0 なっ う。 水を利 い嫁 て、 の仕事 2 力 風呂の・ ワバ 用 タによる水 0 用 水 力 することも タ で、 ワ 0 バ 取水 0 水、 水 尽 9 農具 の利 間 か 位 が き富 難し が 0 3 用 減 野 の洗浄まですべ 良仕 で不自 か が ることもなく だ水 行 た。 わ n 0 L てき 前 か

行 12 い が、 る。 1 原 か 須釜 因 須釜 から には、 水道を引く際に 力 ワ で バ は 2 タ ic の年 昭 よる 和 に生まれたために 0) は 水 は 0 C め頃 当 利 用 時 の深良村長が中心になり、 に に ある 伝染病 のでは 「通水雄」(とみお)と名付けられた人も が ない 流 行 近避 か、 と考えられたために、 病院 神山 で死 者 (御殿場市)の が 出 るような状態になっ 水源の権利を買 5 九三三 る。 その後、 昭 和八)年 たこと V 2 神 に水 0 から 水 Ш あ 道を引 道 か 3 が 引かか 通 2 水 0

れ

流

T

朝

のうち

10

カ

た

3

公文名でも、

現在、

石舟橋

のある下のあたりが馬洗い場であっ

たという。

やはり、

水窪と同じように、

Щ

から

帰

たあとは、 バ 炊事 0 利 角 の水 用 なについ たとい てはカワバ う。 タを利用することはなくなり、 風呂とか洗濯など、 衛生 面 に問 題 0 な 範

囲

0

力

ワ

9

に

な

によって使い分けてい 12 ため 年 ŀ. 凉 -を通じて水が減少することはなかっ に 0 Ŧ 炊事 = IJ でも、 0 水は井戸水を使 たとい 深良用水の用水を利用してカワバタを設けていたが、 V 力 ワ たという。 バ タの水は風呂、 そして、 洗濯、 上原の場合は、 野菜の洗浄などのために使うというように、 各家ともに井戸を持 用水の水として常に調節され 0 てい る家が多 ながらも、 用 か 途

炊事 ときには、 は T 深良 力 ワバ 炊事や風呂の水だけは水道 の水から洗濯 の中でも、 タを 以前と同 利用 箱根山 L てい 幼い子供の水遊びまでこの じように、 たが、 に面面 した南 炊事 ここでも水量 の水を利用するようになった。 の水も朝早くにカワバタからくみおき使うようにしていたとい 堀 のモョリの場合は、 は豊富で、 力 クワバ タを利用し 水不足になることはほとんどなかったとい 深良用水よりも、 しかし、この水道は断水することもあり、 ていたが、 一九三三 集落のそばを流れている泉川の水を引い (昭和八)年に 水道が う。 う。 もともとは できたあと そ のような

3 2 b 馬洗 のところ 浅瀬 場 おのずと若 K より、 が 用 的 集落の中 水の浅瀬になり、 な場所が、 鞍をはずして馬を洗うの い衆 を用水が通りカ の仕 馬洗い場として使われている場合もあった。 事に なっ 広くなっていたので、 フワバ ている家が多か が常で タを 利用しているようなムラでは、 あ 2 たとい 2 馬を連れ たという。 · )。 Щ て草刈りなど山 草刈 たとえば水窪では、 りに行くのは 用 水 仕事に行った帰 の特定 若 の場所、 V 現在、 衆であ 公民館 比較: りに 2 た は 的 0 で、 4 そ あ ラ るあ 馬 0 0 を洗 まま 中心 た

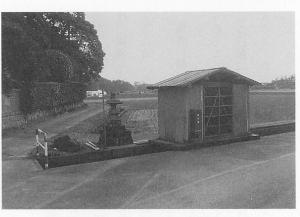


写真 1-26 ッジ + (麦塚)

水

車

もあった。

特に、

深良用水のもっとも上流の深良では、

水

を

この

ほ

かに、

用水を利用して水車をまわし、

米などをつくこと

たとい

い

うが、

ح

嶋大社の祭りの花火をムラの人々がここから見たりしたものであっ

若い衆がここへ集まり藁細工をしたり、

八月一

Ŧi.

0

たと 日 を

のツジャの少し下流のあたりが馬を洗う場所であっ

た麦塚では、

現在、

大場川

から引

V た用 3

水

0 ポ

ン プ小

屋 で

0)

あ

る

あ

たり

てくるときに、ここで馬を洗ってか

家

へ戻っ

たも

0

あ

2

たと

う。

れていた。

また、

共同の水車もあり、

数軒の家が共同で水車

を持ち、

米な

まわして米をつき、

営業をしている人もお

り、

本格的な水車

0

利用

が

行 車

わ

どをつくのは順番

に行っ

ている場合もあった。

は 茶畑でも、 現在滝 頭 の公民館 滝 頭 0 Ŧ のあるあたりで、 = IJ では共同で水車 用水の速度が早 小屋を持 0 てい 1 たとい ところであ う。 場所 る

富沢でも水車が 的 が 普通で に米などの穀物をついてくれるので非常 あっ あ たことが記憶されており、 たらしく、 滝頭 の中 で、 十数軒の家が共同で使用していたという。 F. 組 に便利であっ 中 組 下 組 た。 0 順 しか 番 K L 軒 共同 軒 まわ で持 0 2 T T 1 5 るので、 たと

使 り

できる また、

は

水

流によっ 0

て、 日 交代 自動

で、

水車をまわすには適当なところであった。

この水車

には

石臼

から

几

0

あ

5 う。 用 今

でも

井

声

が

まっ

たく

ない

わけでは

な

か

ったが、

地下水が

流

れ

T

V

るような井戸

では

なく、

地

表

か

3

絞

り水

が

たまってい

るだけの井戸であったので、

水量は少なく、

そこで山の中の水源から隧道を掘り、

たとい

## 水源とタンク

は

河 训 か 3 用水を引き、 裾 力 野市 ワ バ 域 タ の中 力 0 利 ワバ 崩 でも、 が タを設けることが少なく、 般的 これまで見てきたような平地のムラでは、 であっ た。 ところが、 その カュ 同じ裾野市 わ b に 山 域 0 0 水の利 中 中 で 0) 沢 \$ 崩 や湧き水 愛鷹 は 用水などに設けら Ш 麓 0 出 0 Щ T が 5 るところを ラで れた

5 は j. T 水 V 士: たとえば、 かし、 上方はキミョウという水源から、 る 管や鉄管に改善された。 か にして、 杉山 なり で このようにして水源から水を持ってくるとしても、 0 下和 水を管理する当番を決め修 距離を引水してくるわけであるが、 中 そこから土管やパイプなどで水を引き、 丸 0 は 几 干 上方、 日 IJ この水沢の水源は、 は 中 戦 条 前 大胡山も独自に水源を持ち水を山 向 15 繕や掃除などをして 山 松葉、 0 中 0 サン 杉山、 戦前は、 水沢とい ショ 日常の生活用水に利用することが多か 中 素掘 ウウオ う水源 丸 V 現在のように る。 大胡 りの状態で水を持ってきていた。 から が生息しているところで、 ح 山という七モ 0 水を引い から引 ほ かる 市の水道を併用 K て、 いてい 向 = 生活 IJ は が Щ ある 用 0 水とし 中 現在でもこ L が、 0 T F しかし、 ح て利用し 1 ン ない F れ 3 ,昔は 0) のうち、 水 や V T う水 を利 水 がてそれ が 中 貴 源 用 重 か

なの の流 れがな で、 大量 風 、呂を沸 V 0 穀物をつくときには御宿のつき屋まで持って行き、 ので水車を設置することができず、 か L ても何 日 間 か 同じ湯に入っ 下和 ているようなことも 田 では、 穀物をつくのはすべて石臼に頼らざるを得なか いくらかの金銭を支払ってついてもらうし あっ たとい う。 また、 平 地 0 4 ラ 0 ように か なかか 用 水

それを一

П

タン

クに

たの

ため ならないときなどは、 日を ても立つくらいになったという人もいるほどである。 たてると一 そこ か ら各家 週間 家族の水くみだけでは不充分であり、 が水を引くような形で生活用 も湯を替えないようなことさえあり、 水としてい また、 青年団の若 そのような状態 葬式などが出 たとい う。 い衆の仕事として水くみが そのために水は貴重 に て炊事などに大量 なると、 垢 がたまり、 で、 の水を使用 風呂 行わ 湯 れたこともあ 0 中 れ 度

戸 ことは 葛 葛 を持っている家が多かったので、 このように、 0 山では、 中 力 ワ で バ \$ 平 タを使ってい 地 Щ 田 場沢と中 も増えてきているために、 がちのムラである下和田や今里では、 た。 村 0 七 方で、 3 井戸水を利用していたとい IJ では 炊事 JII 井戸、 に に 利 カ 用する水につい ワバ カワバ タを持 Щ タ、 の中の水源を利用する方法 0 う。 T そして山の中の ては、 いる家 田 が多く、 場沢や中村、 水源の利用 風呂 が 0 ある 水 般的 も並 洗濯 1 は 行して行われ であったが、 F. や野菜を 城 0 モ 洗うなどの 3 今里 IJ T で 0 南

うか 水源 上 4 ところ なお、 几 田 が か わ ら土 力 所 が、 水 れ この ほど設 源 管 る。 下 から木管で水を引き、 が集落まできたところにタメ この 水源には、 条 けた蛇口をひね 0 水神に 七 3 IJ 一七五○(寛延三)年に造立された水神もまつられており、 ついては、 で は Щ って水を利用したことが タン の中 戦後 クと呼 0 の一 湧き水 (溜め)が作ら ば 時 n 期、 を水源にして、 る貯水 水神講 れ 槽で あ さらにそこ 0 でまつっていたことが た 一度ためてから分水し、 そこから土管で通水して生活 から家々に分水されるように あっ 古くから たとい 各家に は通水 う。 の利 用 水 中 用 に利 なっ i 里 で な あ 0) 用 7 か Ŧ 0 たことが T 1: IJ たとい でも、 \$

-

0

ほ

カン

K

力

ワバ

タの水が豊富な深良でも、

このような山

「の水源

から水を引くことがあっ

た。

町田

0

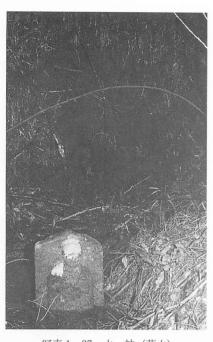
Ŧ

=

リでは

家の 南堀 T る。 0 Ŧ が ∃ 液桶やバ か IJ 0 山 ケツなどを持ち、 ここの場合も各家にまで行き渡っ の水源から水を引き、 蛇口まで水をくみに来て利用するものであ タンクに一 度水をためてから分水し水を利用していたこともあっ ていたわけではなく、二ヵ所ほど設けた水道の蛇口を利 たという。 たといわ 用 れ

御宿 運営しており、 る と考えてよいだろうが、 の家 のような水源から木管や土管などによって通水しタンクで貯水してから分水する形式は、 御宿 々 が の家 利用できる富岡水道を引いたことがあったという。 が中 通水する管も鉄管にして、 心 になり、 このような水道の利用方法は、 松 0 木 0 中をくりぬいて管にし、 市の水道とともに上ケ田や御宿の家々で利用され 旧富岡村で大規模に行われたこともあっ 現在でも、 岩波の湧き水の出るところを水源に ۲ の富岡 水道は水道の管 ている。 た。 種の簡易水道 理 L 戦後のことで 組 て 合 Ŀ. ケ である 田 あ



- 27 (葛山) 写真1 水 神

たと言ってよいだろう。

水の苦労

用 山 水とし 0 中 などに て利用してい ある水源 る を利 ラのうちで 用 T 生活

須山 は、 \$ とも水で苦労してきたム は 水の苦労が多い 井戸をほとんど掘ることが ムラが多か ラのうち 2 た。 でき 0 その中でも、 ないために、 であ

須山 T 七 ウ 2 0 ソウダケ(孟宗竹)の節をくり 中 る でも、 田 向 0 うち、 比較的 下村 水の苦労が少 では、 Ш 80 な 0 V 中 か た管で水 たと 水 源

5

わ

れ

を頼み、

適宜、

点検をしてもらっていたという。

設けら を引 ておき、 0 張ってきて、 そのタメから水をくみ、 そこから各家に水を配分するしくみになって 水を配分して生活用水としていたとい 水を使う方式になっていた。 5 , う。 た。 また、 管の分水箇所には、 7 ス から配分され 水源の点検のために、 た水は、 マ ス (桝)と呼ばれ それぞ 仕事の暇な年寄 れ 0 家 る木 でタメ りなどに 0 タ メが

渇 調 水 整 L H 期 に が か 必 に 軒 は 要になった。 水源 の家の水の量が、天秤棒の前後につけることのできる桶の量だけに決められることもあったという。 7 ス 0 から水を引く場合には、 中 を調節して、 たとえば、 渇水期 少しでも自分の家に多くの水を引こうと細工をするような人もあっ 共同 にはマスでの配分をやめ、 で引いてい るので、 渴水期 各家がマスまで天秤棒でくみにくるだけにして、 になると全体的に水不足に なり、 たとい わ 0 配 てい

でも を引 る。 に お 分水する形式をとっていた。 H 向 目 ふだ 権現さん」 のうち、 0 水源 周 生活用水として利用していたが、 囲には、 h が か から中 行われ、 中村でも、「権現さん(須山では、十二神社のことを権現さんといっている)」の横にある水源 ら見まわりをして、 0 栗の木の芯をくりぬいたものをはめ込んでいたという。しかし、 村の家々までは、 水は利用できたので、 共同で改修を行っていた。 しかし、 修理をしなけ 使用しているうちに破損したり老朽化することも多いので、 モウソウダケで作ったトヨ この水源は渇 中 村以外からも水をくみに来る人もいたといわ このトョ ればならないところができると、 れることはなく、 の継目 には、 (樋)を使い、 漏水 ほ が か 下村と同じようにマスを設けて各家に ないように杉の皮が使わ の水源 このようなトヨで水を引く場合、 軒から の水が利 れているほど豊 人ず 用 できないようなとき つかが 水世話人を選んで 出 れたが か な水 から水 ブシ 源



雨水を集め、 冬季 り の水が豊富であっ 屋根 0 渴 水期 の周囲 風呂や洗濯 には、 K 1 水源 た田向でさえも、  $\exists$ 0 水 をまわして、 から引 に使うことも 1 た水をほとんど使用できなくなることが多 とい 現さ 中水がたまっているところまで水くみに行っ にしても、 雨水を集めるの にくむような方式になっ 7 あっ 水の苦労は絶えなか ス う。 ん から各家へ分水することをやめ、 たという。 0 水が行き渡らなくなると、 水源まで水をもらいに行くようなことさえも が普通であった。 特に、 0 たとい たが、 杉皮で葺 須山 われ あ 1 T る た屋根 0 決めら 佐野川 中でもより水不足に悩 5 1 る。 は か は 0 たり、 たとい の大淵 れ 水 雨 た量 源の水 水 か を集め う。 田 という一 0 そ が 向 水 減 その あ 0 を ると よう す 順 12 年. か W

8

に

屋

根

0

は

このように、 た馬場で

水源

たといわれてお

水

から

豊

か

で

あ な

ても欠点も

り 7

冬季 0 中

子には、

ス

0

周

囲

の鉄管が凍りつき外から火を燃やして暖め

な 源

ように

た

り

隠

n あ T

ス

を調

節 L 7

て水を自分の家に多く引こうとする人が

出

る

0 \$

冬季 なけ

のことで ば使用

れ

で

出 が 底 K L ح 0 か 泥 て のような水の苦労が多 な から 風呂 V た ように身体を揺すってか ま 0 湯 てしま を 何 日 間 風 か \$ 呂 か 0 カン たためであろう、 えることが 3 らあ あ から が るときには、 0 ないため た というような かつてを思 に 毛穴に泥 風 呂 V 0

須山では、

笑い話を話 うような話が す人も 1 るほどである。 0 また、 須山、 る。 板妻 ず n か (御殿場市)、 EII 野 御 2 殿場 市 は 水での苦労が多い ので 嫁に行く

٤ あ このように水の苦労が絶えなかったために、 たと語る人も V 2 水に苦労が 多かか たムラの逸話であっ た

水源

から水を引く方法を大規模にし

て、

ぞれ 源 を 1 Ш は 0 簡 易水道 水利 後になってから再整備 が 源 (弁当場)というところであった。 簡易水道 頼 組 朝 合 が 0 簡 富 簡 の水利 |易水道を引く方向に進んでいっ 士の巻狩 易水道の水源は、 組合を別 して、 りのときに、 々に 須山全体が使用できるほどの 須山 持 2 ここで炊事をしたという言い伝えを持つところであ 以前は、 T の中でも上村に属する馬場などが水源としていたところで、 5 た が た。 馬場などがそこからトョや土管によって水を引い 戦 須山は、 後、 水源も 田向とそれ以外の上村に分かれているので、 簡易水道にしたのである。 統 一し須山 全体の水 利組合になっ 特に、 0 た。 ~ ていたが、 たとい ン 水ケ塚や、 1 ウバとい 最初 う。 ح は . う水 れ ~ そ 須 3 ン れ

戦前 ることになっ うど自 まで水 水 山全体 衛隊 わ 源を深 れ T 田 が 0 たが、 東富士 簡易水道 5 の経営をすることができなかったが、 掘っ る。 L それでも、 てもらうのも防衛庁に依頼することができたとい 演習場を使うようになってい が引か か 結局 れ 水田を経営できるほど大量の水を使うことが たのは、 は 簡 易水道によ 旧須山村が裾野町に合併する少し前であったといわれ たために、 簡易水道を布設する目的の一つは、 0 て水 田 補助金を使うことができ、 0 経営が う。 般化 ح できるようにはならなか することは れ に よ 2 て、 それで施設費 な 水田を経営することにも 須 か 山 てお た。 では水 り の苦労 をま その た。 か 頃 が な 減 ちょ では、 少す あ ま

山中での水 平 地 は でさえ水の苦労の V そう水の苦労が多かった。 多 カン 0 た須山では、 特に、 炭焼きなどの仕事 炭焼きのときには、 0 ために愛鷹 何日間も山の中に 山 などの 2 山 るので生活用 に入っ 水

る方法 に小屋がけをしなければならないときには、 としてまとまった水が必要であり、 L か ドラムカンに水をためるとボウフラがそこにわくために、 その確保には工夫がほどこされていた。 小屋の屋根にトョをまわしておき、 たとえば、 それをドラムカンなどに通してため ここの水を使うときには、 炭焼きのために水源から遠く わい

たボ ウフラを口で吹いて底に沈め、 ヤマ(先山)に行くときには、 山の中の水源の近くに小屋を作ってから仕事をするようにしたという。 水をくんで使うようにしていたという。

変色したご飯が炊けてしまうようなこと

Ш 0 中 2 . の 水 源 V は濁 わ れ てい っているところが多かったので、 ご飯を炊いたときには、

\$

あ

たと

うである。 人によっては、 話す人が多い。 震災」とか 関東大震 ここでは、 「大正 これまで見てきたような生活用水の利用はごく日常的な様子であるが、市域の人々の中には、一九二三 (大正一二)年九月一日におきた関東大震災によって、 それは、 関東大震災までは水が豊富であったが、その後、水不足に悩むようになったと考えている人も の震災」というような言い方をしている人が多いので、 いくつかの事例をムラごとに紹介してみよう。 川の水が著しく減少したり、 湧き水など地下水の動向に変貌があったというものが多 身のまわりの水環境が変貌をとげたということを なお、 ここでは、「震災」という呼 関東大震災のことは、 この び方 あ たりでは

0 用 岩波や深良のあたりでは、 水としていたところで、 日 間 は竹や ぶで寝たり、 震災後、 地下の岩盤のために地盤が固く、 炊事も屋外ですることが 突然湧き水が止まってしまい、 続 V たとい 建物の被害は 川などから水をくみ、 j. その 少なかっ 際 に 岩波では たとい 天秤棒で桶を担いで水を わ れ 湧き水 てい る を使 が、 震災 0 田 あ

力

ワ

タを利用するようになったとい

う。

その

「水湧き」

の水が、

震災を境にし

それがたまたま大場川

の近くであ

運び、田んぼへ入れたようなことがあったという。

いほどに激しく揺れたという。公文名では、 公文名でも、 た。 ところが、 ちょうど震災の起こっ 震災後は井戸水が渇れ、 たときには、 炊事 倒壊家屋は少なか の水に困る家が急速に増え、 石舟橋 のある川の水が上昇するようになり、 ったもの の そのために、 震災後は、 屋外の竹やぶに寝 炊事の水もすべて用 道 る川 \$ る日 行 でき 水 × が 0

た てまっ ので、 水窪では、 たく水が渇 大場川 「水湧き」といわれて豊富に水が湧い の水量を増やすことにな れてしまったという。 ところが、 ったとい わ れ ているところがあったが、 別の場所か T 5 る。 ら水が湧き出し、

が、 たく水 S れ ることが不 だん 田 る川と上 葛山でも、 場沢 それ 田 は が \$ 現 で 作ら 渴 可 在 城 震災によって水が渇れてしまったと考えられている。 地 れ 能になり、 0 0 ñ 震につい ようなきわ Ŧ てい Ш = 0 IJ 水源 を ないが、 畑に転 流 ての言い伝えに、 わめて を れる川の合計三つの小規模な河川 利 震災前 用 少量の水し 換することになっ するように は水 次のような文句が 田 か なっ \$ 流 あ れ たという人 たといわれ ったとい な 5 JII に わ な あ \$ ている。 れ が 0 てお てしまっ あるが、 た。 る。 葛山には、 り L かも、 それ これら たとい が、 の川は、 佐野川 震災前までは田場沢でも井戸が う。 震災による渇水によっ 特 に 0 ほかに、 いずれも 田 場沢 田 では現在でこそまっ 震災後 場沢 て、 に 0 水 Ŧ 水 量 日 リーシを あ 田 を作 減り、 0 流 1=

ョツヒデリ(四つ日照り)ゴヒチガアメデ(五七が雨で)

ムツャツドキガカゼトシルベク(六つ八つ時が風と知るべく)

ハヤマイ(九は病)」

佐野川をはじめ川や井戸が渇れたために、 えられてきたものであった。大正の震災のときには四つ時であったので、 あとで雨が降り、 この言い伝えの意味は、たとえば五つ時(午前八時、午後八時)と七つ時(午前四時、 四つ時(午前一〇時、午後一〇時)に地震がくると日照りになるということで、 日照りに加えて渇水で苦労するようになった、 実際にそのあとで日照りになり、 午後四時)に地震がくるとその と言い伝えどおりに考えて 一種の知恵として伝 しかも、

る人もいるほどである。

# 第四節 気象の変化と動植物

## □ 気象の認知

周 カサグモ 囲 の変化が季節の移り変わりや気象の変化をここに住む人々に気づかせてきた。 恵とでもいうべきものとして、 生活をとりまく山 や川 や あるいは草木、 人間に季節の変化や気象の変化を気づかせることがある。 花など、 生活 の周囲 に存在している環境は、 その中で、 誰もがよく知って 裾野 種 0 生活 市 の知 る

ことに富士 これ は 富 山 士 のカ 山 サグモ 15 力 サグ (笠雲) 七 が の話が カン かると、 ある。 やがて天気が崩れ雨模様になるというものである。

九九〇年一月一〇日の『毎日新聞』

朝刊

の全国版に、

次のように写真入りで紹介さ

御殿場市域あたりまで

れ

たこともあったほどである。の話は広がっているようで、

気は下り に入り込む時にできるが、二階笠雲は年間を通しても珍しいという。 富士山 富士山測候所御殿場基地事務所によると、 坂」という言い伝えがあり、 頂(三、七七六ば)に九日午後、 同事務所も「生活の知恵から生まれた言い 珍しい二重の笠雲がかかり、 この雲は「二階笠雲」と呼ばれる。 ふもとの静岡県御殿場市内からも見られ 地元では、 笠雲は湿った空気が高山の上層 伝えでしょ 笠雲が富士山頂にできると うが、 低気圧が接近 天

すでに見てきたように、 裾野市域ではカワバタによる水の利用が一 般的であった。 雨が降るとカワバタの水が濁り

T

る証拠

る。

### 第4節 気象の変化と動植物



は

富士

に

力

サ

グ

七

をとり、

力

サ

グ

七

ると

山頂にできると「天気は下り 躍った空気が高山の上層に上 階党書」と呼ばれる。 笠雲は 生まれた言い伝えでしょう 坂」という言い伝えがあり、 いう。地元では、笠雲が富士 雲は年間を通しても珍しいと 窜士山洞候所御殿现基地事 写真 1-29 富士山のカサグモ 1996年11月17日のカサ

グモ (公文名) 新聞記事(『毎日新聞』1990

年1月10日朝刊)

することが をした経験を持つ人 の富士山の から水をくみに走っ できなくなるので、 多かか たの 々 が で 現在でもい たという。 ح の富・ 子供時代に、 士山 る。 たとえば、 0 力 サ 富士 グ モ Щ ほ 0 15 とんど井戸 知 力 恵 サ は重要 グ Ŧ をとったぞ、 が で、 な くくカ 力 サ ワ グ モ JII 9 から 0 IZ 富 水をくんで来い」と言われて、 頼 1: 0 Щ 7 K いた麦塚では、 カン か 2 たとみると、 子供 急い が 水 水くみ で 2 力 を ワ

使用

9

力 サ

グ

七

0

話は、 1 細 か 流さ < から モ 降 が 5 れ るという人も か < て東 か 0 Ш b か 2 0 飛び、 話 0 下 VC 分 V 15 れ 才 才 カン ば Ľ E れ ても グ グ 富士 七 モ が 常 5 流 Ш て、 雲 に れ たとえば てくると雨 力 が サ 細 ガ が < か 東 Ŧ 同 が か 流 が る C か 降 葛 れ かる るという人も Ш 0 た 夕方に 0 あと、 晴 中 れ K に な 富 な 力 2 り サ T 士: る。 グ か Ш 74 七 3 15 あ は 必 力 ず サ 流 る 風 1 に グ れ 13

南

流

れると晴れになり、

北から南へ流れると雨になるといってい

る。

たあと、

力

サ

グモ

風 ると雨 関係がないとも なり天気は崩れるといっている。これは茶畑でも同様で、 また、 が たあと、 西 か になるという人もいる。 ら吹 深良や茶畑でも同じように、 風 の吹き方によって気象の変化 てくると雨になるが、 って 5 そして、 富士山にカサグモ 南から吹いてくると風は強 このような人によれ の仕方が違うという人もいる。 がかかると雨になるといっているが、ここではカサグモ 富士山 ば、 富士山 にカサグモが い が天気はよくなり、 にか たとえば、 か か るオビ か 0 グモ 深良ではカサグモ 北から は 風 気象の変化とは から 吹 V をとっ が風によって てくると寒く あまり

ため 冬のしたくにするか」などといった会話がかわされることもあったという。 北風をナライ(またはナリャー)と呼んでいる。このナライは、 イナサ に非常 K 寒い風であるが、 このように、 れてきたことがらであったが、裾野市域では、 富士山 そのため葛山では、「今日は、 0 カサグモと風 の吹き方の関係は、 吹く方向によって風に名前が付けられている。 ナライだから寒い」とか、 秋から冬にかけての季節に吹くことが多い北風 気象の変化を感じとるために知恵として認識 ナライが吹くと、 「ぼちぼち である

良 害を避けるために、 は や茶畑でも、 たという。 な が 強風 裾野市域では、 実際に、 であることが 同じようにイナサは強風であるといわれており、 葛山では、 葛山では、 多く、 箱根山 家によっては屋敷の東側に木を植えて、 このイナサが吹くと茅屋根 ある家の豚小屋の屋根 の方から吹いてくる東風をイナサと呼んでいる。このイナサは、 がイナサに飛ばされてしまったことが が痛 んだり、 茅屋根や雨戸が被害を受けることもあり、 イナサを防ごうとすることもあるという。深 飛ばされ るかと思うほど強くなることもあ あった。 けっして寒い風で あるいは

だろう。

さら

下

和

田

から須山に入るといっそう濃霧がか

かるように

なっている。

御殿場市域と同じように、

須山

でも、

7. \$ ち木 お り、 から 特 倒れるようなこともあっ に 箱根 0 大涌谷に の硫 黄 た。 0 また、 に お 1 深良では、 が 風 に乗 0 イ てただよってくると、 ナサが箱根 山の方 から吹いてくると天気が崩れるという人 R から 降 ると思 しってい る人も多いようで

あ

る。

とき 虹 に 裾 は では、 野 市 朝 域 朝虹 では、 H が はそ た 風 2 のほ 0 た H カュ かに虹 のうち 5 今 に が出たときも、 Ħ 雨 は が降 タテ り 7 ボ 夕虹は晴 シ 気象の変化を示唆するものとして受け取られ 雨 が 降 れになるといっ 3 というような言 てい る。 い方をする人も あるい は 朝 日 ている。 が 虹のようにさす たとえば葛

市 0 5 東 な 侧 静 頃 1 0 0 15 尚 箱 濃霧 県 で あ 御 根 0 中 殿場線に 山 で数が先が見えないことがあるほどに る が、 周辺も濃霧 で 岩波駅 裾 乗り 野 市 の発生する地域であ 沼 0 から富 隣 津方 の御 1: 面 から 一殿場市は、 出 駅 御殿場方面 を過ぎる 霧の深 り、 あ 裾野 なっ たり に進んで行くと、 い土地がらで知られている。 T 市はちょ か いる。 3 徐 また、 うど霧の発生する地域に接していると言ってよ 々 に 裾野 霧 これ が濃 7駅から岩波駅まではほとんど霧 は御殿場市 くなっ 霧の発生しやすい六 てくる だけ 0 のことではなく、 が わ か る。 月 御 殿場 が か 発生 ら七月 駅 野 ま

た 里木と け b 8 カコ で 0 とも、 はなく、 0 霧 そのような周辺の ず 北 0 は 6 部 裾 野 P の十里木、 から 市 域 か とで、 カン り は 須山、 有名 環境が存在しているからとい 今里と下 で、 下 六 和 和 月 田 田 か ら七 今里などが、 0 境 月 0 馬 頃 0 須 目 って、 もっとも霧の発生しやすい場所になっ 坂 山 を上 街 道 裾野 り下 を御 和 宿 市 田 のすべての場所で霧が覆わ 葛山、 に入ると急 金沢を経 に霧 て上 に覆 わ って行くと、 れ ている。 るように れ 今 里 ある +あ

25

が

生えてきてひどい状態になることもあったとい

とも から か 霧 か あった。 が 湿気を高くするのは当 ると数以先も見えないほどになり、 たとえば、 六月は麦の収穫と脱穀の時期であ 然のことである。 面 特 が 覆わ に 六 れ 月は気温も高く てしまうの 2 たが、 脱穀したあとの麦は、 が 現 なっ 実で あ てくる時期なの ときどきかきまぜ で、 か び

を利 などは箱 L 用した一 カン 根 山 霧による湿度の高 に植 種の特産物を生み出すことに成功したこともあった。 林をする場合は杉とヒノキであるが、 さは、 か 25 のように生活 にマイナスだけを与えていたのではなく、 須山 の場合は、 杉の植林と茶の栽培はその代表的なもので、 杉を植林すると湿度のために約二○年から三 須 山 で は 霧の発生

○年で成長し売却できるので、杉の植林に力を入れている。

が、 う。 原 である。 0 演習場にも茶が植えられていたようで、 戦 か Ш 前 0 つて茶畑 人々によれば、 に は 輸 であっ 出用 たところの多くは芝が植えられ 0 霧が 茶も作 かかるところは茶の味が良いといわれ、 ていたとい たい われ てい ていの家が茶部屋を持ち、 ており、 る。 ただし、 須山 現在でもところどころに茶畑を見ることが の産物としての茶の栽培は下火になってい 近年まで茶の栽培と製茶が盛 ホ イロによって手揉みで揉んでいたとい んであった。 大野

# (二)動植物との交流

コブシの花 とえば、 梅 二月に入りちょうど梅の花が咲く頃に、 花 ic 春 の訪れを感じるように、 生活 の周 子供たちが天神講を行うことが常であったので、 进 の草木は季節の変化を感じさせることが ある。 子 た

に悩まされるこ

な

は

裾

野

市域では、

弁天様とい

ってお金の神様だから捕ったりしてはならない」という人もいる。

供 Ł  $\exists$ ブ 0 頃 1 シ 1 0) 0) 天神講を思 花 0 から 芽を見よ」 咲くとサト い出して梅の花を思い浮かべる人も多い。 ーイモ という人もあり、 を出してきて植える コ ブシ のが普 の花が咲くことが春の農作 通であ あ 0 た。 る 5 人に は 葛山 ょ 業の開始を意味して ては、 や深良では、 このことを 二月 末 コ か ブ シ 月 0) 花 初 が 咲

よく そ 0 、あっ た ワ 力 -1)-たようで、 深良では、 ギ が 浜 に打ち上 桜 ちょうどその の咲く頃から五月にかけては、 げら れ 頃 るの に、 を、 ワ 子供 力 サ ギ たちがとっ が卵を産み落とすため 子供たちが箱根山 ては遊 んでい たと に浪ととも に上り芦 3 ノ湖まで に水際にうち寄せられてくるので、 ワカサギとりに行くことが

て飲 民間 h だ り 乾燥させて粉末にして飲むと胃 めに利用されることもあった。 のように、 植物は季節感を表すものであっ に良 たとえば、 いとい たが、 大野原 わ n T 5 それだけではなく、 の演習場に生えてい る。 F" クダミも薬草としてよく利用さ るセンフリを採ってきて湯 薬草としていわゆる民

れ

るもので

間

療法

0

に

腫 1 チ 物 ゴ 0 膿 0 虫刺 吸 V され 出 しに にはよく効き目 はドクダミを塩もみして利用したり、 が あ り、 ビイチゴを焼酎漬けにしたものを塗ると虫刺され 若竹の皮に包んで焼いたものを使ったりしてい によく、 飲 めば下痢

止 8 E よ 5 ٤ 5 わ n T 15 る。 そ のほ か に ハ 1 4 ギ の汁 \$ 5 ぼ 12 効 き目 が あ るという。

T 2 末 シ 植 る。 K 0 物 0 た 酎 ほ \$ 漬 E か のを、 は け に は 切 7 り傷 大野 E 4 シ \$ や擦 で 民 原 間療法 は の演習場から採ってきたセ り傷 なくスジ に利 の熱冷ましや打ち身にも効き ナメ 用されることが多い。 ラーシ 7 ビ)でもよいという人も ンフ IJ Ó 粉 目があるという。 ピ 末に混 のうちでも、 ばて飲 8 むと、 る。 また、 とも利 な お 心 臓 7 用され P 4 肺 E シ 0 のうちで 皮 るの 肋 をは 膜 は K \$ 7 よ 4 t で乾燥させ 7 ٤ 力 ガ わ れ 7

であっ

た。

現在でこそ川が汚れたこともあり、

カニと魚 水不足に悩 川でカニや魚をとることは、 2 なが ららも、 力 フワバ タや用 遊びとしての子供時代の体験から大人になるまでごく普 水など常に川を身近な生活圏 に組 み込ん でいい るこの 地 域 通 0 々に

カニも魚もほとんど生息しなくなっているが、

かつてはカニと魚はご

水の上 ナギを見ることはほとんどなくなっているが、大きな淵になっているようなところにはたい ・身近な存 茶畑でも、 流 にあるため 在であった。 不 動 か、 の滝 特に、 ウナギ の滝 0 やシジミなどもカ カニは ぼ 0 あ 七 たりには大きなウナギがいたものであったという。 ジリを仕掛けてとり、 ワバ 4 0 周 囲 ゆでて食べることも多かった。 0 JII K お り とるのも容易であ また深良では、 ていは生息していたよ ったとい う。 現在では 深良用

ただし、 たいていは、 カニや 子供時代の遊びか趣味 魚を川でとっ たとはい の域を出るものでは っても、 とっ たカニや魚を売って現金収入を得るような人は なかったようである。 5 な か たよう

ない よ 間 く生息していたために、 を荒らされ 1+ VE 動物との 0 ように は交代で爆竹を鳴らしながら山 石垣を積んで、 畑 ないように対策を練る人間 裾野 0 か 周 0 市は、 囲に落とし穴を掘 てアラク 畑への侵入を防ごうとしたことが アラクオコシ 東西を山 才 7 シ P 岳 り に囲 の見張りをしたこともあったという。 力 1 の畑をシシが荒らしてしまうことが多かったという。 との攻防戦が行われていた。 シ まれているために、 コ シ ン が が 盛 畑に侵入しないような工夫を凝らしたものであ んであった時 あったとい Щ 代には、 から下りてくるさまざまな動物が出没する地 う。 たとえば、 山 それぞれ 0 中 戦前には箱根山 で作物を求めて出没する動 の家でも、 そのために深良では、 Щ 2 にシシ た の中 須 0 (イノシシ)が多 畑を荒らされ でも、 である。 作 シ 夜

ところが、

現在では山の中に畑がなくなり植林が増えたために、

動物が食物を求めてサトへ下りてくることが多く

が、 そ

被害

は 0)

止 家

まらな

٤

V

う人

\$

5

る。

で、

畑

15

網を張

0

たりして対策を立てているようでは



須

Ш

でもシ b 動

シ

が

集落の周辺まで下りてきて作物を荒らし、

特

に

1

ウ

七

口

コ

シ

や

サ + Щ

ツマ

、を駄

目にしてしまうことが

下

てくるように

うことを聞くことが

できる。

たとえば、

最

近

单

木

で

ク E

7

から

出 れ

T 15

き ょ

T 0

人

々

を驚

か が

せ

う。

な

物

に

1 る合作

物 の被害 な た ٤ が 多く 5

な 2 7

15

る。

あちらこちらで、

植

林に

よる

の荒

廃

そ

て

動

物

サ

写真 1-30 道路を渡る猿(千福)

3 寸 Ш まうようなこともあるという。 5 1 15 D う。 n 0 同 で荒らされると、 コ 4 る 0 ぞれ ウ が、 中 じ愛鷹 3 クビ 田場沢 P 0 サ に ここはか F. シ な " 城 Ш でも、 ン 7 2 0 麓 が T 0 七 0 出 葛 被害が大きく、 つてサツ か = てきて、 サ 5 IJ 山 反歩くら ル で で が下 サ は は ル 7 1 すぐ りてきて畑を荒らすことが多いようで、 + が 0 ウ ح 下りてくるように 畑 5 ル 数匹 が多 Ŧ 0 0 南 0 被害 + 口 ほ 側 が か コ か " 0 集 シ に 7 0 Щ から を荒らすことがあるとい 団 非 0 たところで、 が 葛 常 畑 で 千 Щ が 畑を荒らすこともあると 福 K すべて駄 なったとい で 多 = は い とい 1 1 ここが千福 タ タ チ 目 ウ う。 ic う。 ほ どの な 特 なっ 1 に 大き てし ウ 集 モ 7 葛 ユ

は サ 箱 ル 根 0 被 害 15 は 0 サ 多 ル 5 が 0 15 から な 葛 5 Щ ために で ある が、 シ シ の被害が多い そ れ に対して箱 とい 根 わ Ш れ T 0 茶 1 る。 畑

クビ

シ

ン

の被害が出るようになったという人もいる。

特に、 は 夫によっ 0 に 口 そ ク コ お E シ 0 現在でもサツマの被害は甚大で、 ため てシシによる被害を防ごうとしているという。 0 でシシ 畑 に現 は を荒らすことが多くなり、 を追い払うとか、 2 なか 在では、 2 たが、 シシ対策として、 須山で芝の畑 あるいは場所によってはシシの通り道に落とし穴を作っておくとか、 困っている農家が増えてきているという。 サツマを挿すと、 畑 が増え、 の周 进 そのために食物を求めて に杭を打ち針金を結 ところが最近では、 それを掘り起こしてはすぐに食べてしまうことが多い わえコ シシに加えてハクビシンが増加し、 クビシ 1 人によっては、 ル タール ン が箱根山 を塗って防ぐとか もともと箱根山に 、移動してきて、 さまざまな工 トウ とい 廃油

が、 0 近年非常 が ほ あ か る に が 力 に増えていると指摘する人も ح ラス れ が の被害も多い。 力 ラスよけの 裾野市域を歩いていると、 ために設けられた装置である。 る。 ビニー 特に、 ルの 大きな目玉が畑に吊るされ カラス は 1 ウ 七 口 コ シ を食べることが多 てい る を見

化 このようなさまざまな動物は

えば化

かす動物というのが相場であったようである。

キツネは実態としても存在しているのであり、 動物 8 1 る。 おそらく、 そのもっとも代表的 なも すべてのキツネが化かすわけではない のが人間を化 か すことの あるキツネ が、 0 丰 存 在 ツネとい

実態が確認され得る動物であるが、

1

わば幻想の産物として存在

はする

の人に憑いているのは、 てリ 大正 0 頃 箱 金沢 に横になって入ってしまうということがあっ の人で、 沼津のキツネであることがわかったという。 葛山 一の山 中 に入り炭焼きをしている人が 1:0 不思議に思って周 いたという。 そのとき、 キツネが沼津 この人 囲 0 人 が、 々 あ が る へ帰りたいので、 H 5 つめたところ、 丰 ツネ に化

かさ

あ

る家で

は

現在でも

稲荷をまつってい

、る家が

ある。

車 T K -を待・ って帰るために裾野駅までおくってほし 列 途中で 車 0 踊 動きとともに歩いているときに、 り を踊 たりもしたが、 なんとか裾野駅までたどりつい いと言ったという。 突然ころび、 そこで、 ようやく正気に 周 た。 囲 0 人々 か ところ えっ が裾野 が、 たとい 駅 駅 までお金を持 0) ホ 1 4 で到 T 0

1 歩 う。 あ るい たという。 5 その人は、 T は るところで正気に戻っ 葛山 大野 0) 中 原 单 なに行っ 0 Ŧ 日 たところがどこに IJ たという。 で、 大正生まれの女性の祖父が、昔、 IE. 気に戻 5 るの 0 カュ T わ から語ることには、 からなくなり、 大野 さまよい歩い 原 「まあ、 でキツネに化かされたことがあ 提 灯 て、 が きれ 結局、 2 だ 上. ケ た 田 で と言 ボ たと 1

擊 0) 丰 ようなときに、 " たりしたところ、ようやくキツネが出て行ったとい ネ 後のことになるが、 が 憑 V てい この家では簞笥 ると言 葛山 わ れ の中 1:0 この 連 0 中 で、 キツネは黄 の着物 ある女性の の袂にキツネの 瀬川 様子が で撃 すたれ おか 毛 が入っていることが L た \$ 15 ので 0 で、 ある人にみてもらったところ、 後足 0 一本欠けたもの ある 0 で、 縁 であ の下に向 先祖 たと けて 0 撃 0 2 た

三日 とが れ ず、 あ あ る 晩その あ か た。 は b あるとき、 このような話もある。 ままで、 のところを撃ったら死んだという。 几 それを不思議に思っ 日 Ï にしてはじめてキツネの姿に変わ 昔、 上土土 狩 た富沢の人が、 (長泉町) しか L 0) 死ん 天神 鉄砲を持 0 でも娘の姿が Ш たとい に 毎 0 う。 晚 て行きこの娘を撃 き このようなことがあ ま れ つ V たく変わらないので注意して な娘 が あ った。 カン りを点け ところがこの 2 たため て通 に ると いると、 富沢 うこ は